

北海道音更町立下音更中学校3年 宇野 天那

以前我が家に数十年前の中学校の英語の教科書があった。その中に日本が行っている国際協力について書かれている個所があったのだが、特に「h e l p」と「s u p p o r t」の違いについての話が深く印象に残っている。

発展途上国の人達に直接お金をあげたり何かを作ってあげたりする（= h e l p）ことは難しいことではないが、それだけでは真の意味で彼らの役には立つことにはならない。勉強を教えたり仕事のやり方を教えたりして彼らが自分達の力で生活していくための力をつける（= s u p p o r t）ことこそが大切なのだ。そういう内容だった。

「なるほどなあ！」と、日本の国際協力の考え方・取り組み方に感動した。

平成三〇年の日本の海外への経済協力費は五〇八九億円。これは一般会計歳出総額の約〇．五％に当たるそうだ。

この大きな金額に対し、「自分達の税金をなぜ外国にあげなきゃならないんだ？」「外国にお金を援助する余裕があるならまず国民に還元するべきだ」という意見も多くある。

一瞬納得しそうになる。でもそれは、この世界の中で、これまでもこれからも、日本がどの国からも助けられたことがなく、これからも絶対に他国からの援助を受けない、という状況下でのみ受け入れられる意見ではないだろうか。

二〇一一年の東日本大震災。あの時、日本には世界各国から膨大な数の救援物資や寄付金が届いた。被災地の方々はどうにかありがたく心強かったろう。私自身は被災していないが、海外の方の温かい気持ちに日本人として心から嬉しかった。

高額の寄付をしてくれた国のリストに大国と言われる国名が並ぶ中アフガニスタンやセルビア、バングラデシュなど経済的に豊かではない国々の名前がある。日本円で一日の収入が二〇〇円くらいの国もある。それなのにその収入の半分にあたる金額を寄付してくれる人達が数多くいたそうだ。そんなことまでしてくれる理由は、どの国も同じだ。

自分達の国が紛争や災害で困難の中にあった時、日本が助けてくれたからだ、と。

日本は壊れた病院や学校や道路を再建するだけでなく、その国で今後も現地の人困らないように、機械などのメンテナンスや清掃の仕方、維持していくためのノウハウを教え、現地に根付きちゃんと機能していけるようになるまでしっかり指導する。寄付はそんな日本の支援に対する恩返しなのだそうだ。

人は一人では生きていけない、ということは言い尽くされてきた言葉だが、国もまた一国では生きていけない。

「税金」という名のみみんなの「思いやり」のキャッチボールは温かく尊い。このキャッチボールがこれからも続くように、私もわずかながらでも貢献していきたいと思う。

つくば市立みどりの学園義務教育学校 8年

ガリアンド クリスティーナ

日本の小・中学生は、学校に通えることがどんなに幸せなことか知っているのだろうか。

私はフィリピンで生まれた。十歳の時、日本で仕事に就いた父を頼って、来日した。そして、日本の学校に通うことになった。教室に入ると真新しい教科書が机の上に置かれていた。写真やイラストの付いたきれいな教科書に、心がうきうきしたのを今でも覚えている。更に驚いたのは、その教科書は私の物になるということだった。

フィリピンでは、公立の学校に通う生徒は教科書を借りて勉強する。つまり、次の年には、その教科書を別の人が使うということだ。私立の学校は、教科書を買って勉強する。だから、日本で教科書が無償で配ってくれるということに驚き、同時にとてもありがたいと思った。

しかし、十歳の私は日本語が話せなかった。読むことも書くこともできなかった。教科書に書いてあることが何も理解できなかった。でも、私は、私だけの教科書の内容を知りたいと思った。だから、一生懸命に勉強した。ひらがなを覚え、テレビや友達との会話で日本語の言葉をたくさん身に付けていった。教科書に出てくる漢字には、ひらがなでルビをふった。そうして、私の教科書はどんどん私だけの教科書になっていった。

今、私は中学二年生になった。(私の学校では、八年生と呼ぶ。)今でも、私の教科書の漢字には、所々、ひらがなのルビがふられている。そして、知らない言葉が出てくると、どんどん友達や先生に聞いて、新しい言葉の使い方を覚えている。そんな私に、友達が、「なんでそんなに勉強熱心なの。」と聞いてきた。友達は、「勉強って、あまり好きじゃない。めんどろ。」と言った。

彼らは、この当たり前だと思っている日常が、本当はとても恵まれていることを知らないのだ。日本の法律と税金が小、中学生の学ぶ権利を保証してくれているのだ。

フィリピンでは、学校に通えない子供も多い。家族のために、田んぼや畑の手伝い、清掃作業等のアルバイトをするのだ。水道や電気がなく、川の水をくみ、ろうそくで生活している地区も多い。学校のトイレを使う時は家から持ってきたトイレットペーパーを使うことも普通だ。

誰もが平等に学ぶチャンスをもたらせる日本。それを支えている税金。日本の小、中学生に勉強できる幸せをもっともっと感じてほしい。そして、家族や多くの人の税金のおかげで、今の恵まれた生活があるのだと知ってほしい。

私も大人になったら、多くの子供達のため、そして、世界中の子供達が学校に通えるように、自分だけの教科書を持てるようになってほしい。その手伝いができるような大人になれるよう、今日も頑張って勉強しよう。

高松市立龍雲中学校3年 香西 咲月

夏休みの間、私は母と一緒に出勤している。母が勤める会社は子連OKの会社なのだ。幼稚園児や小学生に混じって経理担当の母の傍らで勉強をしている。

そんな毎日にもすっかり馴染んだ八月十日、母が

「今日は源泉所得税の納付を忘れんようにせんと。」

と言った。聞くと社長さんや従業員さんのお給料から所得税をあらかじめ差し引いて、そのお金を毎月一回経理担当の母が税務署に納めているらしい。

「今から税務署に行くん？私は会社で待ってたらええん？」

そういう私に母はこう言った。

「税務署とか銀行に行かんでもインターネットで納めることができるよ。」

母はパソコンで、国税電子申告・納税システム（e-Tax）を立ち上げ、納税額を手慣れた様子で入力し始めた。

「これが済んだら、インターネットバンキングで支払うんよ。」

「ふうん、便利やね。」

前は納付書を手書きで作り、銀行の窓口まで行って支払っていたらしい。

「便利になったわ。」

うれしそうに母は言った。

「五十日（ごとおび）ゆうて、五と〇が付く日は忙しいんよ。銀行も混むし。」

このシステム使うようになってから気持ちに余裕ができたわ。」

私が物心ついた頃にはインターネットは当たり前のようにあったが、母からしてみればそれは目を見張るものであり、それは納税の世界でも同じで日々進化をしているらしい。

「自動車税はクレジットカードで支払えるし、いろいろ便利になったよ。」

と微笑む母。

中学生の私が、よりよい生活や教育を受けるためにたくさんの税金が使われていることは学校で学んだり、身を持って感じてきたが、こんな風に税金が納められていたなんて、母の仕事場について来なければ知るのはまだ先のことであったろう。まだまだ知らないことはたくさんあるが、小さい点と点が細い一本の線につながった瞬間であった。

複雑で面倒であった納税の手続きが日々楽になっているということは、それだけ我々に身近になってきているということだろう。そしてそれは、税金の使い方について一人一人が今までより考えるきっかけにもなるだろう。私が大人になった時は今よりもっとよくなっているだろうか…。いや、よくしなくては!! 少しばかり真面目に将来について考えてみる。夏休みの出勤も悪くないなど思った。

学校法人文理佐藤学園西武学園文理中学校1年

上田 壮一郎

僕の祖父は、四十九歳の時に病気で両目とも見えなくなりました。杖や人の肩などの支えるものがないと、外では安全に歩くことができません。僕は、祖父と年に二回ほど旅行に行きますが、祖父の手を僕の肩に置いて誘導をしています。近くをトラックが通り過ぎるたびに、祖父の手にぐっと力が入るのが肌で感じとれます。毎回、僕が学校や家族の話をして、祖父は最近のニュースなどについて話してくれ、とても楽しい時間を過ごします。しかし、祖父は僕の顔を一度も見たことはありません。

僕は、小学一年生の頃からロボット教室に通っていて、祖父や、他の目の不自由な方がより安全に楽しく生活できるようになるのに役立つ盲導犬ロボットを作りたいという夢を持つようになりました。別れるのが辛くなるから盲導犬は飼わないという祖父に、「おじいちゃん、僕が将来おじいちゃんの一生の友達になれる盲導犬ロボットを作ってプレゼントしてあげるね。」と言ってみた時にとっても喜んでくれたことは、今でも忘れられません。

僕は今回の租税教室で、税金が一番多く使われているのは社会保障だということを知りました。祖父も、障害者年金をいただいたり、杖などの補装具費や住民税の控除を受けたり、薬や医療費を無料にいただいたりしており、その一部は税金でまかなわれていることを知りました。

「働きざかりの時に働けなくなって収入がなくなってしまい、これからどうしようかと悩んだけど、障害者年金や、いろいろな控除を受けられると知って本当に助かったよ。」と祖父が話してくれました。

祖父が税金に助けられているのも、税金をきちんと払う人がいてこそだと思います。僕の父は、小さな会社を経営していて、所得税や住民税だけでなく、法人税や関税など様々な種類の税金を払っていることを、いつも僕や妹に自慢しています。僕の夢を応援してくれており、「小さくてもいいから自分自身に誇れる事業を興して、税金をたくさん払い、社会に貢献できる大人になりなさい。」と言ってくれます。僕はそんな父を誇りに思います。

日本眼科医会の発表によると、目の不自由な方は年齢とともに増えていき、日本の視覚障害者の半数は七十歳以上、六十歳以上で合計七十二パーセントを占めているそうです。これからますます進む少子高齢化社会は、目が不自由なお年寄りが増え、税金を払う人は減るという社会だと思います。僕は、盲導犬ロボットで目の不自由な方の役に立ち、税金もしっかりと払って、二つの意味で少子高齢化社会に貢献できる人間になりたいと強く思いました。

## 「税」で繋がる支援の輪

日高町立門別中学校3年 杉浦 咲瑛

日本では毎年のようにどこかで大きな災害が起こっている。地震や津波、台風や豪雨などの影響で、町が破壊されていく。そんなニュースはほぼ毎年見る。災害は被災者の心を痛め、また、ニュースを見た私たちの心をも痛める。

そんなとき、ほかの国々から支援物資や寄付金が届けられたニュースや、レスキューチーム、ボランティアなどが被災地に派遣され、捜索活動や救助活動、がれきの撤去作業などを行っているニュースを目にする。そういったニュースは私たちを前向きに、明るい気持ちにしてくれる。

私はこれらのニュースを見たとき、正直、なぜこれほどまで日本に親切にしてくれるのだろうと思った。支援活動を行った国々はアメリカなどの先進国だけでなく、アジア・アフリカなどの発展途上国も含まれていたからだ。

その答えは「恩返し」だった。

日本は、私たちがさまざまな場面で払っている「税金」を使って、政府開発援助などといった国際貢献を行っているのだ。政府開発援助とは、先進国の政府が発展途上国に対して技術協力や経済援助を行うことだ。日本はアジアの発展途上国を中心として世界各国に援助を行っているそうだ。日本の政府開発援助によって救われた国々や、自国の災害のときに日本の自衛隊に救われた国々が、日本が被災したときに、

「あのときはありがとう。」

という意味を込め、日本に多くの支援を行った。それは日本の手助けに対する「恩返し」だったのだ。

税金がこのような使われ方をしているのは知らなかった。

「消費税なんてなければいいのに。」

と昔はよく言っていた。消費税がなければもう少し安く買える。だがそれは、税について無知であるゆえの考えだった。私たち中学生が直接払っている税金といえば、消費税くらいだ。たったの8%だが、どこかの国の誰かを救っているのかもしれない。そして救われた国々が、災害による被害にあった日本を、私たちを救う。税金によって世界各国が支援活動で繋がっていたことを知り、心を込めて、しっかりと、税金を支払うべきだと思った。私が大人になったら、困っているどこかの国の誰かのためにも、責任を持って納税したいと思う。

「私たちの夢は国に税金を納めることだ。」

このセリフについて、あなたならどう考えますか。これは、私が何気なく見  
ていたドラマのあるセリフの一部です。この言葉は、私の「税金」についての  
イメージを覆し、私に「税金」を新たな視点から見つめ直すきっかけを与えて  
くれました。

ドラマの主人公は、障がい者の自立に生涯をかけて尽力した整形外科医。実  
在の人物が元になっています。戦後間もない日本では、障がい者に対する福祉  
制度はまだ整っておらず、社会での扱いも決して良いものではありませんで  
した。そこで彼は、自ら起業し、障がい者に職場を提供することから始めまし  
た。社会の一員として、平等で正しい扱いを受けること、それは非障がい者と  
同じように税金を納め、国をつくっていくことだ、と彼は言いました。納税を  
権利として捉えたのです。

私は今まで、「税金」について、「払わされているもの」という感覚で、ど  
ちらかというマイナスのイメージを持っていました。しかし、彼の言葉を聞い  
て、それは間違っていたことに気づきました。社会の時間に、税金は社会保  
障や公共事業の経営などに当てられていることを習いました。どちらも私たち  
の生活に無くてはならないものです。学生の私にも、八パーセントの消費税  
を納められる権利があります。税金について視点を変えただけで、私も国を  
支える社会の一員として認められた気がして、私はワクワクしました。

また、私が税金の大切さを身近に感じたのは、七年前に発生した東日本大震  
災です。海岸沿いの祖父母の家は津波で全壊し、私が好きだった町の風景は、  
震災前の面影すら残さず消えてしまいました。およそ三か月後、祖父母はみな  
し仮設に移ることになりました。それまでは親戚の家に寝泊まりしていたそう  
で、本当にありがたかった、と祖母は話していました。がれきの撤去や道路の  
建設も進み、最近では町の様子も、少しずつですが、震災前の状態に戻りつ  
つあります。あの時、税金が無かったら、今被災地はどうなっていたのでしょ  
うか。どこかに住んでいる、私たちと会ったこともないような人たちが払  
った税金が、復興のために使われ、現在こうして私たちが幸せに暮らすこと  
ができています。「納税」のしくみの原点には、誰もが持つ「助け合い」の  
考えがあったことに私は気がつきました。

私は今まで、教育費の恩恵を受け、そしてそれは成人するまで続きます。就  
職したら懸命に働いて納税し、老年になったら様々な社会福祉サービスを受け  
ることができます。当たり前なことだけれど、全てが一人一人の努力で構成さ  
れているのです。私たち子どもは、この仕組みについて理解を深め、後世に正  
しく残していくことが使命だと思います。

見えないようで、しっかり存在を持って私たちを支えている税金。その恩恵  
に感謝しながら、「助け合う」心を忘れず、きちんと納税して社会貢献できる  
大人になりたいです。

小学校入学を間近に控えた九年前の二月、ランドセル贈呈式で新しいランドセルを贈られた私は、希望に胸を躍らせたことを思い出す。私の住む庄内町では、次代の社会を担う子どもたちが、健やかに育ち、自分の可能性を最大限に伸ばし、将来のまち・地域づくりの礎になって欲しいという願いから、小学校入学前の子どもたちにランドセルを贈っている。また、地域住人が参画し、中学生夢サポート塾という学習会を開催し、私たちの夢を応援してくれる事業も数年前から起ち上がった。このように、私たちが安心して学ぶことができる環境を作ってくれることに、両親をはじめ、懸命に働いた納税者の方々の貴重な税金が使われている。それは、当たり前なのに思われるが、私たち教育を受けるものにとっては、ありがたいことである。

最年少でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんは、十四才のとき、女性が学校に行くことを禁じたタリバンに従わなかったことで銃撃された。彼女の夢は、医者になること。しかし、女性であるがゆえに、その夢は無残にもくだけたのだ。世界には、社会的タブーから、教育の権利が奪われ、幼くして結婚させられたり、児童労働にかりだされたりする子どもも何千万といる。また、紛争や貧困などで、何千もの子どもが命を落としている。マララさんは言う。「教育こそが大きな影響力を与える。」と。

日本は、男女限らずだれでも無料で初等中等教育が受けられる恵まれた環境にある。教科書の裏表紙に「これから日本を担うみなさんへ期待をこめ、税金によって無償で支給されている。」という文が記されている。マララさんのように、学びたいという勉強への飢餓感がある人たちにとっては、うらやましい限りだろう。貴重な税金によって支えられている私たちの学ぶ権利を無駄にしないようにしなければならない。税金の大切さを伝えるための仕事につき、外国と日本の架け橋になりたいと思っている。そのために、勉強にベストを尽くしている。日々学習する中で、新しい発見があると楽しい。自分たちの夢に向かって後押ししてくれる町の夢サポート塾は、学習塾が近くにはない田舎では心強い事業でもある。町の貴重な税金が私たちを未来に向かって羽ばたかせてくれる、そんな環境で学べる自分を幸せに感じる。同時に、庄内町を、日本を支えていくこれからの未来は、私たちの世代に託されているという責任を重く感じる。

私は、ランドセル贈呈式でランドセルを受け取ったときの気持ちを再び思い出している。私たちの夢は、税金の恩恵で支えられている。そのことを自覚し、しっかりと教育を受け、大人となったとき、納税を通して、次の世代の夢を支え、豊かな町や国づくりに貢献していきたいと考える。

## 介護を通して考えた社会保障税

山形大学附属中学校3年 渡邊 ヒカル

「叔母ちゃんが居なくなった。」

昨年、母の叔母が認知症になりました。ゴミ出しに行ったきり戻らず、警察の方に探してもらったことがありました。今話したことも覚えていなかったり、服薬を忘れてたりすることもありました。一人暮らしのため、母が毎日様子を見に行っていました。その後デイサービスや訪問介護をお願いすることができ、母もだいぶ楽になり助かった、と話していました。母の代わりに介護をしてくれるサービスはとても便利だな、と思いました。

こういったサービスは市町村のボランティアではなく、私たちの税金が使われている社会保障サービスです。今回、社会と税との関わりを知るために介護サービスについて調べたところ、母の叔母が受けている介護サービスは、介護保険法に基づき、介護必要度に応じて国からの介護保険支給を受けられる制度であり、その一部を自己負担しているのだそうです。条件を満たせば誰でもこのような医療サービスを受けることができるのはとても素晴らしいことです。

介護について家族で話していた時、父が「日本では皆何らかの医療保険に入って平等に医療を受けられるけど、海外では病院に行きたくても受診できない国がたくさんあるんだよ。」と教えてくれました。そこでアメリカの医療保険制度について調べてみたら、日本のような国民全員が加入する公的な保険制度はなく、人口の十六%に該当するおよそ五千万人が保険に入っていないことが分かりました。所得の低い人は保険に入ることすら出来ず、医療費も日本の十倍以上かかるため、具合が悪くても検査や治療が受けられないのです。保険証さえあればいつでもどこでも公平に医療が受けられることに慣れている私からすると、とても驚きでした。日本は非常に手厚く医療が保証されている国だと思いました。

このような日本の公的医療保険制度は世界保健機関から世界最高の評価を受け、その充実度は経済協力開発機構加盟国の中でもトップレベルだそうです。しかし、このような世界に誇れる日本の医療制度も財源があって初めて成り立つものであり、普段の生活で私たちが納めている税金の一部が、結果として日本の制度を支えていることに改めて気づきました。

国税庁の資料によると、これら社会保障費が歳出の三分の一を占めてトップですが、これは介護サービスを必要とする高齢者が多いことも理由ではないかと思います。授業で少子高齢化について学び、私が五十歳になる頃には、わずか一・二人で一人の高齢者を支える社会になるそうです。税金の負担は大きいですが、そのときに安心して社会保障制度を利用できるための「会費」と考え、今の私に出来ることとして、間接的ですが、納税という形で少しでも介護に貢献していきたいと思います。



税によって輝く日本になる事を願って

真岡市立真岡東中学校3年 仙波 風花

いつの時代も、世の中に取り上げられている話題、「税」。しかし私は、幼い頃から聞きなれているこの話題の議論に、「反対!!」と声を上げる人々の姿だけが印象深く残り、「税＝悪者」というようなイメージを持ち、あまり深い関心を持たずに、特定の誰かが得をして笑顔になり、多くの人々が損をしていて涙を流している、という勝手な概念を抱いていました。しかし、この税に対する課題を前に視野を広げ、税の世界を覗き見てみると、それは、全く無知な恥ずかしい見解で、医療福祉、教育、経済、防衛、公共事業、スポーツなど、人が日常さまざまな形で、関わり生きているあらゆる物に税金の姿はあり、その恩恵を受け、私たちの安全で安定した暮らしは成り立っていて、決して人々の負担になっているだけではなく、暮らしを支える、国を支える、無くてはならない大きな力なのかもしれないと思い始めました。

そんな矢先、パラリンピックを初めて日本に取り入れ、社会福祉法人「太陽の家」の創設者でもある、一九六〇年代を生きた整形外科医、中村裕さんを描いたTVドラマを偶然目にしました。身障者の独立、社会復帰を、全身全霊で目指していた中村先生と仲間が、当時の日本での身障者に対しての間違った認識や偏見の中で、身障者の目指すべき、新しい生き方を受け入れてもらう事は容易ではなく、幾度も大きな壁に阻まれました。そんな中、中村先生は身障者に向け、このような言葉を贈っています。

「身障者も健常者も、社会的に同じである事を証明するためには、職を持ち、税を納めるべきだと思う。」

「そうする事で、初めて社会の一員として認められるのだ。」

と。それを聞いた私は、税とは納める義務の中にしっかりとした価値が存在し、人々をより輝く方向へと導く力になるものなのだと感じました。同じ目線で考えてみると、二〇二〇年に開催される東京オリンピック、パラリンピックに向けての、日本の施設設備におけるバリアフリー化なども同様です。身障者の方の環境の改善や生活の向上は、身障者自身による税金によっても、新しい形へと生まれ変わっているのです。新しい環境が新しい挑戦を生み、新しい輝きをもたらす。そう残し伝えて下さった、中村裕さんのような偉大な先駆者の方々の貴重な経験、そして生き方からも多くの学びを受け、次世代を担う私たちは、そのような社会を創り上げるにはどうしたらよいのかを、考えなくてはなりません。

そのために、税に対する知識や理解を深め、少子高齢化による社会保障という大きな課題を抱えた、これからの日本を支える一員となる一人として、自分の未来に責任を持って進んでいけるよう、税の世界に関心を持ち続けたいと思います。税によって、国も人々の心も輝く日本になる事を願って。

「お姉ちゃん、起きてよ。」

なかなか起きない私に痺れを切らし、妹は私をくすぐり始める。半分眠った状態でくすぐり返し、最後にはいつも二人で思い切り笑ってしまう。これが私と妹の毎朝の儀式だ。それにしても妹は朝からとても元気で太陽のように明るい。十年前、今にも消えて無くなりそうな、小さな命だったとは思えないほどに。

「赤ちゃんがもうすぐ生まれるよ。」

当時五歳だった私は本当に嬉しくて楽しみで、いつもは遊ばない人形でシュミレーションをしたりしていた。でもそんな最中、母が妊娠高血圧症という病にかかり、このままでは母も妹も命が危険であると判断され、予定より三ヶ月も早く出産することになった。僅か五七四グラム、りんご二個分ほどで生まれた妹は、超低出産体重児として新生児集中治療室で三ヶ月程を過ごすことになった。

新生児集中治療室には容態を看てくれる医師や看護師がおり、命を救うためのあらゆる設備と治療が二十四時間体制でなされていた。私はそこで初めて妹と会った時のことを昨日の日のように覚えている。想像していたようなふっくらとした赤ちゃんではなかったけれど、保育器の中でたくさんの管に繋がれながらしっかりと息をしていた。小さな手に触れた時、お姉ちゃんになったのだなと嬉しくなった。その当時のことを母に聞いたら、治療や入院に相当な費用がかかったが、それらの費用は税金から国と県が、養育医療給付で全額賄ってくれたということだ。

「その時は無我夢中だったけど、今考えるとお金の心配を一切しないで子供の命とだけ向き合えたことは本当に有難かった」

と母は十年経っても感謝している。私達家族の幸せは税金に支えてもらったのだと分かった。

日本では税から成る様々な制度や保険によって、医療がとても受けやすくなっている。でもこれは実は当たり前なことではないのだ。例えばアメリカは個人で保険に加入するため、自分の受ける治療が保険適応内かどうかで判断をすることも多いと聞く。そのため十分な治療を受けようとすると、高額な治療費を自己負担しなければならない。それに比べると日本は国全体で命を守ってくれる、非常に恵まれた環境なのだ。

妹が小児科に行ったときに先生に言われた言葉が私は忘れられない。

「あんなに小さく生まれたのにこんなに大きくなって立派ね。小児科に通う小さく生まれた赤ちゃんを持つお母さん達に、あなたが元気であることを話すと、皆安心して笑顔になるのよ。」

十年前に税に支えてもらった小さな小さな命が、今は他の人を元気付けて支えている。私は「税」という言葉の中に温かさを感じた。そして心と心を繋ぎ、波紋のように広がっていくのも税の姿の一つなのだと気が付いた。

私もとうとう人生を左右する、大事な節目を迎えることになった。親や学校の先生たちと共に、自分にとって、最初で最後の高校進学について考える時期がきたのだ。

両親は私が幼い頃に離婚して、今は母親が女手一つ、中学三年生の私と一つ年下の妹を育ててくれている。高校進学については、ずっと前から、公立高校を目指していた。大変な思いをしながらも、ここまで育ててくれた分、必死に勉強して、学費が安く済む公立高校に入学すると決めていたからだ。憧れの私立高校もいくつかあったが、学費が高そうという固定観念もあり、なかなか私立高校に目を向けることはなかった。

しかし、中学三年生になり、進路について調べていると、驚くべき情報が見つかった。自分が志望校として考えていたのが公立高校であったからこそ、その情報は今までの概念を覆すようなものであり、同時に未来の進路が幅広くなったように思えた。

私はその時、「就学支援金」と「父母負担軽減事業補助金」という二つの制度を知った。

「就学支援金」とは、私立高等学校に通う生徒を対象として、所得に応じて、国から支給される補助金のことである。所得要件といっても、年収約二五〇万円未満から約九一〇万円未満までという広い範囲で適用され、支給額は違ってしまいが、多くの家庭が利用することができるのだ。また、私の家庭のように、ひとり親の場合や家計が急変した家庭は、最大の支援金を受けることが出来るそうだ。

そして、私が驚いたのは、「父母負担軽減事業補助金」の方である。これも主に授業料の負担・支援等の制度であり、国からの支援金に加え、埼玉県独自の上乘せ補助として、成り立っていることが分かった。さらに施設費や入学金の免除まで、手厚いサポートをしてくれるのだ。

国だけではなく、県からの恩恵も受けることになる。そのお金は、やはり税金で賄っていたのだ。しかし、考えてみると、これらの支援だけでも相当な金額が必要である。莫大な金額であるが、改めて、教育費という制度に助けられていることを実感し、感謝の気持ちでいっぱいである。国民から集めた税金は、私たちが幸せな生活を送る為に、多くのことに使用される。教育費は、受験の近い私にとって、一番身近な税金の存在であり、本当に助かっている。

低所得世帯と高所得世帯のバランスをあわせることは、とても難しいことだが、支援金制度などによる税金の使い方次第で、私たち低所得世帯にとって、有難い存在になるのだ。また、これから先、人々の生活を向上させていく為に、支援金制度のような税金の使い方を広めていくべきだと思った。

こんな素晴らしい国に生きていることに私たちは感謝しなければならない。だから、私は、多くの人に「ありがとう。」と伝えたい。

みなさんは税金と聞いて、どのようなイメージを持っているだろうか。「高い」「何に使われているのか」その人それぞれ思う浮かべるものは違うだろう。その中でも私は「取られるもの」というイメージが強かった。十七年ぶりに8%に消費税率が引き上げられた時も、引き上げの数か月前から「増税前の今がチャンス。」などとうたったCMが頻繁に放映されていた。そんな時、ふと「なぜ私たちは国からお金を取られなくてはいけないのだろう。こんなに多くの税金を支払っているのは日本だけなのでは。」という疑問が頭をよぎった。

そこで私は、世界の税金国民負担率について調べてみた。「もしかして日本一位かも。」と思っていたが日本の負担率は約30%。以外にも世界では低い部類に入っていたのだ。一番の負担率だった国はデンマークだった。その割合は驚異の約45%。「デンマークに住んだら大変そうだな。」とその頃は思っていた。

それから数か月たったある日、何気なくテレビを見ていると、「豊かなデンマークの暮らし」といった番組が放送されていた。その番組の中では、医療費・教育費無料、国からの生活費の支給などが紹介されていて楽しそうに暮らす人々が映っていた。いいなあと思いつつ番組を見ていると、ふとあるテロップが目飛び込んできた。「このような暮らしができるのは税金があるから」そこで私はデンマークが多くの税金を払っていることを思い出したのだ。

税金を支払うことによってデンマークでは豊かな生活ができています。果たして日本ではどのような使い方がされているのだろうか。そう思い調べてみると、数え切れないほどの税金の使い道があることを知った。エネルギー対策・ごみの処理・地域医療の充実などだ。「本当に幅広いな。」と思いつつ本を読み進めると、災害復興の記事が目にとまった。それと同時に数年前に起こった土砂災害がさっと頭をよぎった。平成二十三年七月、連日降り続いた大雨により、私の家の裏山は土砂崩れを起こした。そんな時、国に改修工事を行って頂いた。そこで使われていたのが税金だったのだ。こんなに身近なことだったのに、知らないうちに税の恩恵を受けているなんて……。もし税金が無くて、工事をする事ができなかつたら大好きなこの地域に住み続けることができなかつたかも。税金のありがたみを感じられた瞬間だった。

今までの私は税金について否定的なイメージを持っていた。しかし税金について考えたことで知らないうちに税金の恩恵を受けているというのを知った。これは決して私だけではなく、みなさんにも共通することだと思う。『明るい未来へ少しずつ貯金』そう思って税金を納めることで、未来の日本に少しでも笑顔が増えていたら私は嬉しい。

## 税は笑顔をつくる

学校法人聖啓学園佐久長聖中学校 3年 高橋 茜

木の香りがすると、私は真っ先に思い出すことがある。それは、私が卒業した小学校の新しい校舎のことだ。私たちの住む長野県産のカラマツ材が使われた優しい雰囲気のある教室は、とても居心地が良かった。また、体育施設には、省エネに配慮した最新の設備が整っていた。この恵まれた環境も、税のおかげだったと知ったのは、つい最近のことだった。

今まで私は、税について、まだ働いていない自分には、関係のないことだと思っていた。だが、こんなに身近なところで税が使われていたのだ。それを知ることができたきっかけは、国民の三大義務のひとつである納税について、自分がとても無関心だったため、これではいけないと思い、税の使い道を調べてみたことだった。

調べていく中で、私が特に興味を持った税の使い道が、教育だった。私が通っていた小学校は、児童が年々増加し、全校児童は、千人を超えていた。校舎は、増築を重ね、まるで迷路のようだし、体育館は、全校が集まるととても狭く感じた。運動会では、校庭に人があふれ、応援に来てくれた人は、座る場所もなくずっと立ったままだった。このように、不都合なことが多く、学校が二つに分離することになった。小学校新設だけでなく、もとの小学校も大規模な建て替えが行われ、平等に最適な環境が与えられることとなった。私たちは、新しい環境で楽しく学び、遊んだ。ここにあった笑顔のものは、税だったのだ。

国では、校舎や体育施設建設費用として、年間七百六十六億円、義務教育諸学校の児童生徒が使用する教科書無償配布費用として、年間四百三十二億円の税金が使われるそうだ。これだけの税金が教育に使われることを考えると、未来を担う立場の者としての責任を強く感じた。そして、税のおかげで、私たちは、平等に恵まれた環境で学び、笑顔で過ごせるのだとわかり、税のありがたみを実感した。

さらに調べた時、もし税がなかったらと考えると、不安も感じた。最も感じたのは、一番多くの税が使われている社会保障だ。税がなかったら、介護サービスも今のように利用できないだろう。以前、私は、介護施設で職場体験をさせてもらったことがある。そこには、入所者の方が安心して過ごせるよう、様々な工夫が施されていた。たくさんの笑顔があった。ここにも税が使われている。

「税は笑顔をつくる。」これは、税について調べたことにより、私が思ったことだ。税は、全ての国民にとって、不可欠なものだとわかった。税のおかげで、たくさんの笑顔がある。将来、私も社会に出て一生懸命働き、しっかりと納税できる人になろうと思う。そのために、今の私にできることは、税によって整えられた恵まれた環境で、精一杯勉強することだろう。これからも、全ての人が、笑顔で過ごせる社会が続くことを願って。

## 税金によって守られる夢

印西市立西の原中学校3年 田村 寧々

先日、何気なくテレビをつけた時に放送されていたのは学校に行きたいという願いが叶わない子供たちの番組だった。世界には、学校に通うことができない子供たちが約六千百万人いる。学校に通えない子供たちは、必要な知識を学ぶことができず、つきたい職業につけない。貧困家庭に生まれ、幼いころから労働をせざるを得ない子供もいる。ショッキングな事実が多い中で、私が最も衝撃を受けたのは、世界には自分の名前が書けない人が八億人もいるということだ。

私はこれまで、無償で学校に通い、教科書をもって勉強することに何の疑問も抱かなかった。当然のように税金の恩恵を受けてきた私だが、当たり前のことではないという現実を目の前に突き付けられたような気がした。これまで「税金」は、どこか大人の世界の、自分とは関わりのない遠い話のような印象を持っていた。しかし、世界の教育の現実を知り、自分の生活が税金によって守られ、支えられているということを実感できた。そして、税金はとても身近なところにあっただと気付いた。

私の教科書には、「この教科書は、これからの日本を担うみなさんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう」と書かれている。詳しく調べてみると、日本では、校舎や体育館などの建設、高等学校無償化、奨学金の貸付などの費用を含めた文教関係費に年間四兆四八八億円が使われていることがわかった。義務教育の九年間で、一人当たり約八四三万円の税金が使われていることを知り、とても驚かされた。

学校に通って勉強をし、自分の知りたいことを学んだり、将来就きたい職業を思い描いたりできるのは、当然のことではなく、恵まれたことなのだと感じた。教科書は無料なのではなく、税金から買ってもらっているにすぎない。未来を背負う私たちに、出資してもらっているということをしっかり心に留めて、これからはさらに勉強に励みたいと思う。

税金は、公共事業関係費や社会保障関係費にも使われており、税の恩恵を受けたことがない人はいないのではないだろうか。さらに、税金は経済協力費として開発途上国の経済援助のためにも使われている。将来、自分の払った税金の一部が遠い海の向こうの国で役立っているかもしれないと思うと、とても誇らしい気持ちになった。これからは、税金がどのようなことに使われているのか、しっかり興味をもち、知識を深めていきたい。そして、税を払う義務がある理由を理解した上で、社会の一員として責任を持って税金を払い、社会参加できる大人になりたいと思った。

今年の初夏、西日本豪雨がありました。とどまることなく降り続けた雨により、川が氾濫し家に流れ込む大量の土砂に衝撃を受けた人も多いと思います。被害の少なかった地域でも、水道管が破壊され、水が出なくなるといった生活に支障をきたすことが発生していました。

そんな時、被災地に水を供給する自衛隊の姿が印象的でした。当時、一府七県から、およそ三万人もの自衛隊が派遣されたそうです。休む間を惜しみ、豪雨の後の記録的な酷暑の中、未だに見つからない行方不明者の捜索、土砂の撤去作業など肉体的労働もたくさん見られました。

これだけ多くの自衛隊が派遣され、手早い行動が取れているのは税金のおかげです。しかし、私は税金に対して良い印象をもっていませんでした。私達の一番身近な「税」というのは消費税です。私が自分でものを買うようになって、消費税を意識し始めたのは最近でした。なぜ消費税がつくのか、その税は何に必要なのかが私にはまだわからず、正直、本当は必要ないのではないかとさえ思っていました。

では税金がなかったらどうになってしまうのか、インターネットで調べてみました。ゴミ収集、公園、交番、救急車を利用するのにお金がかかってしまったり、医療費が全額負担となってしまう、「私たちが豊かな生活を送るために皆に必要なこと」、いわゆる公共サービスができなくなってしまうようです。そうならないように、国民から税金を徴収して、これらの利用料金をなくしています。私達はこういった税の使いみちをよく理解した方が気持ちよく税金を納められるのではないかと思います。私達が安全に暮らしていくためにも、税金は、大事にしていくべき大切なものだったのです。

今回の西日本豪雨では、被災地に三百五十億円もの普通交付税が交付されたそうです。これも税金です。私達の納めていた税金は、被災者の力になっていたのです。そのお金で少しでも早く復興活動を行い、被災者の負担を減らし、安心することができるのだと思いました。

先日、消費税が十パーセントに引き上げられることが決まり、世の中は賛否両論の声が上がっていますが、こういった災害の時に、私達は税金の補助のもと、支援を受けることができます。つまり、税金に助けられているということです。そのことを考えて、私は社会人になった時、快く納税をしようと思いません。

## これからの日本の社会

東京都立富士高等学校附属中学校3年 太田 久美

皆さんは道路や信号、公園などの公共施設は何でつくられているか知っていますか？

そうです、税金です。質問してみると、だいたいの方が知っていますが、普段「これは税金でつくられているんだな」と考えて利用する人はほとんどいないと思います。考えてみると意外と税金でつくられているものはたくさんあり、私たちの生活は税金に支えられていることが分かります。税金は他にも警察や消防、農業・漁業の支援などにも使われています。だから税金は私たちが生活する上で欠かせないものなのです。ではそんな税金はどのようにして集めているのでしょうか？

税金の種類には直接税と間接税の二種類があります。直接税の代表的なものには所得税や法人税、相続税、贈与税などがあります。これらは利益や財産にかかる税です。他にも自動車や土地、家屋にかかる税などたくさんあります。間接税の代表的なものには消費税などがあります。消費税は商品を買ったりサービスを受けた時にかかるものです。他にもたばこやお酒、温泉にかかる税などたくさんあります。このように税はいろいろなものにかかっていて、国民全員から税金を集められるようになっています。

現在、消費税率は八パーセントですが、二千十九年には十パーセントに上がる予定です。このことについて賛成意見や反対意見はたくさんありますが、私は賛成です。今、日本では少子高齢化が進んでいます。今後は今以上に働き手が減り、高齢者が増えていきます。働き手が減ると所得税や法人税での歳入が減ります。所得税と法人税での歳入の合計は国の歳入の三十二パーセントを占めているので、所得税と法人税での歳入が減ることによって国の歳入もだいぶ減ってしまうと考えられます。そこで所得税や法人税と同じくらい集められる消費税を増やすことは良いことだと思います。また、消費税は所得税や法人税と違い、子どもから高齢者まで多くの人にかかる税です。少子高齢化に関係なく税を集められるという点も良いことだと思います。しかし税金の使い道で一番多いのは社会保障関係費です。高齢者が増える中、社会保障関係費は年々増加しています。そのため、これからはもっとお金が必要になると思います。消費税率を上げるだけでは足りません。

その対策の一つとして、働き手を増やすことが考えられます。例えば、育児と両立しやすい環境を整え、働く女性を増やします。定年を延ばし、高齢者でも働きたい人は働けるような環境をつくります。このようにできることはまだまだたくさんあります。大事なのは、一人一人が今の社会について関心をもち、税の大切さを知ることです。そして全員が税金を払い、お互いに支え合えば、よりよい社会をつくることができると思います。私ももっと税について知り、今後の社会について考えていきたいです。



今夏、西日本は甚大な被害を受けました。テレビでは連日、被災地の過酷な状況が映し出されました。直接の支援が出来ないことをもどかしく感じていた母がふるさと納税で被災地に支援ができることを知り、いち早く、寄付をしました。

ふるさと納税について私は「特産品が貰えるお得な制度」という認識で仕組みや使い道についても何も知らなかったし、特に興味も持っていませんでしたが、被災地へ寄付ができるなど、助けを必要としている地域に自分の意思で、直接、支援ができるということを知りました。

仕組みについても調べてみました。自分が住んでいる地方自治体へ納める住民税や所得税の一部を自分の意思で応援したい地域に寄付することができるのです。過疎化が進んだ地域と都市部では税収の格差が大きく、十分なサービスを受けられない地域があります。ふるさと納税は地域格差是正を目的としてできた制度でした。

私は、税金の使い道について国や自治体に任せるものであって、自分で使い道を決める事など考えたこともありませんでした。

もちろん、今までも税金により様々なサービスを受けることができました。私が住んでいる江東区では中学卒業するまで医療費を全額負担してくれます。妹が大怪我をした時も個人負担はありませんでした。「本当に助かった。」と母が言っていました。このように税金のおかげで安心して生活を送ることができています。しかしながら地方によっては財政が厳しく、必要なサービスを提供できない地域もあります。そういった地域へ寄付することで助け合うことができると思います。

災害があった時、助けたい気持ちがあってもなかなか動き出すことができない人がいると思います。母もその一人でしたが、ふるさと納税のおかげで寄付することができました。ふるさと納税が身近であったこと、また手軽に申し込める利用しやすさが今回の寄付につながりました。

このように本当に困ってる地域を助けることができるふるさと納税ですが、問題もあります。特産品目当てで、一部の地方への寄付が集中し、自分たちが住んでいる地域の税収が減ってしまったり、本当に支援が必要な地域に寄付されないということです。このような現状が続けば、支援すべき地域を助けられない上、住んでいる地域で必要なサービスの提供が難しくなってしまうことも考えられます。私達の大切な税金です。必要な時に必要な地域へ寄付をするということをよく考え、見極めることが重要だと思います。

「誰も置き去りにしないために」

大田区立南六郷中学校3年 東使 未久

二〇一五年九月に国連で、世界が合意した一七の目標「SDGs」が採択されました。これは、二〇三〇年に向けての「持続可能な開発目標」で、貧困や健康と福祉、教育や格差、平和、地球温暖化の問題などを挙げています。私はこの目標を掲げる理念「誰も置き去りにしないために」に共感しました。そこで税金との関わりについて考えてみました。

私は中三で来年に受験をします。受験生は勉強のことだけを考えていれば良いと思いますが、高校では学費など様々な費用が掛かることも知っています。進路説明会では、都立高校の授業料無償化や、私立高校の就学支援金、授業料軽減助成金、奨学給付金などの制度があることを聞きました。家庭の事情があっても教育を受けたい人みんなが高校へ行け、格差が無くなることはとても良いことだと思います。今、改めて考えてみると、それは税金から使われている必要なお金だと感じることができました。

また、最近のニュースでは、地球温暖化が原因と思われる異常気象から、西日本豪雨などの尊い命が失われるような災害が発生しています。災害救助や仮設住宅の設置、支援金、その後も生活が苦しくなるなど、生活支援にも税金が使われていると思います。いつ自分や家族が災害に遭うか分かりません。被災された方々が置き去りにされるような社会にしてはいけないと思います。

一方、世界に目を向けてみると、発展途上国では、貧困や飢餓、十分な教育が行われていない、飲み水が無く衛生状態が悪い、安全でクリーンなエネルギーが無いなど、まだまだ多くの問題を抱えています。日本の税金は国民の為だけに使われるものではなく、そのような国や地域に、経済的、社会的開発、あるいは福祉向上に貢献することを目的とし、技術協力など直接的な援助を行うことや国際機関へ資金を提供することにより国際社会の平和を願って、世界の人々の為の支援や援助する活動にも使われています。私は、貿易や人的交流など、世界とのよりグローバルな関係を重視しなければならない時代になっていると思います。自国のことだけを考えることは、結果として自国の利益や国民の生活を損ねてしまうような気がします。このことから世界と協調する税金の使い方は必要なものだと考えます。ただ、国内の問題、海外の問題とバランスの良い税金の使い方をどう考えていけば良いか、正直、まだ分かりません。

私も、「SDGs」一七の目標がゴールとする二〇三〇年より前に社会人として税金を払うようになります。私が納めた税金が「誰も置き去りにしないために」使われ、日本でも、世界でも、平和で持続可能な社会を創るために正しく、そして、無駄なく使ってもらいたいと思いました。税金のことを考えることが、私の将来や日本と世界を考える機会になり、とても勉強になったと思います。

## アメリカと日本での税の仕組みについて

川崎市立大師中学校3年 小川 美菜

みなさんはアメリカの税の仕組みと日本の税の仕組み、どちらの方が良いと思いますか。私は、親の転勤で五年程アメリカに住んでいたことがあります。その時に特に気になったのは、州ごとに税金が異なっていた点です。なので今回、アメリカと日本の税の仕組みをしっかりと理解して、どちらの仕組みの方が良いのかを独断と偏見で選ばせてもらいました。私は、日本の税の仕組みの方が良いと思います。その理由は、三つあります。

まず、国内での税制の差です。アメリカの税は大きく分けて三種類あります。所得税、固定資産税、そして消費税。それぞれの税率は、州ごとによって大きく異なっています。例えば、カリフォルニア州にあるロサンゼルスでは九・七五%ですが、オレゴン州やモンタナ州では0%です。すると、税制が有利な州と不利な州の差が大きく出来てしまっています。それに比べて、日本は全国税率が統一されているので、差が出来てしまう心配はアメリカより少ないと思います。

次に、所得税率の違いです。日本での所得税は、最低で5%、最高で四十五%。これに対してアメリカでは、最低で10%、最高で三十九%となっています。このことから、アメリカは日本に比べて低所得者への所得税が厳しく、高所得者への所得税は甘いことが分かります。これを続けることによって、どうしても貧富の格差がより広がってしまうのではないかと思います。なので、比較的低所得者に甘く、高所得者に厳しい日本の方が貧富の格差は広がりにくいと思うので良いと思います。

最後は、医療についてです。日本では税金の扶助費によって、重い病気を患っている方や病気が原因で生活に困っている方への支援が行われています。この制度によって、日本中の多くの方が過去にも現在にも助けられてきていると思います。しかしアメリカでは、まず貧乏だと治療すら受け付けてくれない場合があります。また、日本では救急車は税金で賄われているため無料ですが、アメリカでは約三〇〇～五〇〇ドルの料金が発生してしまいます。これらの点でも、日本の税金の仕組みは日本国民に対して充分良心的だと思います。

以上の三つの理由から、私は日本の税の仕組みの方が良いなと思いました。

税とは、私たちにとってとても身近なものです。しかし、税の仕組みや行方をしっかりと理解している人は、決して多くはないでしょう。私もこの作文を書くまでは、税についての知識はとても曖昧なものでした。もっと、税のことを広めていく必要があると思います。税の本質を知ることによって、自国の良さが見えてきたり、新たな発見があるかもしれません。

## 大切な税金

山梨市立山梨北中学校3年 広瀬 愛菜

私の家庭は、私が三歳二ヶ月の頃から母子家庭です。物心ついた時にはもう母と二人きりの生活に慣れてしまっていたので、一緒に住んでいた頃の父の記憶はほとんどありません。母は朝早くから夜遅くまで毎日懸命に働いていますが、共働きの家庭と比べれば収入は多くはありません。親の事情で周りの子たちよりも経済的に恵まれていないと思っていた私は、幼心にもなんだか不幸なのではないかと疑問を抱いていました。

しかし、社会の授業で税金について学んだことをきっかけに私の身近なところで使われている税金はなにかと母に尋ねてみたところ母子家庭への税金からの支援について知ることができました。それは主に、児童手当や乳幼児・学童医療費助成、所得税や住民税の免税など家庭の収入によって様々です。これらの支援は全て国民が納めている税金から支払われています。これらの制度があること、そして私が思っていたよりもたくさんの金額が税金から支払われていることにびっくりしたと同時に、この制度がなければ私の今の生活は大きく変化するのだということがよくわかりました。さらに、こうした税金の制度があるからこそ私は共働きの家庭の子と大きな差がなく勉強や諸活動に取り組んでいるのだと感じました。

こうして特別の人々を支援する制度だけではなく、もっともっと私たちの身近なところにも税金の恩恵があることを忘れてはいけません。例えば、私たちが毎日通う学校も、毎日使う道路や信号機も公共施設として多くの人々が利用するもの全てが税金のおかげで作られているのです。

税金は納める時には高いと躊躇してしまうこともありますが、きちんと納めることによって自分のためにも誰かのためにも役立つものなのです。もしかしたら、税金を納めたり支援の制度があることは、全ての人が同じだけの金額を納めたり受け取ったりするわけではないので、平等とはいえないのかもしれませんが、こうした税金の制度があるから国民の一人ひとりが暮らしやすい環境をつくることができるのではないのでしょうか。

こう考えるようになった私は、今後、税金からの支援制度について感謝の気持ちをお忘れなく心に誓いました。また、大人になって働き、自分のお金で誇りを持って税金を納めようと決めました。だからこそ、その大切な税金を無駄のないようにしっかりと使ってほしいですし、その役立て方を国民全員が理解し、一人ひとりがこれからも誇りを持って納められる社会、税金であって欲しいと思いました。

## 救急車を呼ぶということ

富山市立南部中学校 1年 大石 莉子

四年前、我が家は救急車のお世話になったことがある。母が調理中に鍋をひっくり返し、左足に大火傷を負ったのだ。しかし、その時母は「大丈夫。タクシーで病院行くから。」と言い張った。その後、母はみるみる真っ青になっていき、父が慌てて一一九番に電話したのである。救急車はすぐに到着し、病院に搬送してくれた。母はしばらく入院し、点滴や処置を受け退院した。今では母の足に跡は残るものの、後遺症もなく過ごしている。

一度、母に「どうして救急車をすぐに呼ばなかったの？」と聞いたことがある。その時、母は、救急病院で看護師をしていた時の話をしてくれた。救急病院では、同じ人がよく救急車で搬送されてきたそう。しかも、その人は軽傷で診察を受けるとケロッと帰宅する。そのため、病院の診察は遅れてしまうことも多かったそう。そして、ある時またいつものようにその人が搬送されてきた。その後、すぐに処置が必要な急患がいたにも関わらず、ベッドがなく急患の命が危ない事態になってしまった。その急患はその後元気になったが、母にとって納得できない出来事だったそう。その事があったから、母は救急要請をしばらく拒んでいたということだった。軽傷では救急車を呼ばない。救急車で運ばれると病院の外来がマヒする。色々な思いがあって、母は救急車を安易に呼ばないと決めているそう。

日本の救急車出動件数は昨年六三四万回で、過去最多を更新した。そして、その内の半数が軽傷だそう。今、病院を見つけるのが面倒、タクシーで病院に行くと料金を支払わなければならない、など自分勝手な理由で救急車を安易に呼び出し使用する人が多いことが問題となっている。救急車は一回出動するのに、四万五千円の費用がかかる。このお金は、市民の税金でまかなわれている。「税金を払っているのに何が悪い。」と救急車で搬送された人は言ったそう。しかし、急を要しない救急要請を控えるだけで、救急車の出勤回数も費用も半分になる。また、受け入れる病院も適切に必要な処置を患者に出来る。一人一人の心がけで様々な無駄がなくなるのではないかと思った。

私が大人になったら、税金を納める義務が生じる。私は、しっかり義務を果たしたいと思う。今、困っている人、今後必要になるかもしれない人、それは未来の自分かもしれない、と考えながら。母は「やっぱり、あの時救急車ですぐ運んでもらって良かったわ。死んだら嫌やもんね。」と言っていた。私たちは、救急隊の方、病院の方、また税金を納めてくれる方のおかげで今日も笑顔で暮らしているのだと思った。

## 納税の大切さ

穴水町立穴水中学校 3年 泉 紗也香

税金を納める「納税」は国民の三大義務の一つです。納税によって、私達の町は安心して住み心地の良いものになっているのです。税金の使われ方は様々でどれも欠かせない保障ばかりです。例えば、学校にある机や椅子などは税金で購入されたものになります。

みなさんはこの言葉を見たことがありますか？「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。」この言葉は全ての教科書の裏表紙に記されています。私達学生にとって身近な教科書は、税金によってまかなわれているのです。他にも、医療や介護が該当する社会保障は、税金の55%が使われているそうです。これから少子高齢化が進む日本にとって重要な役割を果たしているのです。このように私達は税金によって、色々な場面で支えられているということが分かります。しかし、この納税の義務があるにも関わらず「滞納」という形で、税金を納めずに生活している人達がいることを知り、衝撃を受けました。このことから、なぜ義務である納税を怠って滞納するのか調べてみることにしました。まず、滞納と聞いて私は生活が苦しい人や、借金をしている人がやむを得ずしているのかなと考えていました。でも実際は、分かってて滞納している人や知らず知らずのうちに…という人もいることが分かりました。滞納は納税を長引かせているだけなので納税の義務からのがれることはできません。なので滞納を続けると督促状や催促状が届き、強制執行という注意が促されます。この強制執行とは、預金や給与などが差し押さえられることをいいます。しかもそれと同時に「延滞税」という税金も関わってくることも知りました。延滞税は滞納している金額が大きいほどだんだん増加していくのです。なので注意を促す、催促状を無視し続けるとその分、延滞税は膨大な量となっていくことに気づかされます。国税庁の調査によると滞納の発生率の割合の推移は減少傾向にあります。だけど整理済額つまり合計金額は今年だけで七千二十四億円という大金が滞納されていたことを知り、大変驚きました。

納められるべき税金によって配分される保障が滞ることはあってはならない事だと思います。納税をする大人は子供や老人の立場に必ずなります。自分や家族に返ってくることを考えて、きちんと納税をしていただきたいなと考えると共に、私は今もこれからも安全で明るい町でいて欲しいと思っています。そのためにも一人一人がきちんと税を納め、その税を町に有効に使う必要があると思います。私はまだ学生なので納税をしていません。だからこそ、納税をしている多くの大人の方々に感謝し、自分も大人になったら未来をより明るくするために納税をしたいと思っています。

## 私と税

浜松市立中郡中学校 3年 酒井 麻衣

「今日から、納税制度を廃止します。」

一年前、国の行政機関はこう発表した。国民のほとんどは喜んだ。私の町でも、消費税がなくなり、物を定価で買えるようになった。父の給料から、税金が引かれることもなくなった。タックスフリー・カントリー。世界からはこう呼ばれ、浮足立っていられたのは、長くても一週間ばかりだった。税がなくなった事により、学校の授業や教科書が有料になった。事件や事故で、警察や消防を呼べば、お金を支払わなくてはならず、犯罪は日増しに増加した。酒税・たばこ税もないため、安くなったビールやたばこを買い、沢山の人が不健康になった。道路の白線が消えても、道路に穴があいたり、凸凹になっても、もう誰も整備をしてくれない。

「こんな日本は嫌だ!!」

もし、納税制度がなくなったら…と想像していた私は青ざめた。私は、東京上野税務署のタックス☆スペースUENOへ行き、税について学んできた。担当の方から、税についてのお話を伺うと、私達の税への認識が間違っている事に気付かされた。私達が国へ納める税は、消費税や所得税、住民税など沢山あるが、その全てを私達はお金で支払っている。しかし、私達に使われる税金は、例えば医療であったり、教育であったりと、公共サービスや公共施設となって、私達の暮らしの一部として、利用されている。お金で払ったものが、お金で返ってこない。このことが、私達の認識とずれている所だ。道路を転ばずに歩ける事、学校で授業を受けられる事。これは、私達にとっては「当たり前」の事だ。税金を払うと、それは私達にとって、「当たり前」の事として返ってくる。つまり、税金の有り難みを、私達は自覚しにくいのである。

例えば、学校の授業だ。私達の教科書は税金から支払われる。しかし、それは私の家族が払った税金が全てではなく、教科書代のほとんどが、他県の会った事のない人たちが納めてくれた税である。先生の一回の授業には、生徒一人あたり、六百円が支払われているのですよ、と担当者の方が教えて下さった。私はとても驚いた。私は六百円の価値のある授業を、小学一年生から今まで、一万回以上受けてきたのである。この事を知ってから、一回一回の授業をしっかりと受けて、先生の話も、今まで以上に真面目に聞こう、と思った。

今の私が直接払っているのは、消費税ぐらいだ。しかし大人になるにつれ、沢山の種類の税と出会う事になる。その時に、「なんで税なんか…」と思うよりも、「この税金は何に利用されていて、どう役立っているのか」「もっと良い使い道はないのか」と、主権者意識を持てる人になりたい。そして、今の私に出来ることは、しっかりと勉強をしたり、友達と仲良くしたりすること。そして、税について正しい理解をし、「当たり前」に感謝をすることだ。

## 税に感謝

藤枝市立青島中学校3年 原 美羽

特別な原因などではなく、背骨がねじれを伴い湾曲する。湾曲が進行すると内臓が圧迫され消化器や呼吸器障害などの異常が出現することもある。これが私の患っている特発性脊柱側弯症という病気だ。曲がった背骨は手術するしか治すすべはなく、今年の夏、私は手術を受けた。手術にかかる金額は五百万。背骨を真っすぐに矯正し固定するための器具がとても高く、私はとても驚いた。私の手術のせいで家族の負担や迷惑になってしまうのではないかと不安になった。

でも、本来は自己負担金三割として百五十万の支払いをしなければいけない所、実際に私たちが支払ったのは、保険適用外の食事代と病衣のレンタル代だけだった。

それはなぜか？私は税と大きく関わっていたことをここで知った。それは「こども医療費助成制度」のおかげだったのだ。

「こども医療費助成制度」とは、各自治体により内容に違いはあるが、藤枝市では市内在中の健康保険に加入している十五歳までのこどもが対象で、通院は一回五百円。上限は月四回までで五回目以降は自己負担金なし。入院も自己負担金なしである。つまり、この制度のおかげで、私は入院費や手術代を支払わずに済んでいたのだ。

でも、ここで勘違いしてはいけないのは、自己負担金なし＝無料ではないということだ。自分でお金を支払っていなくても、診療費用は保険と税金で支払われているのだ。

だから、この制度があるからと言って、軽症なのに過度な受診や検査をすれば公費負担の増大を引き起こしてしまうということを、私たちは自覚しなければならぬ。

もしも、この制度がなかったら、私は手術を受けられず生活に支障がでるようになってしまっていたかもしれない。そう思うととても怖くなり、手術ができて本当に良かったと思う。

今、私たちが、こうして病気になったらすぐに病院を受診でき、定期検診のために病院へ通えるのは、税のおかげなのだ。

来年から、消費税が八%から十%へ上がる。ただばくぜんと高くなって嫌だなど思っていたが、私たちが納めている税金が色々な形になって自分たちに返ってきていることを知り、税がとても身近に感じられるようになった。

今回の手術を通して、私のために多くの人が納めてくれた税が使われていることを知り、私はその人達に感謝しなければならないと強く思った。

税は支え合いだ。これからは、自分の納めるべき税はしっかりと納めて自分も誰かを支え、医療費など自分のために使われる税に感謝していきたいと思う。



## 私に出来る事

志摩市立浜島中学校 1年 谷水 恵

私が税の事を詳しく調べたのは小学四年生の時で、きっかけは税金クイズ大会でした。

その頃の私はまだ小学生で税の事は難しかったけれどアニメやクイズで色々教えてもらいました。税金は私達の身近にあり、子供でも物を買う時に消費税として払っています。以前は消費税がなかったら買えるのと思うこともありました。でも税金の事を覚えてから、もし税金がなかったら医療・教育・市役所・交番・公園・図書館等、普段私達が気軽に利用している施設に影響がでることを知りました。

私は二年程前に発達障害の診断を受けました。昔から物を覚える事や想像する事が苦手で何個も約束をしてしまったり、結果を想像出来ない為、色々な行動をしてまわりに迷惑をかけてしまいました。その事もあってか、人と挨拶をすることすら嫌われると思い、怖くて話せない時期がありました。そこで病院の心の外来を受診し、医者のお勧めで支援センターに通うようになりました。そこに通う為には市から発行してもらう「通所受給者証」が必要になってきます。その受給者証にも税金が使われています。

支援センターに通い始めて数ヶ月が経った頃、家に一通の封筒が届きました。開けてみると「給付費代理受領のお知らせ」という紙が入っていて月々料金がかかっている事に驚きました。そこで初めて自分達が払っていたのは利用料の一部で、残りは市からの手助けがある事を知りました。もし税金がなくなって助けてもらえなかったら、支援センターに通えず、まだ暗い部屋の中でなかなか外も出れなかったかもしれないし、人とのかかわりが解らず困っていたと思います。

私は支援センターに通うようになってから少しずつ周りが見えてきたように思います。私以上に障害と歩んでいる人も見ました。中には小さい子もいます。その人達にも手助けは必要です。私は他の人より覚える事が遅いけど、何か出来ることはないか考えています。その手助けの一步がまずきちんと納税していくことではないかと思っています。今は物を買う時ぐらいしか出来てないけど、将来は色々な所で納税して、公共の場所を守っていきたいと思いました。

## 僕を支えてくれる税金

彦根市立鳥居本中学校 2年 堂山 高雅

僕は左足がありません。小学校に上がる前の夏休みに、足に大きな病気が見つかり、それからは入院と退院を繰り返してきました。何度も足の手術を受けてきましたが、小学三年生のときに、左足の付け根から切断しました。

今は、股義足という義足を使って生活しています。義足は僕にとって体の一部です。義足のおかげで歩くことができます。この、僕にとって大切な義足を、今年の夏休みに作り替えることになりました。新しい義足の見積額は百万円を超えていました。しかし、利用者負担額は三万七千二百円です。負担を超えている部分は、公費負担になっていました。義足を新しくする度に母は、「みんなの税金で作ってもらった義足だから大事にしてね。」とっていました。でも、幼かった僕は深く考えることはありませんでした。僕にとって、次の義足は五本目になります。体が成長する度に、修理と新しくするのを繰り返しています。義足は一生必要だけど、耐用年数もあり、大人になっても修理と新しくするのを繰り返さなければいけません。いったい僕の義足のために一生でどれほどの税金を使わせてもらうことになるのだろうと、申し訳ない気持ちになりました。

僕は、障害者手帳の他にもう一つ、小児慢性特定疾病医療受給者証を持っています。この制度は、難病や小児慢性特定疾病にかかっている児童の医療費を助成してくれる制度です。僕は、何度も手術を受けるために入院してきました。いまでも年に数回は検診のために通院しています。この制度のおかげで僕は、高額な医療費を請求されることなく、治療に専念することができているのです。この制度がなければ、僕の病気のせいで大変な思いをしている家族に、もっとつらい思いをさせていたと思います。

今まで僕は、税について深く考えることはなく、どのように集められ、どのように使われているのかわかっていませんでした。僕が安心して治療を受けられ、成長に応じて義足を新しくできるのは、税金のおかげでした。それなのに僕は、「消費税がなければ、もっと安く買えたのに…」など思っていました。税は、僕のように医療や福祉を必要とする人だけでなく、公共の施設の建築費や道路の整備費、教育や年金などに使われています。国民から集められた税金は、みんなが安心して生活するために使われているのです。しかし、僕は不安になってしまいました。なぜなら、よく少子高齢化という言葉を目にするからです。この日本の税のしくみは、とてもすばらしい制度だと思います。この制度をこれからも継続していくために、僕にできることはないか考えました。僕にできることは、今まで僕を支えてくれた税金を、障害者だから仕方ないではなく、自分もしっかり納税していける大人になることだと思います。

## 広がる視野と税制の未来

京都市立岡崎中学校3年 中山 みさと

中学生の私が友人との会話の中で時折耳にする「税金がなくなってほしい」との声。国を支える重要な役割を担う税金に、なぜ批判的な意見が多いのか。私はその理由として、主に私達若い世代の間で、税に対しての悪いイメージが根付いてしまっているからではないかと考えた。

今回私は日本の税制にとらわれず、試しに他国に目を向けてみることで各国の特徴が浮き彫りになった。私は将来海外で職に就くという目標をきっかけに、日本以外の国の税制に興味を持った。手始めに各国の消費税率を調べていると、世界的に見れば日本の消費税率は比較的低いことがわかった。消費税率8%の日本に対し、フランスは20%、オランダは21%と日本との差は一目瞭然。しかし情報を読み進めていくうち、注目すべき日本との違いは数字だけではなく、国民の意識にあるのではないかと気が付いた。

中でも目に留まったのは、北欧に位置するデンマークだ。デンマークの税金は世界的に見ても一、二を争うほど高いと言われている。二〇一八年時点で消費税は25%、所得税は驚異の55%。日本の倍以上税金を支払っていることになるが、デンマークは七年連続で「世界幸福度ランキング」トップ3入りを果たした功績がある。人々がデンマークでの暮らしを幸せだと感じる理由はどこにあるのか。

デンマークの大きな特徴の一つに、社会保障が充実していることが挙げられる。医療費、教育費は無料、十八歳以上の学生は国から生活費が貰えるなど、国民の負担が大きい分様々な福祉サービスが存在する。またデンマークの地方議員はボランティア活動で、政治家の給料は低い。高収入を狙ってその職務につくわけではないという安心感が生じ政治家に対する信頼が厚くなる。これらのメリットが国民の意識を前向きに突き動かしているのだろう。

しかし私は、日本がデンマークと同じ方法をとる必要はないと考える。重要なのは手段ではなく、税金がいかにか、国と国民の双方にとってプラスになる必要不可欠な制度であると理解できるかだ。日本にはまだその機会が少な過ぎる。支払った分がきちんと自分達にも与え返される。目には見えないが日本にも確かに存在する持ちつ持たれつの関係性を改めて自覚させることが必要だ。その為に税金について知る機会を発信することが、私にもできる身近な第一歩だと考えた。

税金は絶対的な存在であり安心感を持って納められる。これから私はそんなプラス意識を持って生きていきたい。そして未来の日本を担う若い世代の奮励努力により、税金という公正な制度に心から信頼を寄せられる社会になることを期待する。もちろん私も、胸を張って国に貢献できる国民の一員でありたいと強く思う。

## 母の入院を通じて学んだ税金の行方

茨木市立南中学校 3年 山本 雅理

健康が取り得の母が夜更かしをする私に

「お父さんを起こして来て欲しい。」

と頼んできた。普段から我慢強い母の顔は驚く程血の気が引いていた。慌てて父を呼ぶものの、父が病院に連絡している間にも母の容態が悪化して行くのが見て取れた。私は生まれて初めて119番に架電する。手も声も震えていた。ほんの短い時間だったかも知れない。しかし、救急車が到着するまでの長い時間を家族で待った。けたたましいサイレンの音に少しばかりの安堵を覚えたが母の事が気がかりでならない。大雨の中、救急隊員の人に抱えられる様に母は救急車に入っていった。私も付いて行きたかったが隊員の一人に静止され、父だけが同車を許可された。誰でも救急車に乗れる訳でもないのだ、とその時悟った。

恐らく母は入院する事になるだろう。私は荷物をまとめ始めた。ふと、救急車の代金っていくら位なのだろうと、頭によぎった。またも不安になり母が置いて行った財布の中を確かめてみる。何とも頼りない中身は私をより不安にさせた。そうこうしている間に父が帰って来た。やはり、入院する事になった母の荷物を取りに戻ったのだ。私は心配していた。救急車の利用代金を父に尋ねると、返って来た答えは意外なものでした。私が目の当たりにした救急車の内部は数多く備え付けられた医療器具に数名がかりの救急士。加えて真夜中の大雨。それらが全て無料なのだという。頭の中が混乱した。と同時にどっと感謝の気持ちが溢れてやまなかった。母は後に言っていた。「普通の車で病院に行っていたら間に合わなかったかも知れない。」と。幸い、母の病状は快方に向かったが、この事がきっかけで私は様々な制度を知った。母もこれを機会にと、私に知り得る限りの仕組みを教えてくれた。健康保険のこと、更には高額な医療を補填してくれる高額医療制度の事。

「元気になったらまた働いて、世の中にお返ししないといけないね。」

そう言っていた母は退院した後、病気が原因で仕事を辞めざるを得なくなったが、言葉通りすぐに今出来る仕事を見つけていた。何とも行動派の母だが、こんなにも早く次の仕事をどうやって見つけて来たのか。私には疑問だらけだった。どうやらハローワークという仕事を紹介してくれる役所があるらしい、そしてその役所も何と税金で運営されているとの事だった。

「病氣したお母さんでも雇ってくれる会社があるんだよ。捨てる神あれば拾う神ありだね。」母は笑って今日も生き生きと仕事に向かう。

困った人に手を差し伸べてくれる日本っていいな。ととてもとてもいいな。支えて支えられて、隣の人の手を握れば一周回って自分に返って来る。私もいつか社会に出る。隣の人の手を握ろう。

「何を大切にしたいか」

大阪女学院中学校3年 金久保 友菜

私は二〇一八年の四月までの約五年間、ドイツに住んでいた。

「税」と聞いてまず思い出したのは、消費税が上がったことだ。久しぶりに日本に一時帰国した二〇一五年春、百円ショップに行ったら、一個百五円で買えなくなっていた。当時小学生だった私に、「三円」は大問題である。税をもう少し安くすることはできないのだろうか、と強く思った。

そもそも、なぜ税が必要なのだろうか。

市民税で考えてみた。「市民税」は、生活を維持するためのシステムを市民に提供することで、納税されたお金を市民に還元し、成り立っているのだと思う。仮にそのシステムが維持・提供されなくなったらどうなるだろう。ゴミは回収されず、街灯は消え、市民病院は閉鎖されるなど、市民生活に大きく影響するはずだ。

今の私たちがしているあたりまえの生活は、市民税だけでなく様々な税金によって支えられている。このことから、「税」は必要不可欠であり、大切なものと言える。

では、税が上がって、上がった分だけ人々に提供される何かグレードアップすれば、それで良いのだろうか。

そんなことはない。ゴミの回収が毎日になったり、市役所が二十四時間営業になったとしても、多少便利に感じる人はいるかもしれないが、市民の生活上の負担が減ることにはつながらないと思うからだ。

でも仮に税が上がったとしても、使い方によっては人々の生活上の負担は軽減されるのではないかとも思う。そこで問題になるのは、お金を使うとき「何を大切にするか」だ。

北欧の税の仕組みが有名であるが、私の住んでいたドイツにも日本と違う例があった。

たとえば、公立小学の授業料は大学まで基本的に無料だった。その反面、本当に学ぼうとする人しか大学に行くことができず、卒業も難しいシステムが確立されている。

高速道路も基本的に無料ではあるが、財源の一つである燃料税等は高い。ドイツ世界屈指の自動車大国であり、高速道路はドイツにとって自国の産業を支える大切な存在であることを国民が理解し、相応の負担を受け入れているからこそそのシステムなのだろう。

一人一人が、自分や周囲の「大切なもの」を自覚し、尊重し、判断し、大切なものを守るために受け入れる。その力を持つことが重要なのだと思った。

日本ではどうだろう。

今の私には、日本にとって何が大切であるかは正直なところよく分からない。しかし、いずれ税を払う立場になる私たちには、目先の利益に惑わされず、自分や大切な人たちの未来にとって何が大切かを考え、見極め、選び取る力が重要だと感じた。

そのために、周囲の支えの中で学び、吸収できる「今」という瞬間を大切にしたい。

## 与えられた権利

姫路市立香寺中学校3年 鈴木 利奈

私がそれを知ったのは、教科書を配られたときでした。裏に名前を書こうと、ふと名前の枠の隣に並んでいる文に目をとめました。そして、その「税金によって無償で支給されています。」という、あまり目立たない一文に、私はとても驚きました。

当時の私にとって、税はあまり身近に感じられるものではありませんでした。しかし、税に関する授業を受けたり、税について調べてみると、実際は私が受けている教育と税金には、深い関わりがあることがわかりました。

例えば、教科書だけでなく、教室にある黒板や時計、パソコン、机などの多くの備品には税が使われています。また、学校の建設費も大部分は税が使われているそうです。これらのような教育への税による補助金は、中学生一人あたり、年間で約百万円ほどだと言われています。つまり私たちは、九年間の義務教育の間に、八百万円を上回る税金を使って小・中学校に通っていると言えます。

では、もし税がなかったら、学校に通うためには、現在税によって補われている金銭を全て各家庭で負担する必要があります。おそらく、負担が難しく、学校へ通うことができない子どもでてくる、と考えられます。したがって、平等に教育が受けられないのです。

私は以前、学校で二度にわたるインドのストリートチルドレンとの交流をする機会がありました。そのときに来てくださった、インドでボランティア活動をされている方のお話の中で、印象強い言葉があります。それは、「チャンスの違い」です。私たちは、みんなが九年間学校へ通い、さまざまなチャンスをたくさん与えられます。一方で、インドの彼ら彼女らは、学ぶ意欲があっても、なかなか学校に通うことができず、そして与えられるチャンスも数少ない、ということです。つまり、私たちは税によって、みんなが平等にチャンスが与えられる保障がされています。

税といえば、納める場合の消費税などに、目がいきがちです。しかし実は、学生の私たちが気付かないだけであって、税によるさまざまな恩恵を受けているのです。それは、教科書にも記載してあるように、「これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ」ているからこそだと思います。教科書が無償なのは、〇円なのではなく、日本国民が納めている大切な税が使われているからです。与えられた学ぶチャンスをあたり前だと考えることなく、教育を受けるべきだと思います。そして、大人になったときに、次の世代を担う子ども達のために、納税はとても大切だと思いました。

## 税金は国境を越える

奈良市立富雄南中学校3年 湯川 カンナ

私は小学生のころ、父の仕事の都合で、ベトナムの首都ハノイに住んでいました。ハノイには、日本人がたくさんいて、日本から来る理由もさまざまでした。その中にハノイの国際空港、「ノイバイ国際空港」の第二ターミナルを建設するために来た人がいました。私は、どうして日本の人がベトナムの空港を作るのだらうと思っていました。

調べてみると、ノイバイ国際空港の第二ターミナルと、ニャットン橋、それらを結ぶ連絡道路を建設するプロジェクトが行われていたことが分かりました。そしてそれらの総工費、千八百三十一億円のうち、その七割以上を日本のODA（政府開発援助）で賄われていました。ODAとは、先進工業国の政府及び政府機関が発展途上国に対して行う援助や出資のことです。政府からの出資ということは、それらは私たちの払う税金から出ています。日本は、歳出の〇・五パーセントをこういった経済協力費に充てているのです。しかし、「借金大国」と呼ばれるほど国債を抱えていたりするのに、私たち日本国民が納めた税金を、なぜ他の国の発展のため使うのだらうか、という疑問が湧き出てきました。

けれども、発展途上国を支援することはとても大切なことでした。

一九四五年、第二次世界大戦で敗戦した日本は、とても貧しい国になりました。そのときに日本は、他の国に支援され、今では世界でも数少ない先進工業国になるまでに成長しました。だから、成長した日本が昔助けられたように、発展途上国を支援するのは、日本の大切な役割なのです。

また、発展途上国を支援する上で、メリットもたくさんあります。まず、国と国との関係が強化されます。そして、支援していた国の経済が安定すると、日本と貿易をしたり、日本の物を買ってくれたり、日本の経済もより発展します。発展途上国を支援すると、その国が平和になって、経済が安定すると同時に、日本も豊かになるのです。

私たちが納める税金は、日本だけでなく国境を越えて海外でも役立っています。私が今納めている消費税、将来納めるであろう所得税や住民税が、少しでも発展途上国の経済の発展のため、その国の子供たちの安全や教育のために使われる。そしてそれが日本の未来につながるのだと思うと、とてもうれしく思います。また、私も税金を通して、海外とつながっているのだと実感しました。

税金のおかげで今の世界がある。日本がある。私がいる。それに感謝して、これからも税金を納めていきたいと思います。

## 支え合い

学校法人智辯学園和歌山中学校 3年 築野 有登

私は今年の夏休みに、フィリピンのセブ島に二週間滞在していました。目的は、英語の語学留学です。二年前も同じ時期に、同じくセブ島で二週間留学していたのですが、二年前と変わらず、ストリートチルドレンをたくさん見ました。家が貧しかったり、親がいなかったりで、学校に行けない子供がたくさんいます。日本では見ない光景です。日本はそういう面も含めて、フィリピンより豊かな国なのだなと改めて実感しました。私達は日本国憲法で納税を義務として定められています。また、それと共に、勤労の義務と教育の義務も定められています。この三つはどれも欠けても上手く機能しないのだと感じました。私達は教育を受けさせてもらい、仕事に就き、税金を納め、国民全員で日本を支え合っているのだと思います。フィリピンではそれが上手く循環されていない状態だと感じました。私がお世話になった語学学校の先生は、

「日本はお金や最先端の技術を支援してくれるのに、そのお礼はいつもバナナとマンゴーとエビ。何年経ってもそればかりで、発展せずに恥ずかしい。」

と、仰っていました。また、

「フィリピンには十分な仕事がないので、たくさんの人達が外国に出稼ぎに行っている。」

ということも仰っていました。私はフィリピンのそのような状況を知ると、改めて、納税・教育・勤労の三つが義務付けられていることの重要性和、その三つのバランスが大切であるのだと感じました。日本も終戦直後は貧しくて、世界の国々から支援をしてもらっていたそうです。そのおかげで今では経済的に豊かな国に成長しました。ODAは、私達が納めた税金で、発展途上国の開発を支援しています。私達日本人は、昔に助けて頂いたことに対する感謝の気持ちを忘れずに、また国際社会の一員として、他国が平和で安定した生活を送ることができるように、協力していく必要があるのだと思います。

しかし一方で、日本には問題が無いかと言えばそうではありません。少子高齢化が進んでいるので、税金を払うことのできる働き手の数が減ってきています。また近年では予期せぬ自然災害が毎年のように起こっているのです。将来のことを考えると、税金の使い道も慎重に考えていかなければならないと思います。私達は納税者の一人として、税金がどのように集められ、どのように使われているのか、良く理解しておく責任があります。そして平和で豊かな生活をいつまでも続ける為には、国民全員がこの国を支え合っていかなければいけないのだと思います。



## 復興支援と税金

鳥取大学附属中学校2年 大森 菜々美

「百八円になります。」

店員さんの声であわてて一円玉を探す私。消費税八円分を面倒だなと感じていた私の気持ちが変わったのは、先日のテレビの映像を見たからだ。

西日本豪雨災害では多くの被害が出て、二百人もの方が亡くなり、今も行方不明の方がおられる。私はテレビで、広島県呉市安浦町市原地区の様子を見ていた。茶色い土砂が集落全体を覆いつくし、全く手つかずのまま、人っ子一人いない光景を映し出していた。そして、番組のキャスターが、

「こんな言葉を本当は使ってはいけないのですが…。」

と前置きした後、「絶望」という言葉でその光景を表現していた。他の町では、住民やボランティアの人達がガレキをどけたり、家から土砂をかき出したりしている姿が映っていたのと、あまりにも対照的なその町の様子に、私は何も言えなくなってしまった。豪雨によって一変してしまった町。この町が元通りになり、住民の人達が普通の生活ができるようになるまでに、いったいどれくらいの時間、人手、費用がかかるのだろうか。被災した人びとの生活や住宅の支援、町や道路の整備、役場や病院などの建設、災害ゴミの処理などに莫大なお金が必要となるだろう。それらの復興に向けた費用は、税金によってまかなわれるのである。

私は、これまで税金について意識して考えたことがなかったが、税金のおかげで私達の生活が成り立っているのだと、今回のことで強く認識した。救急車、消防車、警察、病院、学校、道路など身近な日常生活の中で、私達は税金の恩恵を受けているのだ。今、私は恩恵を受ける側の立場だが、大人になった時、きちんと税金を納めて、誰かのために役立ちたいと思っている。

今回、大きな被害を受けた被災地では、復興するまでに長い時間がかかるかもしれない。でも「絶望」と言われた神戸の町が、復興を遂げたことを私は知っている。阪神・淡路大震災は私の生まれる前のことで、体験として知っているわけではない。しかし、母の実家が被災し、祖母から当時の話をたびたび聞かされていた。水道の水が出なくて、水をもらうのに何時間も並んだ話、食料がなくてビールでじゃが芋を煮て食べた話、鉄道も止まり、車も道路を通ることができず、大阪までひたすら歩いた話など、どれも生々しい話だった。そしてたくさんの税金が投入されて、被災した人の暮らしを保障し、町づくりに生かされ、神戸の町は復興した。毎年、神戸を訪れるが、今は震災を感じさせるものはないくらいに…。

テレビで見たあの町も、必要な税金が必要な所に行き渡り、再び元通り、いやそれ以上に復興することを願っている。

## 「税金は社会をつくる」

岡山市立妹尾中学校3年 美藤 さくら

「税金はなんのために支払い、なんのためにあるのだろう。」

小さい頃の私はそう思い、「税」について理解できずにいました。しかし、実際は税金に助けられてきたことを母から話を聞き知りました。税金について知り、今はすごくありがたみを感じるようになりました。私が税金で助けられていると特に感じるのは、母子家庭等の医療費助成制度です。

私の父は、私が小学校の入学式のあと、まもなくで死去しました。それから母はまだ小さく手のかかる、私、そして兄と妹の三人兄弟を、女手一つで育ててくれました。このような母子家庭等に対して、「医療費助成制度」というものがあり、医療機関にかかる際に発生する医療費の負担を軽減する目的で国や地方公共団体が実施している福祉制度のことですが、この制度に我が家はすごく助けられています。

私の妹は、生まれたときから体が弱く、心臓の病気を患っています。なので病院にかかることが多く、私も耳が少し悪く病院にかかるばかりでした。小さい頃はお金のことを気にしていなく、病院でどれだけお金を払っているのかも知りませんでした。しかし中学生になり、税金についてのテレビで、県民の皆さんが納めている税金で、母子家庭の私たちのような立場の人間が助けられていることを知りました。この制度があったから、妹がすぐに病院に行かないといけなくなった時でもすぐに病院にかかることができたのです。もしこの制度がなかったら、医療費に首が回らなくなり私たちは一般の人々が送る生活が出来なくなっていたかもしれません。私たちの家族は収入が少なく、いろいろなことを我慢し節約もしていますが、それでも生活が苦しいのが現実です。それでも県民の皆さんが、国民の皆さんが助け合って一生懸命生きています。税金を支払うことは代わりに「幸福」を買うものだ、今の私は考えています。

私は現在中学三年生で、来年からは高校生となります。私は顔も名前も知らない人たちに助けられてきました。今はまだ、助けられるだけの立場ですが、いつかは助け合うことのできる立場に立つことができます。その立場に立ったとき、今度は私が手を差し伸べ、助ける番だと思えます。自分が家族が、健康で安心な暮らしを送ってこれたこと、これからも生きてゆけること。日々忘れることなく感謝の気持ちを持ち続け、毎日ただ過ごすだけでなく、意味のあるものにしていきたいと思っています。だから今は、勉強をしっかりと、いろいろなことを学び、大人になったときに人のために、自分のために働いて、社会に恩返しができるような立派な大人になれるように、一步一步踏みしめながら生きていきたいと思っています。

「見えない誰か」とのつながり

学校法人宇部学園慶進中学校3年 橋本 果保

私は小学校低学年の頃に二度、同じ病気にかかり入院したことがあります。ある日家で体調が悪くて寝ていると、急に手足に発疹が現れ、あれよあれよといううちに入院することになったのです。大好きなぬいぐるみを抱え、不安と恐怖を感じながら薄暗い廊下を歩き、病室に向かいました。その部屋で、点滴の器材と思いやりに囲まれた二週間が始まりました。

点滴を受けた当初、それによる違和感と時々腕を襲う痛みで、私は不機嫌でした。愚痴をこぼすことも多く、両親には特に大変な思いをさせてしまいました。「点滴なんて、大嫌いだ」といつも思っていました。ところがある日、母から衝撃的なことを伝えられたのです。

「その点滴は、会ったことのない人たちの思いやりと、協力でできているんだよ。」

この言葉の意味を理解できなかった私に、母は語ってくれました。今、私が受けている点滴には献血によって得られた成分が含まれていること。入院できる環境があるというのも恵まれたことだということ。そして、その点滴は税金により保障されているということです。

私はその事実、はっとしました。病気と闘っている私を応援してくれているのは、家族だけではない。会ったことも、話したこともない誰かのお金と優しさが、巡り巡って私の元へ届いている。頭の斜め上にいつも吊り下げられている容器が、最初の頃とは打って変わって、温かく励ましてくれる味方のように感じました。

このような経験から、税金は命に繋がっていると考えます。もし税金が無かったとしたら、「豊かか否か」ということが生死をも分けてしまいます。豊かさに関係なく、全ての人にとって大切な命と安全。これらを守るために、国民が協力する制度が税金です。

ところが、税金という制度に対し非協力的な人がいることも事実です。脱税をして、自分の所得を少しでも減らさないようにする人。税金のおかげで無償だからと言い、必要以上に福祉や医療を受ける人。彼らには、このようなことを想像してもらいたいのです。

「納税により自分から旅立ったお金が、日本だけでなく世界へと広がっていく。その税金が、被災した人の涙を拭うタオルへ。温かさを届けてくれる建物へ。税金で学校を整備し、そこで学んだ子どもたちが、未来を創る。そして、闘病中の方の心に明かりを灯す薬へ。あなたの納税が、誰かの笑顔と明日になっていく。」

私が受けた点滴と共に、「見えない誰か」の優しさと税に対する姿勢も、体の一部になり、彼らへの感謝も私の心に残り続けることでしょう。社会に恩返しをし、闘病や困難で苦しんでいる人の「見えない誰か」になるため、責任を持って納税する人になりたいです。

## 助け合いの制度

いの町立吾北中学校3年 筒井 和香菜

私の手元にある教科書の裏にはこう書かれている。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

今回、税について学習するまで、自分は中学生だから、教科書が無償で配布されて当然だと思って生きてきた。しかし、自分の身近なところに税金が使われているということに改めて気づき、とても驚いた。今回、作文を書くにあたり、公立中学生である私に一ヶ月十四万四千円もの教育費がかかっていることを初めて知った。一年間では、百七十二万円もかかる計算になる。毎日使う机とイス。夏にも快適に過ごせる教室のエアコン。それらがすべて、教育費として私に費やされているのだと理解したとき、税金の持つ本当の意味が私の中に落ちてきた。私はもうすぐ九年間の義務教育を終えるが、九年もの間、誰かが払ってくださった税金のおかげで、楽しく学校生活を過ごしてきたことになる。見知らぬ誰かが、私たちのために支払ってくれた税金。深く考えれば考えるほど、こんなにありがたい制度はないと思えるようになってきた。

中学生の私も税金を支払うことがある。消費税だ。税金について学習するまで、八パーセントの税金を払うのがいやで仕方がなかった。もうすぐ十パーセントになるのがいやだなと友達と会話したことも当然ある。しかし、税金がなければ、私たちの周りには道路も橋も存在していないことになってしまう。

今年は、自然災害の多い年だった。台風、地震などによってさまざまな被害が出た。七月の西日本豪雨によって、高知県でも、たくさんの被害が出た。七月の西日本豪雨では、特に、広島県、岡山県、愛媛県では被害が大きく、現在も避難所での暮らしを強いられている人がたくさんいると聞く。私もボランティアとして現地に行きたいという思いはあるが、中学生の私にはなかなか難しいことだ。被災した人は、今後の生活に対する不安やとまどいしかないとと思う。家を流され、全財産を失ってしまったのだから。財産だけでなく大事な家族を失ってしまった人もいるだろう。私はニュースを見ただけだが、こんな時こそ「税金」の出番だと思った。被災者を助けてあげられるのは税金しかない。募金や寄付金も集まるだろうが、いち早く被災者の生活を取り戻すためには税金である。私には何もできないが、なんとなく間接的に被災者を助けてあげられるような気がしてうれしかった。税金は「助け合いの制度」なのだというのに気づいた瞬間だった。私は、これを機に自分の生活の中で税金がどこに使われているかを探さようになった。いつか私も働き始めるだろう。その時には、きちんと税金を支払えるような大人になりたい。そして、いつかどこかの誰かに恩返しの意味を込めて、税金を使った「未来」を与えたいと思う。

## 税がもたらす幸せ

福岡教育大学附属福岡中学校3年 山形 愛夏

「日本に住めるって幸せだね。」

私は父の仕事の関係で、小学生のとき、海外に住んでいた。「海外」とだけ言ったら、世界の中心都市であるニューヨークや上海などの景色を思い浮かべる人は少なくないだろう。だが、私が住んでいた国の様子はこれとは全く異なるものだった。私は発展途上国に住んでいたのである。

カトマンズ。かの有名なエベレスト山が北側に位置するネパールの首都である。そこで私は二年半生活を送った。国の中で最も発展している場所であるべきの首都だが、無論日本の首都である東京とは少しも似ていない。停電が頻繁にあり、生活に使用できる水の量は限られている。停電が原因でお湯も出ず、水でシャワーを浴びる。道路は舗装されておらず、建設などの工事も軽く数年はかかる。こういうことが当たり前だった。暮らしているうちに慣れてはくるものの、快適な生活ではなかった。

四年前、私は進学の関係で日本に帰国した。私は日本の素晴らしさに感銘を受けた。電気や水道、コンビニや舗装された道路。初めて見たわけでもないのに、全てがとても輝かしく見えた。その日から、私は日本にある様々なものに感謝するようになった。

現代の日本は、世界の中でも有数の先進国である。何事においても設備や仕組みが整っており、不自由なく生活を送ることができる。

これはなぜか。私は、この問いの答えは税金にあると思っている。税金は、普段何気なく払っているが、公共施設や小中学校など、たくさんの目的に使われている。「税金が高い」と思うこともあるかもしれないが、税は必要不可欠なのである。これがなければ人間らしい生活ができない。考えればよくわかることだが、現代の日本人でそれを意識している人は少ない。これは、日本人に感謝の気持ちが足りないからである。

この税の制度を取りまとめている政府。一生懸命に働いて得たお金を納める納税者。税金を使って施設などを作ってくださいの方々。感謝する相手はこんなにいる。しかしその気持ちを忘れてしまう。

では忘れないためにはどうすればよいか。それは「税」をより理解することである。そこで、私は「税」という漢字について調べた。

「税」という漢字は、「禾」と「兌」に分けられる。「禾」は秋や穂などのように稲が実った形からきており、そこから転じて、税、租などお金を意味することが多い。そして「兌」は訓読みで「兌(よろこぶ)」となる。つまり、「税」というのは、「よろこびを与えるお金」なのである。税金を払うことで互いに支え合い、よろこびを贈り合う。そして、互いに感謝する。これらが大切である。

稲作が古くから根づく日本だからこそ、この税の制度は成り立つ。これを知れば、あなたも税に感謝し、身近な幸せに気づくだろう。

税金は私達の生活を豊かにしてくれるものである。無償の教科書、公共図書館、国民医療費など様々な方面から私達の生活を支えてくれている。二〇二〇年、東京オリンピックの開催が決定し、日本はそれに向け着々と準備を進めている。税金は、新国立競技場や新しい道路標識の設置、多くの外国人に対応できる環境づくりにも役立てられている。

しかし私が、本当の意味で税金のありがたみを知り、こうした使われ方に興味に向くようになったのは、あの日がきっかけだった。

二〇一七年七月五日、九州北部を突然の豪雨が襲った。降り続く雨に大雨特別警報が発令され、私はすぐに帰宅した。家に着くと、テレビでは被害の状況が伝えられていた。そして、母の実家で、叔父の住む家がある地域へ繋がる道が全て崩落し、町が孤立しているという情報がながれてきた。母は、テレビの前でその映像をじっと見つめていた。会社の人に勧められ、家の様子を見に帰った叔父と、連絡がとれなくなったというのだ。ニュースを見て、心配した親戚たちが母にも連絡をくれたが、その中にも本人と連絡がとれたと言う人はいなかった。次の日も雨は降り続き、叔父との連絡は途絶えたままだった。

雨が降り始めてから二日後の夜、ようやく叔父が見つかった。山奥で、途中たまたま居合わせた人達と一緒にいたところを自衛隊に救助されたのだった。雨の降る山中で三十時間も取り残され、衰弱しきった様子だった。病院で治療を受け、元気になって退院した叔父は市の援助でアパートへ入居することができた。

それから数日後、その地域へつながる道が一つ復帰し、私は初めて叔父の家があった場所へ行くことができた。そこへ行くまでの見なれた道も、見なれた町も、全てが変わり果てていた。途中、車で通られなくなった道は歩いて進み、やっとついたそこには、なにもなかった。叔父の家は雨で流され跡形もなく本当にここに家が建っていたのかさえわからなかった。あるのは自分より何倍も大きな岩と、川を失くし、流れる場所を失った水の不規則な流動だけだった。

あれから一年と少しが経過した。復興が進み、もとの面影が見えるようになってきた。

仮設住宅の建設、瓦礫の撤去、壊れてしまった道の修繕、たくさんの人々を救った自衛隊の救助活動。税金は私たちの生活を豊かにするだけでなく、私たちの生活を守ってくれているということに気づくことができた。

普段のあたりまえの生活を送るだけでは、そのことを実感しにくいかもしれない。しかし、税は私たちの生活を守ってくれている、無くてはならないものなのだ。

消費税の増税に反対をする前に、税金によって豊かになっている今の生活に感謝をするべきだと私は思う。

感謝の心で納税を。

佐賀県立致遠館中学校 1年 宮地 茉菜

皆さんは『税』についてどのようなイメージを持っていますか？私は自分とは全く関係ないもので難しいものであると思っていました。しかし、私の家族にはそんな税に深く関わるような出来事がありました。

それは、私の兄が中学校一年生の時のことです。そのころ兄は、ユーイング肉腫という骨のがんを患い、長期にわたって、抗がん剤治療と手術のために入院を繰り返していました。本来ならば手術だけでも何十万円という莫大な治療費がかかります。さらに、兄の看病のために、当時出産を控えていた母に代わり、父は約半年間、職場を休職することになり、我が家は経済的にも大変な状況になりました。

ところが、兄の病気は小児慢性特定疾患という、国の難病指定がされていた病気で、すぐに地元の市町村で手続きを行うと、病院に支払う治療費の自己負担額が毎月一定金額で済むということが分かったのです。これにより病院には毎月数千円の自己負担で済み、兄は最善の治療と、手術を受けることができました。そして手術も治療も無事終了し、元気な体に回復することが出来ました。

小児慢性特定疾患とは18歳未満の子どもの病気の内、特に医療費の負担が大きくて、一定の条件を満たしていると認定された病気のことです。兄の病気は特定疾患だったため有難いことにこの制度の恩恵を受けることができました。

もしこの制度がなかったら…と、考えると病気の苦しみと、経済的な苦しみの、家族はととても辛い毎日を過ごしていたかもしれません。私達は本当に、このような国の貴重な制度に心から感謝しています。

皆さんの家族の方も、毎年国に税金を納めていると思います。実際に税金を支払う時は、もっと自分のことにお金を使いたい、わざわざ国のためにお金なんて払いたくない、などと考えている人もいると思います。しかし私の兄のように、普段みなさんが納めてくださっている税金によって救われる命があります。また、他にも様々な形で、税金によって救われたという人がたくさんいるはずです。私たちの納税は、知らず知らずのうちに人の命を救うという尊い行動にもつながっているのです。私も将来、納税する立場になったら、それは自分の生活のためであると同時に、周りの人々の生活も支える力になっている、ということを忘れないようにしたいと思います。そして自分だけがこのようなことを意識するのではなく、この国のすべての納税者の人々が皆、意識できるようにしていくことがとても重要なことではないでしょうか。

こうすることで『税金を納める』ということに対して、皆が本当の価値と必要性を真剣に考えながら、さらに少しでも感謝の心を持てる人が増えていくといいなあと心から願っています。

「これでもう大丈夫。」自分の心の声が本当に聞こえてくるようだった。

今年の七月上旬の豪雨で、私の住む山国町も大雨に襲われた。母に迎えに来てもらって学校から帰る途中、車の窓から見えたのは今にもあふれそうな川だった。私は、以前大きな水害を経験していたこともあり、命の危険さえ感じていた。そんな中、母が私と私の弟を連れて避難することを決めたのが「コアやまくに」だった。「コアやまくに」は、山国町の公共施設だ。幸い私たちや家には被害はなかったが、大雨の中「コアやまくに」に着いた時は命を救われたような気がして、「これでもう大丈夫」と安心したのだ。

私は、税についての作文を書こうとした時にこのことを思い出し、私を救ってくれた「コアやまくに」が税金で造られたのではないかとふと思ったのだ。そのことを先生に尋ねてみると、やはりそうだった。税金で造られた公共施設が大雨の時に避難所になっていたと知ると、私は税金が他にどんな形で防災に役立てられているのか興味を持った。

実際調べてみると、私の住む周りでは水害や土砂災害を防ぐために色々な工事が行われていることがわかった。例えば、山国町を流れる山国川の氾濫を防ぐために川幅を広げたり、土石流を防ぐために山に砂防ダムを造ったりしている。また、私が出かける時によく通る道路のすぐ近くにある山の表面には、網状にコンクリートで固められている部分がある。私は以前これが何のために造られたのかわからなかったが、がけ崩れを防ぐためのつくりだということを学校で学んだ。つまり、私たちの身の周りは、防災のために造られたものもたくさんあり、私たちはそれに守られて生活しているのだ。そして、大雨などで災害の危険が高まった時には、たくさんの命を守ってくれるだろう。

これらの防災のための工事は、税金によって行われている。そう考えると、私たちは税金によって災害から守られていることを強く感じる。大雨で氾濫しそうな川から私が守られたのも、これから起きる災害から私たちが守られているのも、税金のおかげなのだ。

この作文を書くために防災に役立てられている税金について調べて、税金が私たち国民のために使われていて、なくてはならないものだと感じた。だから私は、自分が税金によって守られていることに感謝しなければならない。また、私が大人になったら、たくさん税金を払わなければならなくなる。だが、その時には、自分が税金によって恩恵を受けていることを思い出して、国民としての責任を持ってきちんと納めようと思う。



## 税で支え合う

枕崎市立立神中学校3年 桑原 日菜子

「なんでこんなに消費税を払う必要があるのかな」

商品は税抜きで表示されているものが多い。消費税八パーセントは思っていたよりも高く、支払いをするときに予想した金額をいつも超えてしまう。中学生になり自分のお小遣いで買い物をするようになると、こうした場面に出会うことが多くなった。税金にこのような疑問を持っていた私が、実は小さい頃から税金に支えられ、税金を払うことで誰かの役に立っていた。そんな事実を知ったのは、つい最近のことだった。

私は、先天性甲状腺機能低下症という病気を持っている。簡単に説明すると、生まれつき甲状腺ホルモンをつくる働きが低下しており、成長・発育に大きな障害が見られる病気だ。そのため、私は生後二週間から今も、三か月に一回病院へ通院している。採血をしたり、骨の発達に問題がないかレントゲンをとったりする検査をするためだ。毎朝、薬を飲むことも欠かせない。

先日、十五歳になった私は初めて母に連れられ、保健所へと向かった。保健所からの帰り道、私は車を運転している母に、

「日菜子の病気のことなんだけどね、今まで病院でしていた検査や今飲んでいる薬のお金は、全て税金によって賄われているんだよ。だから、こうして一年に一回は必ず申請をしに来ないといけないの。」

と言われた。今回、保健所へ行ったのは検査などのお金の援助を受ける小児慢性特定疾病医療費支給認定申請の手続きをするためだったらしい。この申請により、今まで私の病気にかかったお金のほとんどが税金により支払われていたこと、この申請をするために私の知らない間に母が十五回も保健所へ行ったこと。初めて聞いたその話は、私にとってとても衝撃的なものだった。そして、今まで税金に対して文句を言っていた私は、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

今、私が弟や友達と同じように健康に不自由なく過ごすことができているのは、税金のおかげでもある。顔も名前も知らないたくさんの人達が税金を納めてくれていることで、私のように病気を持っている子供達の医療費は支えられてきた。一年後には消費税が二パーセント上がる。私が大人になったら、納める税金の種類も増える。でも、その税に対して嫌な気持ちを持つてはいけない。納めた税は、きっと誰かの命や生活を支えることにつながるからだ。次は、自分が誰かのために。その思いを持って税金を納める、これが今まで私を支えてきてくれた人達のためにできるたった一つの恩返し、私の役目だ。私は、この役目を全うし、この思いを次の子供達に伝えていけるような大人になりたい。

## 税によって救われた命

西原町立西原中学校3年 玉城 佑香

「もう一つ、命をもらったような気分でした。」ある時、先生はそう語りました。先生はいつも明るく、元気で、私たちをいつも笑顔にしてくれる人です。「税金があったから、私はここにいられる。」この話を聞いた時、私は理解することができませんでした。それは税は私たちの負担でしかない、とっていたからです。しかし、先生の話聞いていくうちに、この考えは間違っていると気付きました。

税がなかったら、私は先生に出会うことは出来ません。なぜなら、先生は税金によって救われた人だからです。

先生は昔、腎臓の病気を患いました。治療法は、腎移植しかなかったそうです。悩んだ結果、妹の「一緒に長生きしよう。」という言葉に押されて、妹の腎臓をもらって、腎移植することを決断しました。腎移植を受ける際の医療費は、移植した月で400～500万円程度かかるとされています。私たちにとって、払える額ではありません。しかし、健康保険が適用されるため、先生の移植した月の自己負担額は、1万円です。先生は医者に「税がなければ、あなたがいく所は僕の所ではなく、お坊さんの所だった。」といわれたそうです。失っていたかもしれない命を、税で救われたのです。「そう思うと毎日が楽しい。」と、いつも元気で、私たちに接してくれます。そして、先生も私たちも、いつも笑顔で過ごすことが出来ています。

税は先生や私たちに、たくさんの良いことを与えてくれました。心の底から感謝しています。税金は、私たちにとって、なくてはならない重要な、必要不可欠なものなんだと感じました。先生以外にも、税金によって救われた人は、たくさんいると思います。私たちが日頃納めてきた税金が、巡り巡ってたくさんの命を救い、私たちの生活を豊かなものにしていてくれたと思います。

多くの人の命を救っている、税金のありがたさを実感し、これから進んで税を納めていきたいと思いました。そして、税に対してマイナスのイメージを持っている人に、税の良さを伝えていきたいです。皆で、喜んで税金を納め合って、より豊かで便利な生活が過ごせる日本にしていきたいです。

「あたりまえ」は税からできている

羅臼町立知床未来中学校3年 小嶋 実夕

私たちが暮らす日本には、「あたりまえ」のように道路があり、道路の脇にはたくさんの道路標識もあります。小学生・中学生は、「あたりまえ」のように学校へ行き、整った備品で不便なく勉強や運動に励むことができます。火災が発生したり災害が起こると消防署が、事件が起こると警察がすぐさま駆けつけてきて、「あたりまえ」に私たちの身を危険から守ってくれます。

道路を作るには、また道路標識を作るにはたくさんの材料、人が必要です。学校を建てるにも材料に人、私たち学生が学習するためには教科書や机・イス、体育科で使うボールなど、たくさんの備品が必要になります。消防員が火災や災害から国民を守るのにも、警察官が事件を解決するのにも、たくさんのもの、人が必要になります。

「あたりまえ」をつくるには、たくさんのもの、人が必要です。つまり、たくさんのお金が必要になります。

「あたりまえ」を作っているのは、私たちが普段納めている“税金”がもとなのです。なので私は、私たち日本国民が暮らしている中での「あたりまえ」は税からできている。そう考えます。

道路の例・学校の例・消防や警察の例以外にも、医療、福祉、年金に使われていたり、町の整備や風水害を防ぐ工事のための公共事業費、開発途上国の自立支援までにも税金は使われているのです。

税の詳しい使われ方を知るまでの私は、税にあまり関心がありませんでした。もっと言うと、私たち学生が直接納める消費税が少し嫌いでもありました。

ですが、税の詳しい使われ方を知って、私も社会をつくっている一員なのだと思うと、とても誇らしい気持ちになりました。また、私たち学生がこのように学校に通い、勉強できているのも、税を納めてくれている大人たちのおかげだと感じ、感謝したいと思います。

私たち日本国民が暮らしている中での、「あたりまえ」は税からできている。これからも感謝の気持ちをもって、生活していきます。

## おもいやりの形

横手市立平鹿中学校3年 佐藤 あかり

「俺はみなさんに生かしてもらっている。」これは祖父がよく口にする言葉だ。祖父は私が生まれる少し前に病気を患い、今も週三回の通院を続けている。体調がひどく悪い時期もあり、長く入院したこともあった。野菜作りに生きがいを感じていたが、病気になってからは思うように働くことができず、辛く悔しい思いをしたという。そのような思いを抱えながら祖父は懸命に生きてきた。そして、周囲への感謝の気持ちが大きくなり、病気であっても自分も社会の一員として何かできないかと考えるようになったと話してくれた。中学三年生になり、少しずつ社会との関わりを考えるようになった私は、祖父の言葉の意味をやっと理解できるようになった。

治療には多くのお金がかかっているはずだ。私たち家族が負担するには大きすぎる額にちがいない。それでも私たちが平穏な生活を送ることができているのは、税金による医療費の補助があるからだと思った。

にもかかわらず、税に対してマイナスのイメージをもっている人は多いのではないか。それは税金が不当に使われているニュースをよく耳にするため、イメージが悪化してしまうからだろう。さらに、私たちが税金の使われ方について具体的に知らないということも関係しているのではと思った。

私の大切な家族は税金によって命をつなぐことができた。「みなさんに生かしてもらっている」とは、人々が納めてくれた税金に助けられて病気の治療ができ、生きることができているということだった。そのことに気がついたとき、税に対するイメージを悪いままにはしておけないと思った。もしも税による支えがなかったら、祖父はどうなっていたらろうか。「税はいらないのでは」と考えたこともあった無知な自分が情けなく思えてくる。

改めて考えてみると、税は私自身にも深く関わっていることが分かる。小中学生一人一人に自分の教科書があること。風邪をひいたり怪我をししたりしたときでも安心して診療を受けられること。税金は身近な存在であり、私たちを支えてくれているということを知れば知るほど、感謝の気持ちが自然と芽生えてくるのだ。

もちろん納税は簡単なことではない。苦しいと感じることもあると思う。でも、税金に人々を救う力があることは間違いのない事実だ。そう、私たちは税を通して多くの人とつながり合い、互いを支えることができるのだ。

いずれ私も大人になり、税金を納めることになる。税に支えられて成長してきたことを忘れず、責任をもって納税したいと思う。また、税金がどのように使われているのかも注意して見ていきたい。なぜなら税は私たち自身のために国民自らが納めるものであり、私たちが安心して生活するために欠かせないものだからだ。人々のおもいやりを形にしたもの。それこそが税なのだ。

## 税金で繋げる思い

秋田大学教育文化学部附属中学校3年 梁田 侑花

「あなたの入院費、すごく安かったのよ」母は過去を振り返ってそう言った。

今から九年前の春。当時五才だった私は、幼稚園から帰ってきて母に首の痛みを訴えた。整形外科へ受診したが異常なし。次に小児科で診察を受けたところ、すぐに組合病院に行くように告げられた。

診断結果は「川崎病」。入院をすることになった。中学生になってから聞いた話だが、かなり重い病気だったらしい。四百ミリリットルの点滴を一日数本投与する。それを三日間続けた。たくさんの人の協力のおかげもあり、病状は順調に回復した。そして、私は一週間ほどで退院することができたのである。

後遺症が無かったことは幸いだったが、母の不安は拭いきれなかった。その不安とは、入院費についてのことであった。私に使われた点滴は一本約五万円もする高価なものだったらしい。それを何本も使用したのだから、当然治療費は相当な金額になってしまう。そう考えたのだった。

しかし、実際に払うことになった金額は、予想よりも遥かに少なくすんだ。

私達の住む秋田市には、乳幼児や小中学生を対象とした「福祉医療制度」があった。秋田市に住所のある子供たちの医療費の自己負担分を、市が税金で助成してくれるというものだ。その制度のおかげで、私たちの負担は大きく削減されたのである。

私たちが税金による恩恵を受けているのは医療の面だけではない。学校での授業料も、使っている教科書の費用も税金によって支払われている。また、公共施設の建築費も税金から負担されている。この国の中のあらゆる場所で、税金は生かされているのだ。

この国の税金は、国民が全員平等に払っているものだ。私が入院したときに支払われた税金も、私自身とはまるで接点の無い人が納めたものなのだろう。あるいは私が納めた税金が、顔も声も知らない誰かのために使われているのかもしれない。税金というシステムを通じて、国民同士の一種の「やりとり」が行われているのだ。

私の納めている税金の先には誰がいるのか。それを知る術はない。私の入院費に使われた税金は、誰が納めてくれたのか。それも分からない。しかし、国民の払った税金は、必ずどこかで誰かのためになっている。それはとても素敵なことだと思う。

私達が大人になったとき、税金がどう変化しているのか分からない。もしかしたら、今より負担が大きくなっているのかもしれない。しかし、私は幼いころから税金によって沢山の恩恵を受けている。だから、一人の大人として、子供の頃の恩返しとして、しっかりと納税できるようになりたい。接点はないが繋がっている誰かを、税金を通じて手助けしたい。その決意を忘れない大人になりたいと思う。

「ありがとう」

阿見町立朝日中学校2年 松本 七美

私は、正直税金を払うのは嫌だ。買う物一つ一つに消費税を払い物を買う。私のような中学生は、欲しい物はいくらでもあるのに、おこづかいが少ない。だから、消費税で払ったお金を見ると、「ああ、今払った消費税分であのかわいい消しゴムがもう一個買えるのに…」とか思ってしまう。

でも、私は税金に「感謝」としか言いようのない出来事があった。それは、今から十年前の話だ。

私が、四歳になって三ヶ月もしない日のこと。私は、風邪を引いた。幼い頃はよく風邪を引くので、母もすぐ治るだろうと思って、あまり心配はしていなかったようだ。私は、近くの病院へ行き風邪薬をもらった。しかし、一週間たっても熱が下がらず、もらった薬は全て飲み終わってしまった。もう一度、前に行った病院へ行き、血液検査をした。そうしたら、病院の先生が母に書類を渡したり、話をしたりしていた。あわただしく過ぎていく物事に、頭がついていくのが精一杯だった。そして、私はすぐに大きな病院へ連れていかれ、入院生活が始まった。入院してからは、二十四時間点滴をつけ、自由に動くこともできず、ベッドの上で薬を飲んだり、検査の毎日だった。苦しくて、辛かったけど、その間、家族をはじめ、数え切れない程の人達に心配してもらい、応援してもらった。私は、少しずつ回復していき、約三週間で退院できた。

私は、その後に病気のことを詳しく知った。病名は「肺炎」この病気は最悪の場合、死にいたるほどの病気だそうだ。そのため、入院費は高額であったらしい。私の家は、ごく普通の一般家庭なので、入院費はこれからの生活に支障をきたすものだった。そんな、私達を救ってくれたのは、「高額療養費制度」だ。これは、医療費の自己負担額が一定額を超えた場合、費用の一部を税金で負担してくれる制度だ。私は、最近この制度を使っていたことを知った。それと同時に、頭が下がる思いがした。私は今まで、自分に関わっている人にしか、私の病気は何も関係していないと思っていたからだ。でも、私と会ったこともないような人が納めた税金が、私に使われていたと思うと、生きていることの「ありがたさ」を改めて実感した。

私は、あれから十年たち、中学二年生になった。今私は、たくさんの友達に囲まれ、楽しく勉強や部活動に励むことができている。こんな充実した日々を送れているのは、間違いなく、税金があったおかげだ。そして、税金を納めている日本中の人々のおかげだ。私は、税金と日本中の人々に向けて言いたい。「ありがとう」と。

## 税から生まれる生きる源

栃木県立佐野高等学校附属中学校 2年 戸田 瑛未花

私は今まで、税金について日常生活で意識することは全くと言っていいほどなかった。しかし、この作文を書くにあたり税について調べてみて、私たちの生活に欠かせない、どれほど大切なものかということ、身をもって知ったのである。

まず、税と聞いて思い浮かぶのは、中学生の私にとって身近な消費税である。消費税とは、物やサービスを消費するたびに掛けられる間接税であり、私がお小遣いで買うほとんどの物にかけられていることになる。そしてその消費税は、現在、国の税収約五十八兆円のうち約三割のおよそ十七兆円に上るということである。そんな身近な消費税が、平成三十一年度には現在の八パーセントから十パーセントに引き上げられるという。それを聞いたとき、私が文房具や友達誕生日プレゼントを買っても買うものは変わらないのに払う金額が高くなってしまふなんて、ちょっと嫌だなと感じてしまった。それは、中学生の私でも税を支払って貢献していると思うのに、それに見合うサービスを受けているという実感がわかなかつたからである。

しかし、税金があるからこそ、私たちの生活すべてが順調に動いているのである。それは、道路や上下水道の維持、警察や消防によって治安や安全が保たれている。私たちの教育にも税金が使われているし、医療費も同様である。医療費と聞いて、私ははっとした。私の父は、私が一才のとき交通事故で重度の障害が残り、現在も長期療養中である。その父の医療費も、高額療養費制度のおかげで軽減され、安心して医療を受けることができているのだと知った。もしも税金からの助けがなければ、父は十分な医療を受けられなかったかもしれないし、私たち家族も今のような普通の生活はできなかつたかもしれないと思うと、これもすべて税金のおかげと本当にありがたいと思った。また、父は半身麻痺のため車椅子に乗っているが、最近では体の拘縮というものが進んでしまつて通常車椅子ではベッドからの移乗が難しくなつてしまひ、新たに体に合った車椅子を新調しなければならなくなつた。これも、税金からの補助で負担が軽減され、購入できたのである。そして父も移乗で辛い思いをすることもなくなり、介助者の負担も軽減できるようになつた。

国民が皆大変な思いをしながら納めている税金は、自分たちの生活の中で使われていて、感謝をしなければいけないとは思っていたけれど、それよりもっと自分が恩恵を受けていたことを知り、今では本当に感謝で一杯である。消費税が上がるのが嫌だなどと少しでも思った自分が恥ずかしくなつた。税金によって私たち家族が助けられた感謝を忘れず、私が大人になつたとき恩返しできるように、しっかりと勉強し、自分や未来の子ども達の将来のため、しっかりと税金を納めていきたいと強く思った。

「ピピピピ、ピピピピ…」

朝目覚め、テレビのニュースに耳を傾けながら朝ご飯を食べ、玄関の扉を開ける。いつもの道を通って、いつものように学校に行く。そんないつもと変わらない日常が、当たり前のように毎日過ぎていきます。この普段の生活の中に、どれだけの税金が使われているのか、今まで深く考えたことがありませんでした。ましてや税金なんて今の私にとって商品を購入した時の消費税くらいしか関わりがなく、ほぼ無縁なものだと思っていました。しかし、学校での税金についての特別講習で私の思いは変わったのです。

税金には莫大な数の種類があり、その数は国税が二十五種類、地方税が二十六種類、計五十一種類だそうです。そして、国民から集めたこれらの税金は、全て住みよい社会を実現、更に維持するために使われるのが目的です。即ち、今の良い社会を創っているのは私たち国民でもあるのです。しかし、中には税金を納めない人がいたり、また、納められた税金を不正に取り扱うという、信じられないニュースを耳にします。私たちが国民として生活する以上、納税の義務があります。皆が納めている税金を自分だけ納めないのは不平等だし、その税金を本来の目的以外に使用するのはあってはならないことだと私は思います。数年前、アメリカで次のような事件が起こったようです。Aさんの家が火事になり、Aさんは通報したのですが、市の消防サービスを受けるための税金を滞納していたために、消防隊は消火活動を行わず、Bさんの家に燃え移りました。その後、税金を納めていたBさんの家は消火したものの、Aさんの「お金を払うから！」との頼みにも、「今さら遅い。」と言われてしまい全焼してしまっただけというものです。私の父が現在消火に携わる仕事をしており、休日も関係なく、火災の時は出動している姿をみているので信じられない事件でした。日本では、考えられない騒動ですが、ほぼ社会のシステムが完成し、全国に统一的に同じ制度が通用するようになっていることが当たり前と考えると、他国のことを測ることはできません。しかし、皆が払っている税はきちんと納めるべきだと思います。私たちが納税することで、道路が整備されたり様々なサービスが受けられます。学校でも、教科書が無償で支給されたり、机や椅子のある整った環境で勉強ができるのです。デンマークの税率は二十五%ですが、幸福度は世界一なのです。その理由は医療費や教育費、出産費用など、国のサービスが充実しているからです。日本に比べると、極端に高い税率のように思いますが、税金の使い方が適正であれば良い社会は実現可能なのです。

来年の十月に日本は消費税が10%に上がりますが、その税金を適正に役立てて欲しいです。そして税金の知識を深め、今より一層安定した社会を未来に繋いでいきたいです。



## 祖母の真心と消費税

加須市立加須平成中学校 3年 泉田 奈々

「いらっしゃいませ！」

明るくお客様をむかえているのは、私の祖母です。祖母の家は自営業を営んでいます。

戦後、曾おじいちゃんが小間物屋として商売を始めてから、代々続く化粧品屋です。

いつもお客様でにぎわっている祖母のお店。きっともうかっているんだろうな。そういえば、大きくなったら私がお店の社長さんになるからね、なんて言ってみたって…。そのことを祖母に話してみました。

「覚えてるよ、嬉しかったよ。」

と言ってくれました。でも、私が中学三年生になったからか、お店を経営することの苦労話も聞かせてくれました。消費税が導入されて、3%、5%、8%。そのたびに頭を悩ませたそうです。一晩で、お店の商品の値段表示を変えなければならなかったり、レジのシステムを変更したり。

消費税は、消費者が負担した税を、事業者が預かってまとめて納税する間接税です。消費者目線でみると、税を負担するということは、物の値段が上がった、と感じてしまいます。だから、増税前には安いうちに買っておこう、というかけこみ消費が起り、増税後はしばらく買わない、という買い控えがあります。祖母のお店では、お客様とのコミュニケーション、お金では買えないサービスをモットーにしているそうです。祖母の気持ちが通じたお客様は、ずっとお店に来て下さっています。祖母の真心と努力のたまものだと思います。消費税が10%になる日もそう遠くはありません。国民の負担になるのはわかりきったことなのに、なぜ？国民が豊かな生活を送るための公共サービスの財源として。国が抱える莫大な借金を少しでも減らすため。確かに今後の日本を支えていくためには、増税は通らなくてはいけない道のりなのかもしれません。

納税は国民の義務です。増税が決まればその義務を果たします。でも、税を払うばかりではおもしろくありませんよね。私の祖母は、一生懸命アイデアを絞って働いています。そんな人達が商売をしやすい市場を、消費する側も楽しくたくさん買い物ができる。そんな活気ある経済にもどるような政策が行われればいいなと思います。しかし望んでいるだけでは何も変わりません。今の私たちにできること何だろう。

私たちは、昔から国民が納めてきた税金の積み重ねの上に立って、今を生きています。そのことをしっかりと理解し、過去を振り返るばかりではなく未来に目を向けて考えることが必要です。

今年は西日本の豪雨により、甚大な被害が発生してしまった。テレビからは怒り狂った水により破壊された街並みが映り、自然の脅威を前に、人間の無力さを改めて知らされる映像だった。住む家を失い体育館に避難する人、泥だらけで命からがら逃げてきた人、浸水した家の屋根から助けを求める人…。「神様、助けてあげて」とテレビに願うしかない私。一人の力ではどうにもならない現実がそこにはあった。

次の日、少しずつ救助の様子がテレビに映し出される。そこには空から、海のようになった陸から、住民を救助する自衛隊の姿があった。救世主の登場である。今回の災害に対し、約三万人の隊員の方が派遣されたと聞く。救助活動はもちろんのこと、水道が寸断された地域への給水、食料支援、それから入浴施設も提供していた。猛暑でどれだけ汗をかいたか分からない身体を洗い流し、入浴して出てきた住民の皆さんの笑顔にこちらもほっとする。もし私が近くに住んでいたなら、今すぐにでも駆けつけたい。もし現地に行き、役に立つことがあれば何でもしたい。しかし、それが叶わない今、救助のプロである自衛隊の皆さんにお任せするより他ない。避難生活が続く皆さんに寄り添い、終わりの見えない救助活動を続ける隊員の皆さんに頭が下がる。

自衛隊は、国の安全を守る組織である。警察署や消防署と同じように、費用は国民一人一人が支払う税金で賄われている。税金を支払うことに対し、良いイメージを持ってない人も、どうか考えてほしい。こうして災害が起きてしまった時、どうやって日常生活を取り戻すのか。税金がなければ、救急車や消防車も来てくれない。山のような災害ごみも誰も片付けてはくれない。水道や道路は誰が修復してくれるのだ。ボランティアの力だけではどうにもならない。たくさんこの国を守って下さる方たちがいるから、こうして日々安心して私たちは暮らせるのだ。災害があった時にこそ、税金の存在意義を考えたい。税金には様々な用途があるが、どこかで助けを求める人のためにも使われていることを忘れずにいたい。この国は、見えない絆で結ばれている。

私は、税金は国民の総力だと思う。一人の力ではどうにもならないことでも、国民の力を少しずつ集めて、一億二千万人の大きな力に変えれば、どんな困難も乗り越えられるはずだ。私の力なんて微々たるものだが、私も縁の下の力持ちになればいい。今は、被災地の日も早い復興を願い、いつか強い絆で結ばれるこの国に生きる一人として、誰かのために税金を納められる人に、私はなりたい。

「過去から今、そして未来を」

関川村立関川中学校3年 高橋 まき

「いよいよ年貢の納め時だ！」。刑事ドラマや時代劇などで良く耳にするこのフレーズ。この言葉の語源は滞納していた年貢を納めなければならないということで、江戸時代にできた言葉だそうだ。年貢とは今でいう税のこと。そう、私たちは江戸時代、それ以上の前の時代から税と関わってきたのだ。

税と聞くと難しく、深く私たちに関わりが無いように感じるが、歴史を見てみるとどうだろう。明治時代の地租改正、安土桃山時代の太閤検地、飛鳥・奈良時代の租・調・庸など。そして税のはじまりは、卑弥呼の時代。邪馬台国では税制度があったという記述があるそうだ。私たちの産まれるずっと前から税はあり、先祖様たちは携わってきた。それに、幕府に米を納める年貢イコール税と考えると、税というものがなんとなく理解できる。

今の時代を築き、私たちの生活と常にともにある税に、あまり良くないイメージを持ってしまうのにも、歴史が関係してくるのだろう。租・調・庸とともにあった兵役や防人、上の階級の者が自分たちの生活のために課した重い税、増税に苦しみながらも協力した悲しい戦争。私たちは税に必ず良好な関係で携われてきたわけではない。税の印象が悪くなっていくのもわかる。そして二十九年、私たちの消費税は十パーセントへと上がる。だいたいがお小遣い制の私たち中学生にとって、けして優しいものではない。「竹槍でどんとつき出す二分五厘」とあるように、集団で反対運動を起こすのはどうだろう。もしかしたら、消費税アップを止めることができるかもしれない。

そんなことを祖父に話すと、「確かにのお。」と笑っていたが、同時にこんなことも言われた。

「消費税が上がるのは、お前たちの将来のためだぞ。」と。

私たちは必ず年を取る。高齢者となったとき、頼るのはやはり税金だ。しかし、今の日本は少子高齢化社会。社会保障費の増加が予想される一方、その費用を負担する人が減ってきている。おそらく、少子高齢化は、私たちが大人、高齢者になっても続くのだろう。世代を問わず、一人ひとりが満足のいく生活をおくれる社会にするために、消費税の引き上げが決定されたのだと気付くことができた。

時代とともに変化しながらも、今まで私たちの歴史とともに歩んできた税金。理解すればするほど、その重要性が見えてくる。そうすれば義務だから払うのではなく、私たちの今と、未来の社会のためと思って、気持ちよく堂々と税と向き合えるのではないだろうか。税は負うのではなく、携わるものとして、私たちは未来へと、またともに歩んで行くのだと思う。

豊かな社会のために、今、僕ができること

信州大学教育学部附属長野中学校3年 小林 光希

「なんで、こんなに物価が高いんだよ！」

僕は、今年の夏、スウェーデンを訪れた。これは、スウェーデンのお店で初めて物を買った時の僕の感想だ。レシートをよく見ると、消費税率が二十五%となっている。物価が高いのではなく、消費税率が日本に比べて高いのだ。事前に、消費税率が高いということを学習していたものの、何か違和感を感じた。

僕は、スウェーデンで幼稚園（プレスクール）を見学した。その幼稚園では教育、育児に関する福祉制度についてお話を聞いた。その中で、僕は、スウェーデンは教育、育児をするための環境がとても充実していると感じた。例えば、子育てのための有給休暇は父親も取得しやすく、父親と母親合わせて四百八十日とることができる。そのうち、三百九十日は休暇前の給与の八十%が支払われるそうだ。また、スウェーデンの家族関係社会支出の対GDP比は三・六四%（二〇一五年）である。日本は一・三一%（二〇一七年）なので、その差は歴然である。

また、僕は障がい者の方々が働くカフェも見学した。そのカフェでは障がい者の福祉についてお話を聞いた。スウェーデンでは、障がい者の自立を目指しているため、障がいを持っている人が働くことも珍しくはない。僕が訪れたカフェで働いている障がい者の方は生き活きと働いていた。そして、障がい者の方々が安心して、働き、生活していくためには、社会的な援助が必要であることも忘れてはならないのだ。

僕はスウェーデンの人々に、高税率に不満が無いのか質問した。すると、「確かに、税率は高いかも知れない。しかし、この充実した生活があるのは、税金と政策のおかげである。だから、不満はない。むしろ、税金に感謝したいくらいだ。」との答えが返ってきた。僕はこのスウェーデンの高福祉社会を見て、その言葉の意味が分かった。

日本では、消費税率を八%に引き上げただけで、国中が大騒ぎし、不満を募らせた。来年、秋に消費税率がさらに十%に引き上げられるが、同じような反応を示すだろう。このように、多くの方が、税率が上がると批判ばかりしがちだ。しかし、僕たちは、まず、税金の使われ方を考えることから始める必要があるのではないだろうか。そして、税金の上に僕たちの今の生活が成り立っていることを改めて認識し、税金のありがたみを感じながら、感謝して生活すべきではないか。

中学生の僕でもできる消費税を払うという納税。これを払うことは、社会の一員としての責任を果たすことであり、また、より豊かな暮らし、より良い社会を作るための第一歩ではないかと思う。

## 『輝け！わたしたちの未来』

成田高等学校附属中学校3年 佐々木 夢叶

夏休みに入る前のこと……。先生からもらった課題表の中に、「税についての作文」を書くよう記されていた。普段はあまり気にも止めないそして考えようともしない「税」という文字を目の前に、わたしは三年前、租税教室に参加したことを思い出した。

わたしの通っていた小学校で、次代を担う児童（小学校六年生）を対象とした租税教室が開かれた。そこでは、税務署職員や市役所職員が講師となって、国・地方公共団体の財政を支える「税」の意義や役割、適正な申告と納税について、視聴覚教材等を利用してわかりやすく教えてくれた。小学生だったわたしたちにとり、初めて知ることが多く、感動と驚きを覚えたことを今でもよく覚えている。

税金とは、国または地方公共団体に租税として強制的に納める金銭であり、住みよい社会を実現させるための「会費」のようなものである。税金には、所得税、住民税、消費税、自動車税、たばこ税等々がある。わたしたち学生でも買い物すると八パーセントの消費税というものを店舗に支払わなければならない。消費税は、最も身近な税金であり、物品やサービスの代金に含まれ、最終的に、買った人（消費者）が負担するのである。

「どうして、百円のガムを買ったのに百八円払わなければいけないのだ。」

小遣いの少ないわたしにとり、それが正直なところ。でも、みんなが税金を払わなくなってしまうらどうであろうか……。今まで、学んだことから考えれば、充実した学校生活を送ることはできなくなる。また、病気になっても、十分な手当を受けることができなくなる。ゴミがたまって、誰も処理してくれず、清潔な暮らしができなくなる。交通事故が起きても、事故を解決できなくなって、ますます交通マナーが悪くなる等いろいろな場面で社会が上手く回らなくなってしまうことが予想される。

最近の社会では、消費税増税問題が話題に上がっており、今の消費税八パーセントが近々十パーセントになるという。この消費税増税に関しては、国のことを考えると賛成である。なぜなら今、日本は国の借金残高が千兆円を超えており、国内総生産の二倍近い水準は先進国の中でも最悪だからだ。ネット情報によると、消費税率一パーセントの引き上げで約二兆数千億円の増収になるという。つまり、今度の二パーセントの引き上げで約四兆数千億円の増収になるということだ。よって、八パーセントの頃と比べると少しは多く増収できることになる。増税した分を国が正しい目で判断し、子どもやお年寄り、すべての人々にとって住みよい社会づくりを行えば、小遣いからの支払いが二パーセント上がっても納得がいく。例えば、公共施設の老朽化対策を図る。貧富に関係なく心地よく遊べる施設を提供する等々である。増収した税でわたしたちの未来が明るく輝けることを期待したい。

## 「税金が支えてくれた命と生活、そして未来」

いすみ市立岬中学校3年 梶山 亜莉沙

先日、市長さんにお会いした際、「あなたは医学部に興味はありますか。」と、声をかけられた。いすみ市には医学部進学希望者を応援する奨学金制度があるからだった。

しかし、私には、大きな夢があり、既に、志望学部も決めている。なので、市長さんには、丁重に、お断りさせていただいた。私は薬学部に入り、新薬の開発・研究に携わりたいと考えている。きっかけは、六年前の兄の死だ。小学二年生の時、突然、難病に冒され、その後、くり返される再発の中、二度の移植手術を受け、懸命に、病魔と闘った兄。兄の命を助けたい一心で、新薬を試すという決断に至った母。しかし、その期待も絶望に終わってしまった。あの時の兄と母の落胆した表情を、私は今でも忘れることができない。あの時以来、私は一人でも多くの患者さんを笑顔にする為に、薬を通して、その尊い命を救いたいと強く思うようになった。いわば、これは、兄と母に捧げる、私の生涯をかけた挑戦でもあるのだ。

さて、ここで思い出したことがある。「兄が、入院中、検査や治療にかかる費用を、あれだけ長い期間、どうやって、捻出していたのだろうか？」と思い、母に訊いてみた。すると、母は、こんな話をしてくれた。「入院してからの二日間は、病名が確定していなかったから、渡された請求書を見た時は『二日で、この金額？この先どうしよう？』って、正直、思ったのよ。でもね、病院のスタッフの方が、『小児慢性特定疾病医療給付制度』というのを紹介してくれたの。その申請をしたおかげで、お兄ちゃんは、様々な検査も、最先端の治療も、そして何より、二度の移植手術も、なんの経済的心配なく、受けることが出来たのよ。」と。そして、母は、こうも付け加えた。「この給付制度は、皆が一生懸命働いて、納めた税金で成り立っているの。だから、お兄ちゃんの命も、私たちの生活も、その税金で支えてもらってるのよ。」と。幼な心にも、感謝の気持ちで一杯になり、私は、涙が止まらなくなった。

今回、いすみ市長さんが勧めてくださった「医学生奨学金制度」も、やはり市民の方々の税金から賄われている。

このように、その巨額の税金が、私たちの生活を、医療において、福祉において、教育において、支えてくれているのだ。私達は常に、そのことを心に留め、今一度、税金の大切さ、ありがたさを再認識しなければならないのではないだろうか。

私は、これからの日本の社会を担う若者の一人として、しっかりと学び、よりよい未来を実現する為に、誇りを持って、社会貢献できる大人になりたいと考えている。ただただ税金の恩恵に預かるだけではなく、今度は、納税する側として、人々の豊かで安全な生活を守るという責任と自覚を持って生きていく。

未来のために

墨田区立吾嬭立花中学校3年 大津山 祥

「税金」とは何だろうか。普段、私たちが物を買うときに消費税がかかる。例えば百円のものを買うときには八円消費税が加算される。さて、この八円はどのように使われ、日常生活にどのような影響を与えているのだろうか。私も今まで税金の使われ方を詳しく知らなかったが、今年の夏、「税」の認識が大きく変わる出来事があった。

今年の八月、私は区の海外派遣生として十日間オーストラリア研修に参加させていただいた。現地では学校に通ったり、ホストファミリーの心遣いで世界遺産のブルーマウンテンに連れて行ってもらい、大自然に触れるなど大変貴重な時間を過ごすことができた。

海外派遣については、費用を区が負担する説明があった。そして、その予算は税金から出ていることも分かった。いつも気に掛けていなかった税がこの様な目的で使われるということに区の代表という大きな責任を感じ、しっかり語学や文化を学んでこようという強い気持ちが沸いた。このありがたい経験を活かし、今後微力ではあるが貢献できることがあればと思う。

税金によって支えられているものは私たちの身近に沢山ある。公共の施設は殆だ。想像してみよう。税金のない暮らしを。水道は税によって整備されているので、朝起きて洗顔ができない。トイレの水も流せない。教育施設にも税金が使われているので、学校に行けない。勿論教科書もない。病院がない。病気になっても医師に診てもらえない。交番がない、図書館がない、公園がない…。

このように、考えてみるとないものばかりで生活が不便だらけになってしまうのだ。だから税金は必要不可欠で、なくしてはならないものであると私は考える。

最近ニュースで「少子高齢化」という言葉をよく耳にする。高齢化が進むことでそれだけ年金が増えてしまう。実際、一九九〇年には年金世代が一人に対して現役世代が九・八人で支えていたが、二〇〇〇年には年金世代一人に現役世代が三・九人、そして二〇六〇年には一・三人になると予想されている。又少子化が進むと労働力が減り、日本の経済活動が縮小してしまう。すると、私たちが納める税はどんどん高くなっていくだろう。そして税金は、益々欠かせないものとなっていく。

十年後、二十年後、私たちは幸せな生活を送っているだろうか。

百年後、二百年後、この国は明るい社会を築いているだろうか。

日本の未来が輝けるように今から私たちが行動していかなければいけないと思う。そのために私は多くの人々が税の使い道を正しく理解し、どれほど大事なもののかを熟知することが大きな一歩だと考える。納税は、私たち一人一人が住み良い社会を作るためにできることだと思うので大切に考えていきたい。

## 笑顔を作る税金

稲城市立稲城第三中学校3年 西尾 みすず

沢山の拍手。そして、笑顔。上手ね、と私たちのことを誉めてくれる声。ありがとう、と感謝して下さる言葉。感謝するのは私たちの方だ、と私は思った。その私が感謝するのは、老人ホームで生活し税金によって支えられている高齢者の方々だ。私はみなさんの笑顔を見て舞台を下りた。

私は、所属していた部活動で老人ホームを訪問し歌をお届けする、という活動に中学の三年間参加していた。先ほどの拍手や言葉は今年の中学最後の訪問演奏でのことだ。この体験は、私が税金やその未来について考えるためのヒントをくれる貴重なものになった。

今回、この税の作文を書くにあたって、税金についての冊子を読んだ。その時に、社会保障関係費が国の歳出で一番多いことを知り、興味を持った。また、社会保障関係費とは何だろう、と疑問に思い、調べてみた。すると安心して生活していくために必要なサービスを社会保障と言い、それに使われる税金であることが分かった。また、老人福祉が中心であると知った。最初は複雑で難しいと感じて頭を抱えたが、考えているうちにあの最後の訪問演奏の時に出会った高齢者の方々の顔が頭に浮かんだ。そうか！と私はひらめいた。社会保障の税金は私たちの演奏を喜んで下さった方々のためのものであったのか、と私は考えた。また、日本の社会保障関係費の割合は年々増加していて良いことだと思った。そして日本はなんて素敵な国なんだろう、と感じた。

しかし今、税金の無駄使いについて様々なニュースが報道されている。そのため、私は税金についてあまり良いイメージを持っていなかった。だが、私はもう税金は福祉など、国民のために使われることを知っている。また、私たちの税金によって今日も支えられている、生活、笑顔、命があるということに気付かされた。私は商品を買うことでしか税金を支払う経験をしたことがない。しかしそれも多くの人の笑顔を作ることに貢献していると思うと、嬉しくなった。

このような体験から私は、税金は高齢者の方々をはじめとする沢山の人々、そして未来のために必要不可欠なものだと考える。また少子高齢化が進んでいる日本では、私が社会人になって働くころ、社会保障の費用が増えるが、その費用を負担する人は減っている。だから、負担が多くて「税金が高い」と言う人が沢山いると思う。しかし、中学三年生になって初めて詳しい税金の使い道を知った私は、それはもったいないことだと思う。せっかく私たちはこの素敵な国に生まれたのだから、税金の使い道を深く理解するべきだと思う。そして税金は人々の笑顔を作る大切なものだと頭に入れて気持ち良く納税すべきだと思う。



## 国が変われば税金も変わる

足立区立花畑中学校 3年 松下 茉弥

世界にはいろいろな国がある。税金についても、それぞれの国ごとに違いがある。例えば、ある国は貴重な天然資源が豊富で、その資源を世界中に輸出すれば、国民はあまり働かなくても飢えたりすることはない。貿易で莫大な利益を得られるので、国民から税金を集めなくても学校も病院も道路も作ることができる。人口も少ないので、国民全員に質の高いサービスが行き届く。貧富の差はほとんどなくまるで物語に出てくる夢の国のようである。しかし、いつかこの資源が尽きたらどうなるだろう。輸出ができなくなり、国の収入がなくなってしまふ。その時急に国民に対して「税金を集めます」と言っても、今まで楽をして生きてきた人たちが喜んで働き、税金を払うだろうか。結局「夢の国」は将来が不安だ。

また、ある別の国は人口がとて多く、国土も広い。一体何人の国民がいるのか、政府でさえも正確に把握していない。この国には輸出するだけで国の費用を賄えるような資源はない。だから国民から税金を集めなければならないが、人数が多すぎてどこの誰が税金を払ったか、払っていないかがよくわからない。国民も「どうせ税金など払わなくても、ばれないさ」と思っている。このため、国の税金の収入がいつも不足している。学校、病院、道路はどれも粗末で、あまり国民の役に立っていない。やはりこの国も将来が暗い。

そのような国々に比べて日本はどうだろう。鉛筆一本買うにも税金がついてくる。ある場所に住んでいるだけで税金がかかる。私は、温泉にはいるにも税金がかかると知りとても驚いた。税金と私たちの生活は切り離せないものとなっている。大人になって働き始めたら、死ぬまでずっと何かしらの税金を払うだろう。しかし、税金は悪いものなのだろうか。例えば、私の学校にはプールがある。体育館もある。グランドピアノもある。校舎は地震や台風にもびくともしない。教科書は無料で配られる。これはなにも特別なことではなく、日本では普通だ。なぜだろう。それは税金のおかげだ。国民から集めた税金は教育だけでなく、さまざまな用途に使われている。火事が発生すれば、無料で消防車がきてくれる。一刻を争うときに、いちいち「消防車一台がいくらで、距離は何kmだから全部で〇〇円です」などと言っているだろうか。毎日出るごみも、決まった日に決まった場所に置いておくだけで収集車が焼却場へ運んでくれる。これもお金を払う必要はない。もし、これらが有料になってしまったら社会は大混乱するだろう。税金はやはり、必要だ。税金の難しいしくみはわからないが、簡単に言えば「みんなから集めてみんなのために使うもの」なのだと思う。

将来働くようになって税金を払うようになったら、そのときはこの作文のことを思い出してみようと思う。

## 国民皆保険制度とグローバル化

横浜市立日野南中学校3年 山東 由実

今回、「税金」をテーマにした作文を書くために、税金がどんなところで使われているのかについて調べた。税金はすべての国民に必要なサービスや公共施設を提供するために国や地方公共団体がその費用を税という形で集めているお金である。私たちにとって一番身近なところでは、「教育費」で、歳出の約二割を占めている。国民が私たちのために協力して税金を納めてくれていると思うと身が引き締まる思いである。もっと調べてみると、気になる記事が出てきた。「国民皆保険制度の崩壊」という記事である。国民皆保険とは国民全員が医療費の保険に入る制度のことであるが、日本ではその制度の維持に多くの税金が投入されている。インターネットで調べた最近の報告（二〇一五年度分）では国の歳出の二十二・六%にのぼる。少子高齢化で納税額は横ばいだが高齢者の医療費増大で成り立たなくなるという話かと思ったがその記事は違った。

平成二十四年の住民基本台帳法一部改正で、たった三カ月しか滞在しない外国人でも国民健康保険を利用することができる。留学ビザ、経営管理ビザ、就労ビザ、特定活動ビザで来日し、保険料滞納を隠して病院にかかり料金を踏み倒すケースや、外国人同士の保険証の貸借でやり過ごすケースも増えている。中国国内で受けることのできない最先端治療、例えば、高額薬価で知られるハーボニーを使用した治療は肝炎治療医療費助成金の対象であり、欧米で治療を受けるより数百万円以上安く済む。そのため、中国人富裕層が日本の医療費助成を利用するケースが増えているというのである。これらのケースに対しても日本国民の税金が使われているのだから驚きである。それにもかかわらず、政府はさらに人手不足解消のため、「外国人の新在留資格創設」を急いでいるようである。日本人でも経済的理由で長期滞納者がいないわけではないが、金額ではずっと少ない。島国文化、言葉がなくても分かり合えると勘違いしている日本人が、急激なグローバル化によりいろいろな面で不利益を被ることが増えてきたように感じている。どの高校説明会でも「グローバル教育」という言葉が使われている。外国人との交流し多様な文化に親しみ、国際的に活躍できる人材を育成することは、確かに国の重要課題であろう。税金は確かに社会を支えるために使われているが、公正な審査体制や税金の無駄遣いに対する厳しい罰則は必要である。国の歳入に対する公債（借金）の割合が三十四・五%であることから考えても、将来自分たちがこの借金を引き受ける覚悟があるのかと言えば正直ない。

三年後の十八歳から選挙で投票できるようになる。この三年間で社会で起こっていることをより深く学び、そして賢い判断ができるように成長したいと感じた。

## 増える観光客と出国税

横浜市立富岡中学校3年 高瀬 初音

最近、空港に放置されたままのスーツケースが増えているというニュースを見ました。これは、日本を訪れる外国人観光客が、日本で予定以上のたくさんの買い物をして荷物が増えてしまい、帰国する飛行機に乗る前に、より大きなスーツケースを買い、不要になった小さいスーツケースを置いて帰ってしまうというものです。しかも、それが通路やエスカレーターの下などにポツンと置かれていて、いらなくなったスーツケースだと分かりにくく、忘れ物かも知れないし、もしかしたら爆発物かも知れないということで、時に大騒ぎになってしまいます。それによって空港の警備員が時間を取られ、本来の空港警備の仕事に支障が出てしまうことは大きな問題です。また、観光客が荷物を減らすために、買ったものの箱や梱包材を捨てることで空港のゴミ置場があふれてしまうというニュースも聞いたことがあります。

日本を訪れる観光客は年々増えていて、二〇十二年には八〇〇万人でしたが、二〇十七年には二八六九万人を突破しました。修学旅行で行った京都でも、大勢の外国人旅行客を見かけました。東京の浅草では、外国かと錯覚するくらい外国人であふれていて驚きました。2年後に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることもあり、これからますます外国人観光客は増えると思います。そのため、観光客の増加に関わる問題に対応するお金が必要になってくるはずです。

そんな中、来年の一月から「国際観光旅客税」通称「出国税」という税金が施行されることになりました。日本から、飛行機や船で出国するとき一人千円の税を納めるというものです。これは私たち日本人が海外へ行くときも対象になります。二〇十六年に日本を出国した人は四千万人で、それを参考に計算すると約四百億円の税収が見込まれています。集まったお金は観光地の整備や空港の管理設備に使われるそうです。

私はこれを聞いたとき、なぜ所得税や消費税を使わないのだろうかと思いました。実際、新しい税金をつくるのは二十七年ぶりです。大変だと感じたからです。でも、考えてみると、あまり空港を利用しない人や観光地に行かない人も同じように負担するのは不公平だとも思いました。だから、所得税や消費税は使わず、新しく税をつくることに納得しました。どのような用途で使うお金をどのように集めるのかというのは払う側にとっても、大切なことです。必要なお金だと納得すれば、払う人の理解を得やすいと思います。

時代の変化と共に、必要な税金が変わるのは当然です。時代にあった新しい税について関心を持ち、どこに誰が負担する税が必要かを考え、より良い社会の一員に近づいていきたいです。

## 災害と税金

山梨市立山梨北中学校3年 鈴木 祥大

この夏休みは中国四国地方の大規模土砂災害の被害が平成開始以来最悪というニュースが流れる中始まった。テレビで見ると山が大幅に崩れ土砂が多量に町に押し寄せどこが道かもわからないようなひどい有様で、まるで東日本大震災の大津波の被災地のような感じだった。災害復旧のためのパワーショベルがたくさん動員され自衛隊が大勢集まって救助活動にあたっていた。

ニュースを見ているうちにふと思った。災害復旧のためのたくさんの人々は全員がボランティアというわけでもなさそうだ。パワーショベルもどこから手に入れたのか無料で善意の人が貸したとは思えない台数だ。思い出したのは小学校のころあった山梨の大雪。一メートルもの大雪で道路は通行ができなくなったがどこからともなくブルドーザーがやってきてどんどん雪を運び出してきて本当に助かると思った。あれは地元の建設業の方々が活躍していたがあれもボランティアだったのだろうか？

調べてみてわかったのはあの大雪を片付けるためのブルドーザーなどの費用はその道を管理する市町村、都道府県、国道の場合は国土交通省が負担しているらしい。ということは国の予算、税金から支払われているということだ。でも中国四国の大規模土砂災害のように今までなかったような大規模災害があった時は予算を超えてしまうこともあるだろう。そういう時はどうするのか？

支払い切れないくらい高額な費用がかかった時は東日本大震災の時は復興債という借金を国がしてそれを少しずつ返す仕組みを使ったらしい。もちろん借金を返すのは税金からだ。それでも間に合わなかったので復興増税という割増の税金を現在も毎年すべての国民が納めている。二〇一一年の災害復旧の借金を八年たった今も返しているのだ。

親に聞いてみたら復興増税を給料から天引きで払っているから手元に来るお金が減ってしまって生活が大変だと言っていた。中国四国の大規模土砂災害も東日本大震災と同じくらい復旧のお金がかかりそうだから復興増税が増えるのかな？と心配していた。テレビで見る災害復旧工事の費用を我が家も支払っていたのだ。

地球温暖化でこれからも大規模災害が増えるかもしれない。災害にあった時助けてくれるのは税金だとわかった。税金はとても力強い味方だと思う。でも毎年集まった税金をすべて国が使っていてしまってよいのだろうか？

僕が小づかいをやりくりするように国も税金を節約して貯金に回すようなことが必要ではないか。そう思ったら税金が使われている学校の電気や水道代も節約しなければならないと思った。身近なところから税金を節約していきたい。

「どう、よく聞こえるけ？」

私の祖父は重度の難聴であり、日常会話をするにも補聴器が必要不可欠である。そんな祖父がつい最近、新しい補聴器を買った。性能の良い新型の補聴器に、祖父は満足げである。しかし、ふと私の目に留まったパンフレットには、想像を超えた額の補聴器が並んでいた。

「こんな高いお金、払ったん？」

「違うよ。この補聴器は市の補助金を使って買ったんだよ。ありがたいねえ。」と祖母が言った。そして、その補助金は国の税金で賄われていることも教えてくれた。思いがけない「補助金」「税金」というワードの登場に、私は驚いた。

それまでの私は正直なところ、税金に対してあまり良いイメージを持っていなかった。買い物をするときには、消費税が上乘せされたレシートの合計金額を見ると、余計に支払わされて何だか損をしたような気分になっていた。また、二〇一九年一〇月から消費税率が一〇%に引き上げられる、というニュースを見たとき、私は家族に不平不満ばかり言っていたのを覚えている。そのときの私は当然、税金が存在するメリットを見い出せていなかった。

しかし、祖父のことがあってから私の考えは変わった。税金は決して悪いものではなく、むしろありがたいものなのだ。私が今、祖父とこうして話ができるのも税金のおかげである。税金があるからこそ、私たちは豊かで安心な生活を送ることができるのだ。税金を「嫌なもの」だと思っていた自分が恥ずかしくなった。

私の将来の夢は、研究開発の仕事に就くことである。人の役に立つ研究をしたい、そう思っている。現在日本では、基礎的研究のほか、宇宙開発、海洋開発、情報通信の研究開発などの推進に税金が使われているようだ。もし私が自分の夢を実現させたなら、税金の恩恵を受けることになる。ありがたい限りである。税金は私らしく生きていくためになくてはならない大切なものだと実感した。

世の中には税金にマイナスなイメージを持っている人がたくさんいると思う。税金はとられるもので、何の得にもならない、そう感じているからではないだろうか。私もその一人だった。でも「それは違う」と今の私なら言える。国民の誰もが必ず税金の恩恵を受けている。税によってお互いを支え、そして支えられている。このことをしっかり心に留め納税者としての誇りと自覚をもって、税金と向き合っていきたい。

「うわあ。綺麗。」

思わず口にした。それはとても美しい色とりどりの羽をもつキジだった。私の家族はキャンプが好きで、私の住む岐阜県の山や他県の山にキャンプに行く。大自然の中過ごす、普段は見えない夜空の星、山からの湧き水、虫の声がある。私の住む日本は四季があり、四季の移り変わりで自然も変化する。春の桜、夏の海、秋の紅葉、冬の銀世界。私は日本に生まれて良かったと思う。私は日本が大好きだ。

「税の作文を書くことにした。でも税金のこと詳しく知らない。」

と言った私に母は

「国民の三大義務って何か知ってる？」

と聞いた。三大義務は何となく知っていた。

「教育の義務、勤労の義務、納税の義務。」

と答えた私に、

「そうやね。今、こうして知りたいという欲求を満たすことも、皆が平等に教科書で学べることも、権利として保障されているんだよ。人は生まれながらにして、人の役に立ちたい、認められたい、学びたいという欲求があるんだよ。日本は、税金を納めることも義務としているから、安心して暮すことや、学ぶことができるんだよ。」

と教えてくれた。学校へ行くまでの道路も教科書も税金から与えてもらっていると知り、ありがたいなあと思った。調べてみると、暑さ寒さをしのげる校舎や、おいしい給食にも税金が使われ、何げなく生活している中にも、恩恵を受けていることを知った。

小学生の時、階段をふみ外し、天と地がひっくり返る体験をしたことがある。大丈夫？と、かけ寄ってくれる級友に、うなずいたものの経験したことない痛みが襲った。苦痛に顔がゆがみ息も出来ない思いだった。すぐ病院に運ばれ、診察の結果、骨折していた。先生やクラスの優しさに感謝した出来事だった。その時の医療費も、私の住む市の税金から出ていることを知り、税金がなければ高額な医療費を払うことになっていたのだと思うと税金にも感謝の気持ちが湧いた。

私は今、中学三年生になり高校受験を控えている。中体連が終わり勉強に向き合い、友達と教え合ったり一緒に一つの問題を解いたりする楽しさを感じている。すごく難しい問題を教科書とにらめっこしながら解き、友達と喜び合う時は、とても最高である。

中学生の私が支払っている税金は食品に関する消費税だが、消費税を支払うことで、私が受けた医療費のように知らない誰かの役に立っていると思うと誇らしい気持ちにさえなってくる。

美しい四季のある私の大好きな日本が、さらに豊かな国になるために、国民の三大義務を果たして、人に親切にすることを忘れない大人になりたいと思った。

## 私の希望

愛知教育大学附属岡崎中学校3年 富崎 美心

「ママ、私が小3の時に救急車に乗ったじゃん。あれって後でお金支払ったの？」

笑いながら母は、

「払ってないよ。」

「まじで！診察代もお薬も私、全部が無料でしょ。救急車まで無料って日本すごすぎるね！」

「みいちゃん、中一の時に手術したでしょ。あれも『子供医療費助成』で無料だったから本当に助かったんだよ。」

「へえ～、私ってかなり税金にお世話になってたんだね。子供って税金とか関係ないかと思ってたよ。」

「そっかあ。でも近所の公園も、樹が大きくなり過ぎて、切ったりしてるじゃん。あれも税金だよ。」

正直、買い物をして、何も気に留めず支払っていた消費税。どこでどんな風に使われているのかさえ興味がなかった。知らない事が何だか恥ずかしくなってきた。私は、救急車が一回出動するのに、いくら位かかるのか調べてみた。なんと、四万五千円もの税金が支払われているそう。驚く事に、タクシー代わり119番する人もいるのが現実だ。有料にすると、重症な人が、お金がない事で呼ぶ事さえためらうかもしれない。大切な税金で命を守る為には、利用する人が正しいモラルを身につける必要があると思う。

税金は私と、縁遠いものだと思っていた。しかし今回作文を書く事がきっかけで、税金は、身近な存在である事に気づかせてもらう事ができた。

買い物へ行って、会計をする時、思わず心の中で

「誰かのために行ってらっしゃい。」

と消費税に声をかけてみた。

「うん！ありがとう。行ってくるよ！！頑張ってくるよ！」

そんな声が聞こえた気がした。これから自分自身、病院へ行く事があれば、きっと今までとは違う感謝の気持ちで、診察やお薬を貰う自分がいると思う。そこには、たくさんの誰かの優しさがあると知り、私もその中の一人である事が、誇らしい。これからも、住みやすい私の町であり続けて欲しい。おおげさかも知れないが、住みやすい日本であって欲しいと心から希望する。

少子高齢化、環境問題等、今たくさん抱える日本。私は、たくさん抱えている今だからこそ、税金の使い方に真摯に向き合うべきではないかと思う。全ての事柄に関連性があると考えからだ。例えば、少子高齢化と子供の貧困問題。一見関連性がないように見える。では、こう考えてみてはどうだろうか。近い将来、次世代の働き手が不足すると考えられている。しかし、現状では次世代の七人に一人（二〇一六年現在）が貧困に苦しんでいると言われている。貴重な次世代の七人に一人はきちんと学校で学ぶことが出来ない。そのために、就職ができないこともある。このままでは、近い将来、本当に働き手が不足する。だから私は、今こそ税金の使途について真剣に考える時ではないかと思う。

さて、前述したことを踏まえると、今、最も重要視すべきものは、子供の教育の充実だと考える。では、国中の子供の教育費を国の予算からどのように捻出するか。それは今の消費税の引き上げが近道ではないだろうか。しかし、消費税の引き上げは使途がはっきりと国民に見えないと難しいと思う。使途不明なものに出資する人はいないだろう。私には無理だ。それに、貧困で苦しんでいる人がさらに苦しい生活を強いられることになるだろう。しかし、消費税を教育費にあて、彼らにきちんとした教育を受けさせることは将来の働き手を育てることにつながるのではないだろうか。子供は将来の納税者だからだ。「大学までの教育費の無償化」、これなら国民の目にしっかりと使途を示すことが出来るはずだ。

ただ、ここで、このような反対意見が出てくることも予測される。「子供がいない世帯には不公平だ。」と。しかし、その人たちもいずれは高齢者となる。その時、投資をしていた子供たちの税金によって、助けられることもある。

つまり、消費税の引き上げをするにあたって、「教育費の無償化」と、使途を明確にすることにより国民の理解を得る。そして、速やかに無償化をすることにより、近い将来の働き手の不足を補えるのではないだろうか。

今、貧困により生活保護を受けている。そのために進学を断念せざるを得ない。そして就職ができない。できても給与が少ないため結婚や出産をあきらめる。という負のスパイルが出来上がっている。さらにこのことが、少子高齢化という負のスパイルをも加速させているのではないだろうか。

最初は実行することが難しいだろう。しかし、千里の道も一歩から。先人の言葉をかみしめて、私たちは歩んでゆくべきではないだろうか。



参加する姿勢で、変わる。

東近江市立玉園中学校 3年 松村 ほのか

よく利用する百円ショップが少し高くなっている、と気付いたのは小学五年生の時だった。百円玉と五円玉の二枚を出せば済んだのに、三円上がっている。消費税が増えたことを感じた。とは言っても、税金を支払っている意識もなく、税金について考えたこともなかった。

中学校で、税に関するパンフレットが配られた。今まで自分には関係のないことのように思っていたので、正直それほど興味もなかった。中を開くと、ニュースなどで少し聞き覚えのある言葉が、カラフルなグラフとともに並んでいる。最も身近な消費税に注目して読んでみると、世界的には消費税の課税標準税率が十パーセントから二十パーセント前後の国が多いこと、日々の買い物で付いてくるから仕方ないと感じていた消費税だが、世界に比べると日本は低い方だということを知った。

日本の二、三倍にもあたる消費税を払っている国の国民は、不満がないのかが気になった。世界の税について調べてみると、国によって様々な種類の税があることがわかった。日本では考えられないようなユニークな税や厳しい税もあった。何より非常に高い税金を課せられている国が多いことに驚いた。

しかし、高いからと言って国民が不満を持っているわけではないらしい。フィンランドやデンマークは税負担が大きい分、教育や医療費の無償化、福祉も充実している。そのため、幸福度ランキングでは満足度の高い国として有名だ。日本も高負担な国であるが、残念ながら国民の満足度は高くない。この差はなんなのだろう。

日本も公共設備やサービスは充実しているし、当然のように生活しているあちこちで、税金の恩恵を受けているのだろう。

その反面、本当に必要なのか、と感じるニュースも耳にする。国民が様々なところで支払うことを義務とされている税金が、無駄に使われているのではないかと疑問を持っている人が多いために、満足度として表れないのではないかと思う。

それは、国への「信頼」という言葉でも置き換えられるのではないか。財政が赤字だからと消費税の段階的な引き上げを決定し、反発があるから延期する。それでは、国民の理解も信頼も得られない。高齢化による働き手の減少や少子化など、増税はやむを得ないが、しっかりとした説明と正しく使われているかを厳しい目でチェックすることが大切だ。国民一人ひとりが高い関心を持ち、参加する、という姿勢が、日本に合った税のしくみを見つける近道になるだろう。

この学習を通し、私自身も正しい知識を身につけ、自分の意見をしっかりともった一人になりたい。と同時に、三年後の十八歳から与えられる選挙権を、有意義に行使しようと心に決めた。

「税が有効に使われるように」

京丹後市立大宮中学校 3年 山中 円美

税について考えるのは大人。私は以前までそう思っていた。しかし、学校の租税教室で日本の税に関する問題を知り、自分も税について真剣に考えたいと思った。

まず私が考えたのは、高い税率を保つことによって、税による国の収入を安定させることだった。スウェーデンのように税率が高ければ、社会保障も充実し、これから福祉にお金のかかる日本も安心できるのでは、と考えた。しかし、それはあまりにも浅はかな考えだった。スウェーデンについて調べてみると、人口は年々増加しており、人口ピラミッドを見ても日本に比べて子供の割合が高い。出生率は高いとは言えないが、移民によって人口は増え続けている。要するに、高い税率をキープするだけの働き手が、スウェーデンにはあるのだ。だから、少子化が進み、人口も減少傾向にある日本には税率の高さを真似することはできないのだと分かった。

では、日本には何ができるのか。そう考えた時、私は税の使い方を見直すべきだと思った。しかし、今税が使われている身のまわりのものに、おそらく無駄なものなどない。「これにお金を使うことはやめる」と簡単に言うこともできない。その上で私が考えたのは、今税が使われているもの自体を安くできないか、ということだ。そこで私が目をつけたのは、薬だった。父が薬剤師をしていることもあり、私は薬について興味があった。それで、父から薬について何度も聞いていたため、「ジェネリック医薬品」がもっとうまく使えないかと思った。ジェネリック医薬品は新薬に比べ、価格が安い。だから、今使われている薬を可能な限りジェネリック医薬品に変えれば、少しはお金がかからなくなるのではないだろうか。そう思い、父に聞いてみた。すると、「新薬を望む方もいらっしやるよ。」と言われてしまった。やはり簡単にはいかないのだと感じた。でも、「ジェネリック医薬品でもいい」と考える人もいるはずだ。だから、そういう人に積極的にジェネリック医薬品を使ってもらうようにすれば医療費の削減にもつながるのではないだろうか。

薬を通して税の使い方を考える中で、国が動くのはもちろんのこと、日本国民である私たちが税の使われ方について意識するべきだと思うようになった。例えば、私たちが健康に気をつけることによって病院での医療費は減る。そういうセルフメディケーションといった考えが広まれば、税の使い方はもっと変わってくるはずだ。

日本の税の問題について考えてみて私が感じたのは、税について考えることはとても難しいということだ。しかしそれと同時に、税の問題を国任せにしてはいけないことにも気づいた。だから、税によって支えられている身の回りのものをあたりまえと思わず、もっと有効に税が使われるように考えて行動することが今の私たちに必要なことだと思う。

税を納めたい！

金光八尾中学校 3年 杉本 葵

8歳の時に、私は夜中に、激痛で飛び起きました。下腹部の痛みでうずくまって倒れてしまいました。その場に居た母親が慌てて、救急車を呼びました。5分程で到着した救急車で、東大阪医療センターに運ばれました。そこで、初めてCTスキャン検査をしたり、色々な検査を受けました。診断の結果は、急性腹膜炎（盲腸炎）でした。炎症が腹膜にまで広がった状態で、すぐに緊急開腹手術が必要となりましたが、夜中だったために、小児科の先生が不在だったので、別の病院に、搬送されました。そして、すぐに手術室に入りました。とても怖かったです。「怖い怖い」と叫んでいると、先生が、「お母さんも一緒にどうぞ」と言ってくれて、手術室の中まで母親も一緒でした。安心できたのを、今でも覚えています。麻酔注射をすると、すぐに意識が無くなりました。気づいた時には、無事に手術を終えており、私のお腹から取り出した、小さな盲腸を見せてもらいました。こんな小さい物があれ程の激痛を起こすのかとびっくりしました。手術は、一時間で終わり、傷跡も今はわかりません。

退院の日の朝、執刀医の遠藤先生に、私はベッドの上に立ち、「私は医者に必ずなる」と言いました。遠藤先生は、大変喜んでくれました。「待ってるからな！」と、約束をしました。それから一生懸命に勉強をし、中学受験をしました。

そしてその中学校の授業で、「わたしたちの生活と税」を勉強しました。家に帰って母親に聞いたら、あの時の入院、手術などの医療費は全く払っていないと。全ての医療費は税金で助けられている事を知りました。知らず知らずのうちに、税金のお世話になっていたことにおどろきました。

このように、私達の生活と税金は、切っては切れない関係になっています。生まれてから、現在まで税金に守られ、助けてもらっています。だから恩返しをしたいです。

もし税金が無かったら、救急車も有料で、手術代も入院費も高額になります。学校に通えば、教科書代も有料になります。学校の校舎もプールも図書館も体育館も、税金によって、まかなわれています。税金が、私達の生活を豊かにしてくれています。あたり前すぎて、あたり前に感謝することを、忘れてはいけないと思います。

「税を納めたい、それが社会を救い、自分も救われているから。」

私達が、もっと税を理解し、関心をもてば、社会は、大きく前進すると思います。税金を納める事は、すなわち誰かのために役に立てた証だと私は強く思います。助け合いながら成り立つ社会、それを支えているのが、税金だと言うことを、一人ひとりが考えることが、大切なことだと思います。

## 税金の使い道

昇陽中学校 3年 永橋 舞雪

先日、父が広島県に土砂災害による行方不明者の捜索のため、大阪府から緊急消防援助隊として広島県へ派遣されました。父は消防士です。四十四歳の女性一人がまだ見つからないので出動すると言っていました。四日間の活動で大阪府から消防士が約七十人出動しており、一ヶ月間で千人以上も出動したらしいです。これは国からの指示で出動しており、それに関わる費用は国が負担するという仕組みであることを父から教えてもらいました。普段は消防は市の中で消防業務を行っており、市がその費用を負担しているということです。しかし、今回のような広島県の大規模な土砂災害では全国の市町村から消防が応援に駆けつけ国が費用を負担するというものです。これらの市町村や国の費用はすべて税金ということです。もし、この税金が無ければどうなるのでしょうか。おそらく人を助けるために出動する消防車の費用を払えなくなります。また、消防士に給料を払うことができなくなります。だから助けてもらいたければその人達はその都度お金を払うということになるのでしょうか。救急車を呼ぶ時もきっとタクシーに乗る時のように毎回お金を払うことになるでしょう。これは消防に限ったことではありません。税金が無ければ警察や自衛隊で働いている人の給料をどうやって払っていくのか、どうやって国を守っていくのか想像できません。では、どこに税金が使われるべきなのでしょう。私はかけがえない命を守る仕事に優先的に税金が使われるべきだと思います。私たちは生きていなければ世の中のことはすべて何も始まらないのです。テニスコートでテニスをしたり、カラオケで友達と遊んだり、学校で勉強したり、生きていなければ何も始まりません。広島県の土砂災害の救助活動から帰ってきた父が言っていました。行方不明者の最後の一人を見つけられなかった。その人とその家族のことを頭に思い浮かべて全力で活動したが結局見つけられなかった。それにもかかわらず、現地の多くの人から感謝の言葉をもらい申し訳なかったと。私はその話を聞いた時、父の今回の活動に税金が使われていることは間違っていないと思いました。当然、現地の人もそう思っているでしょうし、ほとんどの国民は賛成するのではないのでしょうか。私も私の両親も今もこれからも税金を払っていかなければなりません。しかし、税金はいくらでもあるわけではありません。限りある税金を必要なものすべてに使うこともできません。税金の使い道をしっかりと議論することが私たちの生きる喜びにつながっていくと考えています。

消費税は、中学生である私たちが唯一払っている税金です。そんな最も身近である消費税が、来年十月に税率十パーセントに引き上げられることをニュースで知りました。そのときの私は消費税についてよく知らず、「どうして働いていない私まで税金を納めないといけないの。」と文句を口にしました。すると、母は「消費税のない時代もあったんだよ。どうしてできたんだと思う？」と意外な質問を返してきました。生まれたときから消費税があった私にとって、消費税のない時代など想像できず、質問に答えることができませんでした。そこで、消費税について詳しく調べ、いくつかの疑問を解決することにしました。

一つ目の疑問は、なぜ消費税ができたのかということです。戦後の日本の税金は、所得税を中心としたものでした。しかし、時代が移りゆくなかで、税金のしくみは時代にそぐわなくなっています。例えば、当時贅沢な商品にかけられていた「物品税」です。国民の生活水準が上がったために贅沢の基準が曖昧になり、線引きが難しくなっていました。そこで、このような問題を解決するために、購入者全ての人々に平等に課せられる消費税が導入されたのです。

二つ目の疑問は、なぜ消費税が増税されることになったのかということです。近年、少子高齢化によって年金や介護をはじめとした社会保障費が急増しています。その財源を確保するためには、減少していく現役世代に負担が集中する所得税や法人税よりも、国民全体で広く負担する消費税を引き上げたほうが良いと考えられました。消費税が導入された平成元年当初に三パーセントだった税率は、これまで二度の引き上げを経て現在の八パーセントになり、ついに来年十パーセントに引き上げられることになったのです。

消費税について詳しく調べる中で、時代に合わせて税金も少しずつ変化してきたことがわかりました。さらに、先日受けた租税教室では、私たちが国や地方公共団体に納めた税金が、公共施設の整備・管理や医療費の一部負担、警察、消防、そして教育などの費用に充てられていることを知りました。

これらの知識を得た今、「どうして私たちも税金を納めなければならないのか」に対する自分なりの答えが出てきました。私たちは常に、税金のしくみに助けられているのです。生活の中で考えるのは納税による負担のことかもしれませんが、私たちの暮らしを支えているのは税金だと言っても過言ではありません。

『みんなは一人のために、一人はみんなのために』という言葉があります。私たちは、これまでもこれからも多くの人々が納めた税金によって助けられていくでしょう。その恩返しとして、私も納税者の義務を果たしていくのだなと思いました。

## 税について

尼崎市立常陽中学校 3年 篠田 直哉

僕は、スポーツが好きでよくテレビでサッカーやテニスを見ます。プロスポーツ選手が躍動する様を見るのは、それは格好良く憧れの的です。でも残念に思うことがありました。数年前にサッカーの選手が税金の未払いが発覚し、脱税の疑いを掛けられていました。裁判や投獄などの厳罰の可能性もあり、とても気の毒だなと思いました。でも、そのニュースを一緒に見ていた家族が、「脱税はゆるされないね」というのを聞いて、疑問に思いました。税金が徴収されなくなることの問題点がわからないのです。その時、父が「税金が徴収できないと、命が助けられないことがおこるから大変なんだ」と言うのを聞いて、なぜ、税金が徴収できないと問題が起こるのか知りたくなりました。

税金が減ることで、なぜ人命が救えなくなるのか、疑問に思いました。父の仕事は道路構造物の維持管理に係わることをしています。聞くところによると税金によって道路が作られているとのこと。話を聞く中で、日本にある高速道路の延長は約1万kmであることがわかりました。しかも、その中には橋梁やトンネルなど、建設するために莫大な国家予算である税金が使われていることがわかりました。これらは国民の生活をささえる重要な道となっています。でも、最近では熊本地震や東北大震災をはじめとする災害が多く発生し、大切な道路構造物が破壊される場面を見ます。東北大震災発生時の津波が襲い掛かることで、様々なものが飲み込まれ破壊される状況はとても信じられない光景でした。悲しいことですが、自然の猛威にはなすすべもありません。このような天災は逃れられません。いかに逃げるかも重要だと聞きます。でも道路が破壊されれば逃げることはできません。そこで、道路が網の目のようにネットワーク化がなされていけば違うルートを選択ができるとのこと。重要な緊急避難路となるよう、我が国の重要な取組の一つだそうです。でも、もし、このネットワーク化ができていなければ、それも税金が徴収できないことで、不完全になってしまったらと思うと、とても辛いです。

この話を聞いて、「命」を救うことができる税金の意味がわかりました。今まで、税金は人のために使われると思っていましたが、具体的にとても身近に感じることができました。聞いたり調べたことで、税金徴収の難しさや使い道の選び方など様々な課題があり、優先順位を付けることの困難さもわかったことが、自分にとって勉強になりました。

普段の生活のなかで、僕ができることはとても限られています。家族でドライブに出かけて道路を使っても、乗り心地のいい道路だなと思うくらいです。でも、これから学生生活を経て社会人になることを前提にすると、いずれ税金が払えるようになると思います。

最近、ニュースでは天気について取り上げられることが多くなったように思います。理由は、今年の七月の西日本豪雨があったからだと思います。理由はそれだけではないと思うけれど、もう一度同じ様な災害が起こったときに、少しでも多くの命がたすかってほしいという思いはみんな同じだと思います。そこで私は、西日本豪雨後の被害と税金の関わりについて調べてみました。すると、避難所にクーラーをつけることや、仮設トイレを増やすことに税金が使われていると分かりました。その他にも、被災された方への援助に税金が使われていると知りました。今まで知らなかったことが、今回の西日本豪雨を通して知るきっかけになったことは良かったのではないかと私は思います。

しかし、この豪雨から一ヶ月たった今も、まだまだたくさんの課題が残っていると聞きました。その一つに、大量のゴミの問題が挙げられます。一時的にごみを集めても、その後の処理やにおいの問題など、被災された方々の不自由はすごく大きいと思います。それに、被害にあって家をなくした人、家だけでなく、もっと大切なものをなくしてしまった人がいるということも改めて知りました。

だから、私は、税金はそんな人達の傷を少しでも小さくするために使ってほしいと思います。今回の豪雨では幸いにも私の大切な人達はみんな無事だったけど、次にもう一度今回のようなことが起きたら、どうなるかは分かりません。だからこそ、自分のことに置き換えて、被災された方の立場になって考えることが何よりも大切だと思います。そして、被災地とは遠い場所に住んでいる人に、テレビで見たことやたくさんの情報を通して自分が感じたことなどを伝えることが今の私たちに出来ることだと思います。身近な人にも、とにかく伝えることで変わることはたくさんあると私は思うからです。そして、私ならその場面で、今回調べたように、税金は被災された人達の役に立っていることや、もとの生活に少しでも近づけるために使われているということ伝えると思います。

もともと被害が多い国で生活する私達は、これから何年か後に来るだろうと言われている大きな地震や、大雨に限らず起こる、さまざまな災害に備えることが大切です。しかし、災害に備えて準備しておくことにも限りがあります。例えば、家の倉庫に、万全に準備をした防災グッズをおいておきます。でも、その倉庫ごとなくなってしまうと私達は何もすることができません。そんなとき、税金の力を借りるのです。だから私は、もしものとき、命をも助けてくれる税金により一層感謝しようと思います。そして今は、そんな大切なはたらきをしてくれる税金を納めてくれている人がたくさんいるということをお忘れず、私が大人になったときには、逆の立場から、税金を通して誰かの役に立ちたいと思います。

## 思いやりの税

和歌山県立日高高等学校附属中学校 3年 祭本 真由

西日本大豪雨。多くの被害、被災者を出した災害。そのニュースを連日見ていた私の感想は、被災者に対する哀れみや同情だった。しかし、テレビや新聞を見るたびに、あることに気付いた。それは、自衛隊の方々が汗を流して、懸命に行方不明者の捜索や復旧作業に取り組んでおられる姿だった。あまり、私たちの生活とは関わりのない自衛隊だが、その働く姿を目にすると、自衛隊に少し興味が湧いてきた。

今までの、私の自衛隊に対する考えは、何のために毎日訓練やトレーニングを仕事として行っているのかというものだった。しかも、税金を使って。つまり、あまり好印象ではなかったということだ。

私たちには、自衛隊のように災害が起これば、いつでも出動できる準備ができていないわけではない。もし、ボランティアで参加したとしても、慣れないことであまり力になれないかもしれない。さらに、私は中学生で勉強というすべきことがあり、大人の方も仕事それぞれにあるはずだ。そう簡単には、自分の思いだけでは助けられないのが現実。そんな中仕事ではあるが、自ら危険な場所に赴き、率先して作業する。自衛隊の方がいなければ、災害大国日本の復興がこれほど早く行われていないと言っても過言ではない。しかし、ついこの間まで私もそうだったように、日本という国は残念なことに、自衛隊は税金泥棒、などという人がいるのも事実。確かに彼らは税金で動いている。しかし、私たちにはできないことをしておられることを忘れてはならない。

そもそも、税金は皆の豊かな暮らしを願ってこそそのもので、その一環として、自衛隊の方々の活動がある。それに、自衛隊の方を税金泥棒と呼ばわるのなら、自分を見直したほうがよいだろう。私でさえ、小学校・中学校で、多くの納税者のおかげで多額の学費を一円も払うことなく、勉強できている。この十五年間でどれだけ多くの税金を使わせていただいていることか。税金がなければ生きていけない人たちがほとんどなのに、そのような言い方はないのではないかと思う。もちろん、私は働いていないので消費税くらいしか支払っていない。だから、仕事をしてやっと手に入るお金から、税金としていくらか払わなければならないことは大変なのかどうかもわからない。しかし、私は将来、労働者という立場になっても、たくさんの税金を納める立場になっても、今の気持ち、税金のありがたさは忘れない人間になりたい。

日本が重税国家と言われる理由は、国民がお互いの幸せを願っているからなのだと思う。これこそ、日本が世界に誇るべき助け合い精神、「思いやり」なのだろう。



## 税金の使い道 一豪雨を受けて一

新見市立新見南中学校 3年 川井 美里

七月六日夜聞き慣れない音が私の家に鳴り響いた。緊急エリアメールの音だ。岡山県にも史上初めて大雨特別警報が出された、後に「平成三十年七月豪雨」と呼ばれることになる大災害が私の住む岡山県を含む二十府県を襲った。岡山でも特に被害の大きかった真備町を中心とする現地のニュースを見た時は、あまりの悲惨さに声が出なかった。

あの日から一か月以上経った今も、自宅に住めない人。公共交通機関の停止や農作物の被害など…その爪痕は根強く残っている。そんな中で被災地では着々と復興が進んでいる。それを支えているのは国家予算。つまり国民から集められた税金だ。自衛隊の派遣にかかる人件費。浸水被害などの影響で壊れた道路や橋の復旧、災害ゴミの処理、公共施設の修繕費用や支援物資の購入など思い浮かぶだけでもこれだけお金がかかる事がある。そして復興だけでなく教育や警察、消防、医療費などこれら全てに税金が使われている。そしてこれらのサービスなしでは生活に大変苦勞するだろう。したがって税は復興にも生活にも必要不可欠であることがわかる。そうした中で、地方議員が政務活動費を私的に利用したことが問題視されるニュースを耳にすることがある。政務活動費とは政策等の事柄を調査研究するための給料とは別に支払われるお金で、もちろん財源は私たちの税金だ。税金を無駄使いする人がいる。それは国民にとって納得がいけない話かもしれない。だが、人には少しでも自分のお金にしたいという欲望が誰にでもあるだろう。では考え方を変えてみてはどうだろう。自分はきちんと税を納める。そうすれば、それは少しずつでも復興のためのお金にあてられるかもしれない。すると、家に住めない人には仮設住宅の建設をその他ライフラインの復旧など復興のための工事ができる。そして被災された多くの人たちが、また普通の日常生活に戻ることができる。笑顔になれる。それが私たちにできる最高のプレゼントなのではないだろうか。同情でも慰めでもない。ただ義務を果たしたただけだが「普通の生活」というものがどれだけありがたいものか、それはある日突然「普通」を奪われた人にしか分からない。

平成二十七年九月関東・東北豪雨の際も堤防が決壊するなど今回と似たような被害が多く出たが、たくさんの方が復興に協力し、今では活気を取り戻している。今回も全国各地からボランティアや募金が集まった。日本で起きている事を捉える事も大切だが、行動に起こす事は更に重要である。ボランティアでは全国各地、芸能人の方も続々と集まり、同じ日本人同士共に助け合っているニュースが度々目にされた。こうした復興に対する思いを発信することも支援の一つになるだろう。誰だって願っているはずだ。被災地が一刻も早くもとに戻るようにと。それならするべき事は自らが果たすべき国民の義務、納税である。

## 税金で守られるたくさんの笑顔

廿日市市立四季が丘中学校3年 尾崎 爽夏

「素敵なお夢ね。諦めずに努力すればきっと叶うわ。」と満面の笑みで答えてくれた介護施設の利用者さん。この言葉と笑顔は今でも忘れられない。

先日、中学校で税についての授業を受けた。その中で「社会保障」という言葉が出てきた。これは、私たちが安心して生活していくために必要な公的サービスのことである。現在日本では少子高齢化が進み、それに伴って社会保障費に関する支出が増えている。また、少子化は、納税の義務を持つ人口を減らしている。二〇〇〇年では一人の高齢者を約四人で支えていたのに対し、二〇五〇年には一人で一人を支えることになる。私はこの資料を見て将来が不安になった。自分のためでなく、高齢者のために生きることになるのではないか。納税に苦しみながら暗い毎日を過ごすのではないか。そんなことを考えていると、ふと一年前の記憶が頭をよぎった。最近できた介護施設へ五日間、職場体験をした時のことだ。介護士の方は常に動き、休憩なく手足を動かしていた。一人で何人もの利用者さんを介護し、掃除、洗濯、食事の準備などを少人数で分担して行っていた。これを見て私は今まで実感が湧かなかった「働き手と高齢者の比率」を間近で感じ、この深刻な状況を痛感した。一方、利用している家族の方が「凄く助かっている」とスタッフの方に頭を下げ感謝している姿を見た。税のおかげで命は救われ、長生きできる高齢者の方が増えている。

実際、納税に喜びを感じている人はいるのだろうか。テレビでは時折「滞納者」が取り上げられる。「税金なんていらない」「これ以上増税するなんてとんでもない」という人も多い。こうした批判的な意見は税金のことを知らず、納税による恩恵を知らないことが原因である。今は苦しくてもいずれは私たちも今以上に社会保障に支えられる。お金を気にせず救急車や消防車を呼べる、舗装された安全な道を通って通勤・通学ができる、ごみのない美しい町で暮らせる…。これらは当たり前のように当たり前でない。納税している私たちが、今日、明日、明後日…とこれからの幸せをつくっているのだ。「自分のお金を取られる」という見方をしていないか。あるいは「まだ納税の義務を待つ年齢じゃない」と税について他人意識を持っていないか。税は難しいが、身の周りにたくさん使われている。年齢関係なく人々は税に助けられている。もう一度税について考え直していただきたい。

私は将来、福祉関係の仕事に就きたい。社会保障制度で生活保護や医療、福祉サービスを受けながら懸命に生きる高齢者の方々の手助けをしたい。今回、税の作文を書くに当たって納税の苦しさを知った一方、大切さも知った。私が納税する頃はきっと今よりも負担が大きいだろう。しかし、それをマイナスに捉えるのではなく、未来を想い、税に感謝できる納税者になりたい。

この夏、ぼくはベッドの上で考えた

西条市立東予東中学校 3年 谷川 翔

6月のある日、ぼくは病院のベッドの上にあった。突然の入院で今までの生活とは180度違った生活をするようになった。

「ぼくはこれからどうなるんだろう…。」

それまでのぼくは、ごく普通の野球少年。そして、ごく普通の中学3年生だった。学校の健康診断でひっかかり、2次検査の結果、入院することになった。この1か月で1学期が終わってしまい、夏休みになっていた。ぼくは高校入試を控える受験生でもあり、学校へ行けないことへの寂しさや将来についての不安がかくしきれなかった。みんながどんどん先に遠くに行ってしまう気がした。一人だけ時間がとまって取り残されたようだった。

ぼくの病気の検査や手術、今まで経験したことのないことばかり一気に押し寄せて少しとまどった。ただ、みんなが一生懸命にぼくの病気を治そうといういろいろな方法を考え、親身になってくれていることが有難かった。

入院生活の中で、始めは自分に起きた不幸な病気のことしか考えていなかった。しかし西日本豪雨災害が起こり、被害にあった人たちががんばっている姿や、ボランティアの人たちが活躍している姿をテレビで見て、ぼくも気持ちを切り替えようと思った。被害の復興にはすごく費用が掛かることを知った。そんなとき、自分の入院費や手術代は大丈夫なのかと思うようになった。子ども医療制度のおかげで、中学三年生までは、入院費用の心配はいらないことを知った。ぼくは大勢の人が納めてくれた税金のおかげで治療が受けられていたのだ。自分のことしか考えられなかった自分が情けなく、恥ずかしいと思った。

「助け合いの輪の中にぼくはいるんだ。」

そう考えると、大勢の人に助けてもらっていることに感謝の気持ちしかわいてこない。ぼくに恩返しすることができるのだろうか。今はいろいろな生活が制限されていてできることが少ないが、元気になったら誰かの役に立ちたいと考えるようになった。

「税金は未来への懸け橋なのだ」

自分が働いて税金を納めるようになるのはまだ先のことだが、使い道を考え、無駄をなくす努力をすることはすぐできる。今まで税金は自分には関係のない遠い存在だと思っていた。でも、つながった。ぼくは助けられている。義務教育を受けている間は教科書も無料でもらえるし、いろいろな行政サービスを受けられている。学校に行けるようになったら、自分たちが当たり前だと思っていたことが誰かのおかげで成り立っているんだということをみんなと一緒に考え、話し合ってみたい。

社会に貢献するというのは、今のぼくには大きいミッションだが、いつか誰かの役に立てる人間になりたい。そのためにも今は世の中の仕組みやルールについてもっと勉強して、いろいろなことにチャレンジしたい。

## 旅をする税金

福岡市立香椎第1中学校3年 稲富 友菜

今、世の中にはどのくらい進んで納税をしたい、と思っている人がいるのでしょうか。

皆さんは、平成31年10月から軽減税率制度が実施されるにあたって、「また、消費税が増えるのか。」だとか、「計算が大変になりそう。」などと思っはいませんか。私もそういう考えが、頭をよぎることがあります。しかし、そういったとき、私は税金に対する感謝の気持ちを思い出しています。

私の祖母は、祖父が早くに他界してしまったため、山奥の古い一軒家に、一人暮らしをしていました。お盆や正月などに、祖母の元を訪れると、すごく喜んで出迎えてくれる、とても優しい祖母です。そんな祖母が、私が小学校低学年ぐらいのときに、パーキンソン病と診断されました。それでも祖母は、「大丈夫。」と言って、そのまま一人で暮らしていました。しかし、ある日、祖母は家で段差に躓いてしまい、尾てい骨の辺りを骨折してしまいました。なので、「一人で生活することは、危険だ。」という話しになり、介護施設を利用することになりました。施設を、長期間利用するとなると、施設費や食費など、たくさんのお金が必要になってしまいます。私は、人が生きていくためには、こんなにもお金が必要なのかと、心配になりました。しかし、介護保険制度のおかげで、負担が大分軽くなり、大変助かっています。あとから調べてみると、それは半分は保険料、もう半分は税金によっておぎなわれていると知り、このようなところにも税金が使われていたのかと思い、驚きました。皆が一生懸命働き納めてくれた税金によって、祖母は元気に今も過ごしています。「お金がないから。」という理由で、治療や介護などが受けられない人があっても、良いのでしょうか。そのような人を減らすためにも、税金は必要なものだなと思いました。それまでも、授業などで税金について学んでいましたが、そのとき改めて、税金の大切さを実感し、このような制度がある国で良かった、と感謝しました。

「税金をとられた。」というような言い方をよく耳にします。しかし、私にはそれが政治に無頓着な証しのような気がします。とられたと思うのではなく、自分の納めた税金はどのように使われるのか、関心を持って調べてみたほうが、良いのではないのでしょうか。税金は、国民が安心して暮らしていくためにあるのだ、と私は思っています。だから、皆さん「私の納めた税金は誰の役に立つのだろうか。」と想像してみてください。そう考えると、税金に対する見方が変わってきませんか。私は、これから税金の仕組みについて、更に理解を深めていきたいです。そして、社会人になり、自分の働いて得たお金から、感謝して納税できるような大人になりたいです。

税金はとられるものではありません。なぜなら、いつかは巡り巡ってあなたのためになるのですから。

## 私が見つけた、税との接点

佐賀県立致遠館中学校 3年 梅崎 日和

「そういえば、足を見せに行くのは八月三日になったよ。」台所から母の声がする。私は生まれたとき、左足の小指と薬指がくっついた状態だった。すぐに生まれた病院で手術をして、指を離してもらった。それ以来は毎年一年に一回、福岡の大学病院で検診を受けることになっている。レントゲンを撮り、骨などに異常がないか、先生に確認していただいている。成長するにつれて手術の痕は目立たなくなっていく。それはよいのだが、小指の骨の出っ張りが大きくなってしまった。運動したり、長時間歩いたりすると靴とこすれて痛くなることもある。

この作文を書くにあたって私は正直に母に相談した。「今年も税の作文書くんだけどさ、まだ中学生だから、そんなに税金との関わりがないんだよね。」すると母から「いや、そんなことないでしょ。あなたの足の手術費や、毎年の通院費も、税金がなかったらもっと高かったはずだよ。」と言い返されてしまった。そして母は『育成医療給付申請書』という紙を引き出しから出した。調べてみると、これは障害を持っている十八歳未満で、手術や入院、通院により医療効果の期待できる児童が対象の制度だそう。育成医療に必要な費用が税金によって支給されるという。親の所得で自己負担額は異なるが、一般には医療費の一割でよい。つまり治療をする人の経済的負担は小さくなるということだ。ようやく私は母の言葉の意味が分かった。今まで税金というと「払わされている」という感覚しかなかった。消費税がなかったら、欲しいものももっと安くなるのに。でも今は違う。裏を返せば「使わせてもらっている」のだ。この制度を知り、初めて税金によって私の生活は支えられているのだという実感が湧いた。手術をした頃の記憶は一切ないが、あのときも誰かが汗を流しながら懸命に働いて納めてくれた税金の恩恵を授かっていたのだと思うと、「税金なんて私に関係ない。」などと言っただけではいけなかったと反省した。

私はこの制度を知り、税金に限らず、さまざまな社会問題に対する関心がより高まった。家での休憩時間もニュースを見よう、という気持ちになる。私はあと三年で選挙権を得る。今後社会をよりよくしていくための制度が考案されていくことだろう。その時にこの制度によってどのようなことが改善されるか、問題点は何かを自分の目で見極める力をこれから養っていきたい。私は成人するまで毎年検診に来るよう先生に言われている。成人して働き始めたら私が恩返しをしたい。働いて税金を払うのは大変かもしれないが、自分が払った税金は必ず誰かのために使われている。使われ方は、教育費だったり、医療費だったりさまざまだと思う。私も一生懸命に働いて、税金を通して社会貢献ができる大人に早く仲間入りをしたい。

## 将来の私たち

諫早市立喜々津中学校 3年 高比来 菜美

「税」と聞いて、みなさんはどんなイメージを持ちますか。「税」と言うと消費税増税のニュースなどで良いイメージを持つ人は少ないかもしれません。しかし、税は私たちの私生活や学校生活を支えてくれる大切な存在なのです。例えば、私たちが理科の授業で使っているビーカーなどの実験器具や、体育の授業で使っている跳び箱、教科書にも税金が使われています。他にもゴミの回収や処理、火災や災害の時の消防や警察の活動など、私たちの生活をより良いものにするために税金は使われています。

今から八年前。小学一年生の時に私は交通事故にあいました。その日は学校から帰ってきて公民館で遊んでいました。すると、友達の家に行きました。友達の家は少し坂を上ったところにあっただけで公民館に戻る時に走ると止まらなくなり道路に飛びだしてしまいました。すると、車が横から来てぶつかってしまいました。ぶつかった時の記憶はありませんが、気がつくと救急車や警察の方々が来ていました。応急処置をしてもらい、私は病院へ運ばれました。頭蓋骨にヒビが入っていたり、歯茎を縫ったりと怪我を負いましたが今私が、元気に過ごせているのは警察や消防の方々や周りの人たちの素早い対応、税金のおかげであると思います。

私は、この作文を書くにあたって交通事故のことを振り返ると、意外にもたくさん税金に助けられていることに気づきました。こうした交通事故や火災、災害の時は当たり前のように救急車や消防車などが来てくれたり医療費が負担されます。しかし、他の国ではこれが当たり前ではありません。そう考えると私たちはもっと税金に感謝しなければいけないと思います。

しかし、最近増えてきているのが「滞納者」です。私たちは税金によって安全で安心な暮らしができています。それなのに、なぜ滞納者が増えてきているのでしょうか。それは「税金が取られている」という考えの人たちがいるからだだと思います。税金は私たちの暮らしを支えてくれているのに「取られている」という考えはおかしいと思います。私たちが生まれてから税金にお世話にならない人など一人もいません。今、図書館があるのも、何不自由なく道路を歩き、学校に行けているのもすべて税金のおかげです。もっと、みんなが税金について理解し、なんのために必要なかを考えるだけでも滞納者は減ると思います。将来私たちも、税金を納めなければいけなくなります。きちんと税金について理解し、税金を納めることに責任をもてる大人になりたいです。

## あたり前を支える税金

熊本市立長嶺中学校 1年 濱田 櫻子

「ドーン！ガタガタ」

二〇一六年、四月。私の住む熊本に大きな地震が起こった。この日を境にあたり前があたり前でなくなった。翌朝から近所のゴミステーションには各家庭から出されたゴミの山が日々高くなっていった。水や電気も止まり、食料も不足していた。「これからどうなってしまふのだろう。」と不安になった。

しかし、不安で不自由な生活を過ごす中でも復興は着々と進んだ。ゴミ収集が始まるとあっという間にゴミステーションからゴミが消えた。三日目以降くらいからコンビニに食料が並びはじめた。物流が復活したのだ。

「お母さん！水が出たよ…。」ガスが使える、蛇口から水が出た時には、涙が出た。

私達があたり前だと思っていたことが、実はあたり前ではなく、そこには誰かの毎日の仕事がありその裏にある努力や税金で成り立っていることに気付かされた。例えば安心安全に暮らすため必要なライフラインの維持・管理、インフラの整備、命を守る消防、警察・医療・教育。

そう思って学校生活を見てみると、いかに税金が使われているのか驚かされる。校舎・机・教科書、嫌なテスト用紙、運動場の砂一粒でさえ、税金で賄われていることに気付く。目の前に立っている先生の給料も税金だ。

「お母さん、学校は税金の塊だね。」思わず声が出た。

「そうね。あなたがいい加減に生活したら、まさに税金のムダ使いだね。でも、将来、きちんと納税してくれる大人になってくれたらそれは夢と希望が詰まった宝箱になるよ。そうなれば税金を納めた甲斐があるよね。」とうれしそうに話した。

現在の日本では、所得が高くなると納税額が多くなる累進課税方式で税額が決定されている。資本主義の世界では、自分が頑張った分だけ所得が増える。せっかく自分が働いて得たお金だ。「税金は一円でも少なくしたい。」と思う気持ちは、当然わいてくるにちがいない。しかし、いつ自分が災害や病気、事故などで社会的弱者になるかわからない。立場が変われば考え方も変化する。自分の納めた税金が誰かの役に立っている。みんなが納めた税金のおかげで今の私達の暮らしがある。考えただけで、勇気がわいてくる。

だから将来大人になった時、身の丈にあった税金を納めることができるよう、まず健康でいたい。さらに健康でいることは税の節約にもなる。そして自分の納めた税が何にどう使われているのか確かめつつ、政治にも参加していかなければならない。今、安心して生活できる環境に感謝しながら、世の中に貢献できる大人になれるような勉強をしていきたい。

## 税金でつながる、社会の輪

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 3年 木下 花梨

私の祖父が亡くなって今年で十年が経つ。私の祖父は、がんや脳梗塞を患い、たくさんの手術を受けた。多くの薬を服用し、抗がん剤治療も受けた。しかし、祖父の病気は悪化するばかりで、六十九年で一生を終えた。その時私は、五才の子供だったが、とても悲しかったのを覚えている。十年が経った今、祖父の治療を手助けしてくれていたものの一つに「税金」があることを学んだ。祖父の手術も入院も、税金でまかなっていなかったら、到底払えるような額ではなかっただろう。私は幼い頃、税金なんてなければ良いのにと思っていた。しかし、今では、税金に感謝している。国民全員が納めている税金。その税金が祖父の病気の治療を助けてくれたと思うと、不思議な気持ちになる。

ところで、来年、消費税が八パーセントから十パーセントに引き上げられる。ほんの二パーセントだが、消費者の私たちにとって、この二パーセントは大きいと思う。消費税は中学生の私たちが納める唯一の税金だ。私が納める税金が、病気で苦しんでいる人々の手助けになるかもしれない。もしくは、私の家族、又は私自身がけがや病気になった時の手助けになるかもしれない。ここに、税金でつながる社会の「輪」があるように思う。今、身の回りを見渡して目に入るもの、例えば、信号、学校、教科書、それに医療費まで税金でまかなっている。私の生活は、他人が納めた税金で成り立っているのであり、また、私が納めた税金もだれかの生活を成り立たせるのに役立っている。自分の納めた税金が人の役に立つならば、喜んで納めたくなる。私たちが当たり前のように学校に通えるのも、その根底は税金で支えられていることを学んだ。

しかし、それでもやはり、税金を多く納めないといけないことに不満を持っている人もいる。税金を納めているということは、同時に人助けをしていることにもなるのではないかと私は思う。税を納めたと思うのではなく自分は今、人助けをしたと思うのはどうだろう。税を納めることに、少し誇らしい気持ちがある。

私の祖父は税金のおかげで、治療費を気にせず、治療を進めることができた。他人が納めた税金のおかげで、私の生活は成り立っている。今度は私が恩返しをする番だ。だれかのために、税金を納めていこうと思う。

税金でつながる、社会の輪。いつまでも途切れないでほしい。



## 税金の大切さ

南城市立玉城中学校 3年 大城 望愛

「大丈夫。」と母や兄の声が聞こえ、だんだんと意識がはっきりしてきたとき、自分がまた倒れたのだと気づきました。救急車の音が近づいてきて病院まで運ばれると、レントゲンや点滴などをやり、様子を見るため半日ほど入院するという流れが何回かありました。けれど、これは「税金」というものがないとできなかつたことかもしれません。

私は、小さい頃から病気が多く先天性のものもあり、手術や入院をくり返していました。私の住む南城市には、子ども医療費助成制度という医療費の一部を助成してくれる制度があります。また、限られた場合のみですが、歯の矯正治療で健康保険が適応されており、本当ならば何万もするものが少しでも安く治療できるようになっています。このようなことがあるから、お金を気にせずに治療に専念することができると思うと、病気と向き合い治していかないといけないと思います。

もし、税金がなかったらどうなるのでしょうか。例えば、誰かが倒れたりしても救急車が呼べない。道に穴があいたりしたとしても誰も直さない。そのせいで事故が起こってしまうかもしれません。病気で治療がしたくても高くてすることができない。でも、このようなことが起こらないのは税金があるからできることなのです。他にも、日本は義務教育というもので小学一年生から中学三年生までの教科書などが税金でまかなわれています。このように、税金で私たちは健康で文化的な生活をおくることができているのです。税金なくてもいいという人をたまに見かけますがそれは絶対にいけないことです。税金があるということで、どれだけの人が助けられるのか、命を救っているのか。税金を納めることにメリットを感じない人もいるかもしれません。でも、周りを見て分かります。警察や消防があるから私たちは安全に過ごすことができます。身近すぎて気付かなかただけかもしれません。こうやって過ごせるのも税金というものがあるからです。

税金があるだけでも、私たちはこのように安全にいらしていくことができる。そのことを忘れず、私が大人になったら税金をしっかりと納めたいと思います。

## A B C Dの法則

幕別町立札内中学校3年 本間 奏羽

二年前、私は中学校に入学した。当時の校長先生に「A B C Dの法則」を大事にすることを教わった。(A)当たり前のことを、(B)バカにしないで、(C)ちゃんとやる人が、(D)できる人。という法則である。以来、私はこの言葉を大切に、日頃の生活に生かしてきた。

そんな中、二年前の平成二十八年八月、北海道に三つの台風が上陸し、中でも十勝地方では多くの河川が氾濫するなど、豪雨災害による甚大な被害をもたらした。私が幼い頃住んでいた、清水町では川の氾濫により、私の友達の家が流されたり、橋が流され、道路が寸断されたりした。今住む幕別町でも河川敷のスポーツ施設に被害が及んだ。二年の歳月をかけ、今ようやく復興の兆しがみえてきた。

当時、住民の生活を守ったのが消防や警察そして自衛隊である。復興までの道のりは長かったが、住民を支えたのが道路や住宅の整備のために、健康や生活を守るために必要な税金であった。もちろん、ボランティアなどの人道支援があったことは言うまでもない。当たり前のように支払っていた消費税。この災害をきっかけに税の使われ方について深く学ぶようになった。

久しぶりに清水町を訪れた。清水町では、災害が起きる前のにぎわいを取り戻し、人々は笑顔で過ごしている。流された橋も本開通し、生活も元通りになってきている。これらは税金によるたくさんの支援があったからこそ成し得たことだと思う。私は、被害を受けた多くの友達のことを知っている。ボランティアとして友達を支援したかったがどうしてもいくことができなかった。そのため義援金などの募金をあらゆるところでしたが、微々たるものだ。その友達からはたくさんの社会的サービスが受けられ感謝していると聞いた。その友達の言葉は今考えてみると税金による恩恵であることに気が付いた。

消費税という税金を払っている私。当たり前のように払っている。税金の恩恵を知ることにより、税を納めることで社会に貢献できる人になれることがわかった。

私はこれから義務教育である中学校を卒業し、より一歩社会人に近づく。これから社会の一員として当たり前のことをバカにしないでちゃんとできる人になりたい。そして、社会において役立てるような力を身に付け、社会に貢献していきたい。その当たり前が税金であり、税金により、よりよい社会が構築できる。

警察や消防、学校や病院など私たちの身近にある施設が税によって支えられている。税なくしては安全・安心な生活はないだろう。私たちを支える税、恩恵が得られる税、社会に役立つ税。これからもすてきな日本をつくるために、税の制度を守り続け、社会全体で支え合いたい。これから「A B C D法則」と税を結びつけ、社会に貢献できる人として活躍したい。

## 税金は世代をつなぐ

秋田市立秋田東中学校3年 渡部 琴穂

私は中学三年生。九年間の義務教育もあと半年で修了する。毎年四月に新品の教科書を配付されるのが当たり前だと思っていたが、高校生の兄を見ていると、来年度から使う教科書は自分で買いに行くことになりそうだ。毎日給食を食べられるのもあと半年。給食が、一人一食分三百円程度で作られていると聞いて驚いた。コンビニエンスストアの弁当よりはるかに低い金額で、栄養バランスのとれた給食が作られている。その秘密が税金にあるとは知らなかった。調べてみると、公立学校の児童・生徒一人当たり年間教育負担額は、小学生が約八十九万円、中学生が約百一万円だと分かった。つまり、義務教育の九年間、私一人のために使われた金額は八百万円以上になるということだ。

また、私は小学校二年生からバスケットボールを続けてきた。大きな大会にも出場し、充実した日々を過ごすことができた。しかし、七年間のバスケットボール生活では、二度の骨折、足首の捻挫などのけがも多かった。その度に整形外科や接骨院で治療してもらったが、その治療費の一部にも税金が使われていることも分かった。

しかし、私は、義務教育九年間の学校生活を支えてくれた先生方や両親、その他たくさんの方々に感謝することはあったが、「税金」に感謝したことは一度もない。それどころか、少ないお小遣いから払う消費税に不満をもっている私は、テレビで「二〇一九年から消費税十%」「税金不正使用」「税金の無駄遣い」などという言葉を見て、税金は「取られるもの」そして、「正しく使われていないもの」という悪いイメージを強く持っていた。もちろん、そのイメージを完全に消すことはできないが、私のこれまでの学校生活、そして何不自由なく過ごすことができる日常生活が税金にも支えられていることに、もっと目を向けていこうと思う。

私は、あと数年で本格的に税金を負担する立場になる。社会科の授業で納税は国民の三大義務の一つだと学んだ。義務なのだから、もちろん国民の一人としてしっかりと税金を納めようと思う。さらに、次の世代の子どもたちもが健やかに成長することができるように手助けをするつもりで税金を納める大人になりたい。税金を納めている人へのこれまでの感謝の気持ちを伝える機会はまだあまりない。でも、自分がきちんと納税することが、感謝の気持ちを表す方法の一つなのではないかと思う。

そう考えると、税金を納めることは、前の世代から次の世代に「目に見えないプレゼント」を渡しているようなものだともいえる。世代をつなぐ大切な役割を果たしているともいえる。「世代をつなぐ素晴らしいプレゼント」を自分が渡す立場になった時、しっかりと渡すことができるように、責任ある大人になろうと思う。

「体が続く限り米は作り続けたいといけないんだよ。」と、祖母は口癖の様に言う。三反近い田は生産緑地に指定されていて、何かしらの農作物を作る事が義務づけられている。

先祖代々、母の実家は農業で生計を立てていて米作りを中心にみかんや梅、栗等も作っている。もちろん週末には父母や部活がなければ私も小田原まで手伝いに行く。なぜこんな大変な思いをしてまで農業を続ける必要があるのかと、ずっと疑問に思っていた。米作りは日々の天気や朝夕の水調節を気に掛けなければならず、体を休める暇がない。肥料や除草剤も必要だし、コンバインやトラクターは何百万円もする。米作りによる収入より、その他の経費のほうが高くなり完全に赤字だ。

祖母の田は生産緑地の指定により、一反当たりの税額は千円にも満たない。通常それ以外の農地には同じ面積で約六万円、都心部では更にその三倍で十八万円もの税金がかかる。緑地を守り、良好な土地環境を維持する目的で農業を行うかわりに税金が安くなる、と言う税の仕組みは理解できた。しかし、日々懸命に働く祖母を見ていると、私はとてもやるせない気持ちになる。お金よりも体の方が大事だし、無理をして体を壊してしまっても何もない。米作りをやめれば多額の税金を支払う事になるのは分かっているが、病気になってまで土地を守る必要があるのだろうか。最終的に土地を手放す事になってみてもそれは仕方ないと思う。

父は私に言う「おばあちゃんがこんなにまでして米作りを続けるのは税金の為だけじゃないんだよ」と。今まで先祖が続けてきた農業を自分の代で途絶えさせる訳にはいかない、という気持ちが大きいらしい。祖母自身の意地もあるが、先祖への感謝の気持ちもあると思う。身を粉にして働く祖母、今日もまた田へ農回りに行くのだろう。毎日美味しいお米を食べられる事に感謝しながらも、農作業をする祖母の体を心配せずにはいられない。少しでも心と体の負担を軽くしてあげるにはどうしたら良いか、考えるととても切なくなってしまう。祖母の農業を継ぐ者は今の所誰もいない。伯父も父もまだ会社員として働いている為に週末しか農業が出来ない。生産緑地として、いくら税金が安くなったとしても農業から得られる収入が少ないと、家族を養う事さえ出来ないのが現状だ。

生産緑地法による土地の指定は、二〇二二年に丸三十年をむかえ、一度解除される。その後、土地はどのような税制度になっていくのだろうか。祖母の体や気持ちを考えると、少しでも農業に携わる人々に優しい、農業を続けやすい、農業で生計が成り立つ税制度が改正されれば良いと思う。税金が安い、高いと言う金額の問題も、もちろん重要だとは思いますが、公平で有意義な税制度が確立されて、皆が豊かで安心して暮らせる様に、私も今出来る事は何か、考えていきたい。

## 祖父の病気をきっかけに

大田区立大森第六中学校3年 後藤 健介

祖父の病気は税金の大切さを知るきっかけになった。今年八五歳の祖父は二年前に認知症と診断された。僕が小学生の頃はよく野球の応援に来てくれていた。八十歳になった頃から少し元気が無いとは思っていたが、認知症だと聞いた時は、とても驚いた。認知症や介護という言葉が身近なものではなかったからだ。しかしこの二年間で祖父の体調は悪くなり歩く事もできなくなった。祖父は五年前に祖母を亡くしたが、誰にも迷惑をかけたくないと宣言して以来、一人で住んでいたが今は近くに住んでいる伯母と介護ヘルパーの方が面倒を見てくれないと生活はできない。今年の春休みに祖父の家に行った際に、ヘルパーさんの介助に安心している祖父の表情を見て母も安堵の表情を浮かべていた。伯母と母の会話を聞いていると、介護の専門家であるヘルパーの方への感謝とその賃金に公的補助があるという仕組みに感謝をしている事がよく分かった。それまでは学校や警察、消防など目に見える公共機関が税金で成り立っていると漠然と思っていたので、その時初めて税金の大切さを肌で感じる事ができた。

父が生まれた頃は、一人の高齢者を約十人の現役世代で支えていたようだが、今は約三人で高齢者を支えているそうだ。このままだと二〇六〇年には一人が一人を支える事になると習った。良い機会だったので父の将来の老後について聞いてみると「皆に迷惑をかけない事が一番だ」と言っていた。祖父と父は世代が違うのに同じ事を言う。近い将来に高齢者になる人達も、家族や周りの人達に精神的、肉体的、経済的負担をかけない事を一番望んでいるという事を知った。ではどうすれば将来不安が少ないと感じられる社会に近づくのだろうか。それは仕事を辞めた時、病気になった時の経済的支援だ。その大きな役割の一つが税金だろう。しかし僕は今まで税金についてあまり深く考えた事がなかった。祖父が税金の補助で生活をしていた事も知らなかったし、将来自分が支える側、支えられる側になるという意識も全く持っていなかったからだ。消費税についても、提示されている値段よりもちょっと多く払わないといけないという少し損したイメージしかなく、自分から税金の使い道を調べようとは思っていなかった。来年には消費税が十パーセントに増税される予定だと聞いている。しかし以前と比べて消費税を払う時の気持ちは少し違う。どこかで祖父のような高齢者の役に立っているという気持ちがあるからだ。

あと三年で選挙権を持つ僕達はずっと税金の大切さ、しくみを勉強してから投票をしなくてはならないと思う。なぜなら、僕達は近い将来「支える人」になるからだ。将来の税のしくみがどうなっているのかはまだ誰にも分からない。しかしまずは税金の大切さを勉強する事が僕達の第一歩だ。

## 税金に感謝

大野市立陽明中学校3年 松田 陽和

私は、この中学校生活最後の夏休みで、吹奏楽部を引退した。部活動では、礼儀や仲間の大切さを学ぶことができ、私自身、入部したての頃より、楽器を吹く技術がレベルアップし、なにより、人として成長できたと思う。

こんなに自分が成長できたのは、指導してくださった先生はもちろん、自分の力で音を表現することができる楽器のおかげだと思う。

吹奏楽部には、私達では買うことができないようなとても高価なものがそろっている。入部したての頃は、「楽器は高価なものだから」という理由だけで「楽器を大切に扱え」と言われているのかと思っていた。しばらくたった頃、私は、「楽器は税金で買われている」ということを知った。楽器だけでなく、私たちが何気なく通っている学校、教室の机やイス、教科書も税金である。それを知り、私はもっと税金をはらっている人たちに感謝しなければいけないと思った。

楽器は、ただ高価だからというだけで大切に扱うのではなく、税金をはらっている人たちへの感謝の気持ちを持って大切に扱おうと思った。学校にある、机やイスも、ふだんは税金で買われたものだとは分かっていながらも、「学校のものやしいや」という考えで、らんぼうに扱ってしまったり、らく書きをしてしまうことが今までの学校生活の中でたくさんしてしまったし、見てきた。このような行動を平気でするのは、「この机やイスが何のお金で買われているか」を十分に理解していないからだと思う。

私たちは、まだまだ税金について知らないことが多い。ふだんから、税金を使って買っていたものでたくさん利用しているのに知らないのは、よくないと思った。なので、このように作文を書く機会があり、税金について、前より税金について知ることができたと思う。

税金がなければ、楽器もないし、学校に机やイスもないし、学生に一番必要である教科書もない。そう考えると、何気なく買い物をしたときに払っている税金がこんなにも私たちのために使われているのだということが分かる。

私の青春は、税金がなければこんなにも充実していなかっただろう。このことは、一生忘れてはいけない。吹奏楽部は、とくにそうだ。楽器を使わせていただいて、大好きな仲間に出会えて、その大好きな仲間と一緒に演奏できた。これから生きていくうえで、絶対に忘れることのない最高の思い出ができたと思う。

すべて税金がなかったらできていなかったこと。税金を払っている人たちには、本当に感謝してもしきれない。

## 税の役割と私の務め

名古屋市立北陵中学校3年 松井 愛奈

「中学生の君達でも払っている税はどんな税だと思いますか？」税についてほとんど知識のない私にとって、先生からの質問は税について考える良いきっかけになりました。

税は、消費者が直接支払う直接税と、製造者や販売者が代わりに支払う間接税とがあります。先生の質問の答えは、間接税に分類される消費税で、誰もが消費する時に課される税です。

では、私達が納めた税金はどのように使われているのか？ 昨年、私は名古屋市と「絆協定」を結んだ岩手県陸前高田市に、交流団の一員として訪問しました。交流活動では仮設住宅でボランティア活動を行い、東日本大震災の被災地だから分かる防災について学習し、現地の中学生と意見交換会を行いました。その中で私は、「これでも七年間でだいぶ復興したんだよ。」という言葉を目にしました。名古屋に住んでいる私から見ると、まだまだ復興の途中に思いましたが、少しずつ生活も落ち着いて良かったなと思います。

では、沢山の貴重な経験をさせて頂くことができたこの交流団が陸前高田市に行く交通費等はどこから出たお金だと思いますか？ 答えは税金です。さらに、がれきの撤去や仮設住宅の建設の費用も税金で賄われています。震災によって受けた大きな心の傷は塞ぐことはできませんが、私達が普段からさりげなく納めている税金がいつの間にか困っている人の為に役立っているということ。自分達の為に役立っているということ。これはとてもすばらしい事だと思います。

これまで、私の納税に対する印象は決して良いものではありませんでした。それは私だけではないと思います。だからといって、国民全員が納税しなかったらどうなるのでしょうか。普段、税に守られている私達には想像しにくいですが、当然国の税収が無くなり、警察・救急車・道路の整備や、医療・年金・教育等が無くなるでしょう。また、最近、自然災害によるニュースを耳にします。想像してみてください。自分の地域で未曾有の地震が起きたらどうしますか？津波によって何もかも流されたらどうしますか？ その後家族とどこで暮らしますか？ がれきの撤去等の費用を全て自分で出せますか？ 多くの方が答えに詰まると思います。これらは、いつ自分自身に起こるか分かりません。税金は、なくてはならないとても大切なものです。このことに気が付いたら、税金を気持ちよく納めることができるのではないのでしょうか。

中学生の私には、まだ消費税しか納められませんが、大人の人達が納めてくれた税金で学校に行き、勉強させてもらっています。そのことに感謝し、税金を無駄にしないためにも、今はしっかり勉強して、将来、私が社会を担う立場になった時に、少しでも恩返しできるよう、社会貢献できる大人になりたいです。

未来のこどもたちへ

三田市立けやき台中学校3年 岩下 真大

僕の町には、僕の大好きなホールがあります。郷の音ホールです。とてもよく響き、タッチに反応して音が多彩に変化する、音色のレンジが広いフルコンサートグランドピアノがあります。僕はピアノを習い始めて八年になりますが、毎年このホールでピアノを弾くことをとても楽しみにしています。他にも、フルートの体験講座に参加したり、映画を観たこともあります。中学二年生のトライやるウィークでは「少しでもお手伝いしたい。」という気持ちで、職業体験先を選びました。その時、郷の音ホールが三田市総合文化センター、つまり公共の施設であることを知りました。税で建設され、運営されているということです。

文化・芸術に対する財政の有り方は、これまで多くの物議を醸してきました。

「文化は行政が育てるものではない。」

「行政や財界はインテリぶってオーケストラとか言いますが、大阪はお笑いの方が強く根付いている。」

「文楽を見たが、二度目は行かない。時代に応じてテイストを変えないと、ついてこない。」

かつて大阪府知事であった橋下氏は、財政悪化のため、数々の文化・芸術事業の補助金を撤廃もしくは大幅に削減しました。

僕にも、文化・芸術より生命、生活に直結する問題が優先されることは、理解出来ます。しかし、儲からないから、時代のニーズに合わないから——と排除されてしまうことには、憤りを感じます。文化・芸術は、たとえ目先の利益があがらなくても、現在そして未来に生きる私達の人間としての尊厳、心の豊かさにつながるもの——守り、後世に残していくためには、行政の担う役割が大きいと思うからです。

当時の大阪府政の決断が正しかったかどうか、僕にはまだ分かりません。ただ一つ分かることは、文化・芸術を支えるには、財政が健全で豊かでなければならないということ、その源は税であるということです。

最寄駅から電車に乗って数分もすれば車窓に映るような身近な場所——郷の音ホールで、幼い頃から文化、芸術に慣れ親しんできたことに、感謝しています。その経験の積み重ねが、僕を支えるアイデンティティーになっているからです。これから先も、子供達に伝えていきたい、そのような機会を奪わないでほしいと願っています。

僕は今、恩恵を受けるばかりの立場ですが、将来恩返しが出来るように、文化・芸術における財政について学び、その源となる税について——納めること、使うこと、その方法や用途についても理解し、実践していきたいと思います。僕の暮らす街兵庫県三田市が、これからも豊かな街であり続けてほしいです。



## 「当たり前の基準」の置き方

岡山大学教育学部附属中学校3年 川崎 あすか

私が学校で使っている教科書の裏表紙に、こんな文章が書かれています。「この教科書は、これからの日本の未来を担う皆さんへの期待をこめ、無償で支給されています。大切に使いましょう。」税金が使われている、ということです。よく目にするこの言葉、私はいつも、「日本中の中学生全員の教科書が支給されているなんて、すごい。」や、「無料ってラッキーだな。」などの軽い気持ちを持つだけでした。この言葉について、二つの「当たり前の基準」をもとに考えてみます。

まず、基準を発展途上国に置いて考えます。現在、世界には私たちと同じように教育を受けられていない子どもが多くいます。教育を受けられないだけでなく、厳しい労働に従事させられたり、なかには売却されたりする子どももいます。これが、発展途上国の「当たり前の基準」です。そう考えてみると、日本は本当に恵まれています。公立の中学校に通う中学生一人当たりの教育に使われる税金は年間で約百万円です。ちょうど今、家のために働いて学校に行っていない私たちと同じ年の子どもの気持ちを思うと、税金に対する感謝の気持ちは大きくなるばかりです。

次に、基準を先進国に置いて考えます。日本の教育への公的支出のGDP比は約三・五パーセントで、経済協力開発機構の加盟三十四か国のうち、最下位です。インターネットで検索すると、日本が最下位であるということに対する批判の声も多く見つかります。

このように、二つの「当たり前の基準」から見ると、日本の教育への公的支出、税の使われ方には、様々な意見が持ち込まれます。みなさんは、どんな意見を持つでしょうか。私は、もっと、税金に感謝すべきだと思います。確かに、先進国と比べると、日本の教育費の負担額は少ないかもしれませんが、しかし、税金の支出によっていっそう充実した生活を送れている家族はどのくらいあるでしょうか。きっと税金がなければ、日本でも十分な教育を受けられず、労働などからされる子どもも多く出てくるかもしれません。来年の十月から消費税率が八パーセントから十パーセントに引き上げられます。不満を持っている人もいるかもしれません。しかし、それを批判しながら、教育への支出に対しても批判する、などというのは、私は違うと思います。無責任だと思います。「当たり前の基準」の置き方をしっかりと考え、世界や時代の変化における税金を素直に受け入れ、心から感謝できる人でありたいと思います。

## 税に感謝

徳島文理中学校 2年 疋田 光志朗

祖父が去年八月に入院をした。三月に一度退院したが、二度目の入院になる。入院が長引くにつれ歩行が困難になり、病院内も車イスで移動、トイレもベッドの近くにポータブルトイレを置くようになった。

十月になり母は、「じいちゃんが退院しても安心して家で生活できるように、介護保険の申請をしてみるね」と言った。僕は、介護保険の申請をしたらどうなるのか母に尋ねると、「認定されると、介護のサービスが利用でき、福祉用具のレンタルや購入を補助してくれるよ」と教えてくれた。母が市役所から取り寄せてくれた介護保険のパンフレットを見てみると、「介護保険制度は、四十歳以上の方が納める介護保険料と税金で運営されています。」と記載されていた。

税金で一番多く使われているのは、社会保障費で、年金、医療、福祉、介護だ。日本では急速に少子高齢化が進んでおり、社会保障の給付と負担が増大している。納めている介護保険料では、介護事業を運営するには費用が足りないため、税金が使われている。もし介護事業に税金が使われなくなったら、介護や支援を必要としている人たちはどうなるのだろうか。そう思うと、税金のありがたさが本当に分かった。入院中の祖父は、医療保険制度のおかげで、充実した医療を少ない負担で受けることができた。退院後、介護が必要になっても国の制度を利用すれば、生活支援をしてくれる。これらはすべて税金の恩恵である。

残念ながら、祖父は介護認定の通知が届いた翌日に亡くなってしまった。しかし、今まで祖父の入院や治療費を助けてくれ、介護支援を必要としていた僕たち家族に、介護サービスを提供してくれた税金に感謝したい。

これからの日本では少子・高齢化や厳しい財政状況を踏まえ、豊かで安心して暮らせるための社会保障制度や持続可能な財政構造の構築が必要になる。そのためには、納税者である国民一人一人が正しく税金を納めることが必要不可欠である。僕たちは「税」によって、様々な恩恵を受けていることを忘れてはいけない。

そして豊かで安心して暮らせる未来のためには、公平な税負担と給付の関係について、僕たち一人ひとりが考えることが大切であると思う。

日本の将来を考えながら、社会に貢献するために税を納めることのできる責任と義務を果たす大人になっていきたいと思う。そして、税金が様々な面で僕たちの生活を支えてくれていることに、感謝しながら生きていきたい。

生前、祖父の言葉が僕の胸に刻まれている。

「こうしろ、お前が大人になるころには、少子高齢化が進み、みんなが納める税金がたくさんの人の命を救い、幸せをもたらすことになるんだよ。日本国民としての義務を責任を以てはたせる大人になるんだよ。」

先月のことでした。学校に移動図書館のような車が来ており、何だろうと思いい見に行ってみると、文化専門委員の生徒たちが学校の図書室に置く新しい本の入荷作業を行っているところでした。それまで僕はてっきり、学校の図書室の本は担当の委員の生徒と先生が何処かの書店にでも買いに行っているものと思っていました。そのため、まさか本のほうから学校にやってくるとは、と驚き、暫くその車を見学していました。そしてそのときにふと思いました。これらの本はいったい誰が買っているのだろう、と。

気になったのでその後調べてみると、どうやら学校の図書の購入費は税金で賄われているようでした。有り難いことです。

税金の有り難さはほかのところでも感じられます。僕は本が好きで、幼い頃からよく市立の図書館のお世話になっています。通常、本はお金を出して買わないと読めませんが、図書館では数多くの本を無料で借りることができます。これは図書館が税金で運営されているからに他なりません。今思えば、図書館がなければ、僕が今までに読むことのできた本の幅はぐっと狭まっていたことでしょう。むしろ図書館があったからこそ、今の本好きな僕が在るといえます。僕の成長を税金に支えてもらっているのです。

さらに、それだけではありません。実は、僕は生まれたときから心臓に疾患を抱えているため、体内にペースメーカーという機械を入れており、一歳二カ月のころと三年前、これまでに二回手術を受けています。また、半年程に一回は病院に行って、様々な検査をしてもらっています。それらの手術費や診療費なども、税金でその大半を賄ってもらっているのです。税金で賄ってもらわなければ、多大な額のお金がかかってしまいます。僕は人生そのものも税金に支えてもらっているわけです。

そしてそれは、きっと僕に限ったことではありません。日本国民なら誰にでもいえることです。小学六年生のときの租税教室で見たアニメの内容を思い出しました。そのアニメでは、税の制度がもし日本からなくなったら、日本はどうなってしまうのかが描かれていました。壊れた橋は直されず、ゴミを出しても収集されず、病院代が高くて病院に行けず…、などとまだまだたくさん問題が発生し、税の制度のない日本は混とんとしていました。

今の日本の社会、そして人々の生活、人生、子供たちの成長は税の制度のうえに成り立っていると感じます。皆が税金を払うことで、互いを支えあっています。

僕は今はまだ消費税くらいしか納めていませんが、将来僕が社会人になったときにも、きちんと税金を納めて、税という支えあいの輪に加わり、社会に貢献していきたいです。そうすれば、今度は僕が誰かの成長や人生を少しは支えることができるはずです。

当たり前

伊佐市立菱刈中学校3年 山口 結愛

「うわっ、もったいない。」

「また、新しいのがくるからいいんだよ。」

「そっか、そっか。」

休み時間にチョークを投げて遊んでいるクラスメイト。チョークはあつという間に粉々に砕けてしまった。こっちでは黒板消しに水を含ませて投げ合っている。黒板消しは布がはがれてボロボロになっている。

初めは「ダメだよ。」「やめなよ。」と声をかけていた生徒も、今では見て見ぬふりである。私も、どうせまた補充されるんだから大丈夫だと、それが当たり前だと思うようになっていた。でも、やはりそれは間違いだった。

先日、学校で開かれた租税教室で、税は私たちの暮らしに欠かせないものになっていることを学んだ。学校にある机も椅子も、電気も水道も、税金で新しく買い換えたり補修したりすることを聞かされた。

毎年、新しい教科書がもらえるのも当たり前、クーラーが効いた図書館があるのも当たり前、一一九番に通報したら、消防車や救急車が出動するのも当たり前だと思っていたけれど、もし、税がなかったら、こんな生活はできなくなるという。当たり前だと思っていたことができなくなるなんて、とても生活しづらくなると思った。

私の妹は赤ちゃんの時、突然、呼吸困難になって救急車で病院に運ばれた。命を取り留めたのは、救急車がすぐに駆けつけて病院に搬送してくれて、すばやく治療ができたからだ、と、家族全員が感謝している。

もし、税がなくて消防署が民間の会社だったら、救急車を呼ぶのにはお金がかかり、出動の手続にも時間がかかり、妹の命は助からなかったかもしれない。

百円のものを買うのに、百八円払わなくてはならない。ワンコインで済むところを、消費税なんて面倒くさい。税なんてなくなればいいのと思っていたが、租税教室で私の考え方は一八〇度変わった。何か事が起こるたびに「これは税が使われているのか。」と意識するようになった。

つい最近も「西日本豪雨」の報道に触れるたびに、復旧のために、あれにもこれにも税が使われているのだと思い知らされた。税のおかげで、被災者が徐々に今までと同じ生活を取り戻している。消えかけていた笑顔を取り戻している。税は人々の暮らしに役立っているのだと思うと、まだ、自分の力で税を納めてはいない身なので、感謝の気持ちでいっぱいになった。よりよい社会生活を当たり前にするためには、税の存在が欠かせないものであることを思い知らされた。

人口減少、高齢化社会と税はさまざまな難問を抱えているが、将来を担う私たちが、きちんと税を納めて、その有意義な使い道を考えて、当たりの今の生活を支えていきたいと強く決意した。

## 義務を果たせる人間に

与那原町立与那原中学校3年 大城 志歩

「一度はアメリカに留学したいな。」

と父に言うと、

「その時は救急車に簡単に乗るんじゃないぞ。アメリカには健康保険制度がないから有料なんだ。」

と念を押すように言われ、驚いたのと同時になぜアメリカでは救急車が有料なのか、健康保険制度は具体的にどのようなものなのかと疑問ができました。

私の弟は小さい頃、熱性けいれんでよく救急車を利用していました。しかし一度も料金を払った事はないです。少し調べてみるとアメリカとは異なり日本では救急車は私達が納めている税により運用されていること、医療費も保険でカバーされていることが分かりました。つまりアメリカは人々から集めた税金を救急車の運用、医療費の一部負担には利用できないという事です。実際に父は何度もアメリカを訪れており、日本人と現地の人の救急車を利用する際の考え方の違いに驚いたといえます。日本では普通、交通事故にあったり私の弟のように突然熱性けいれんをおこしたら救急車を呼んで病院に行きますが、アメリカ人は頭が割れそうに痛くて、意識がもうろうとしていても、その後来る請求書の事を考えて救急車を呼ばず、ひどい場合にも病院に行かないそうです。具合が悪いからとりあえず病院に行こうという考え方ができるのは、税金を利用した充実した制度が日本にはあるからなのだと思えました。他にも日本には税金を利用して運営されているものが沢山あります。ノンステップバスや駅のエレベーターの運用、道路や歩道橋の建設、上下水道の整備、そして私達が毎日通う学校の運営など、私が住んでいる家の周りにも税金により運営されているものが山ほど存在しました。そこでふと思いついた事は税金のない日本です。救急車を呼んでも来ない。医療費が高くなる。ゴミ収集がなくなる。市バスや地下鉄が走らないなど、ごく当たり前の事が、当たり前でできなくなってしまいます。今の日本を組み立て、私達を支えてくれているのが、税金なのです。このように「とられる税」から、「私たちの税」へと変わっていくのです。

現在、日本では少子高齢化が進み、子どもの人口が減り、それに伴い労働人口も減少して、それらの人が納める税金も少なくなってきました。一方で高齢者の数は増え続け、高齢者にかかる医療費や福祉サービスが年々増加し、税金がたりなくなっている状況です。今現在働いていない私は、親のように国に税金を納めることはできませんが、こういった現状をしっかりと理解し、きちんと税金を納め義務をはたすことのできるような人間になりたいと思います。またそれが、日本から格差をなくし、どんな人でも安心・安全に暮らすことのできる安定した社会をつくることにつながるのではないのでしょうか。

## 世界をも一巡するバトンつなぎ

北海道教育大学附属旭川中学校 1年 奥野 李孔

私が小学校を卒業した日のことです。

「みんなに感謝する心を大切にしていね。」と言いながら母と父は、笑顔で祝福してくれました。私はその日以来、「みんなに」とは家族や親戚のことを意味しているのだと思いながら中学校生活を送っていました。

しかし「税」について考える時私は、何故か真っ先にあの時両親が言っていたことについて考えていました。そのとき、ふと目に止まった母子手帳をめくってみると毎月の母の定期検診や、胎児である私の成長度、そして誕生後の数々の検査や予防接種が克明に記録されてありました。私たちの小さな命は、社会福祉という大きな力で確実に守られていたことに、改めて気づかされました。あの時両親が言った「みんなに」の意味を理解し、税の大切さを痛感しているところです。

そこで私なりに税について調べてみました。現在日本は、世界に誇れる長寿国となりました。これは、日本が豊かになり、医療福祉が整備されたおかげです。また第一次ベビーブーマーと呼ばれている団塊の世代の方々の離職が重なり、日本は急速な高齢化社会をむかえています。つまり納税者である労働人口は激減し、莫大化する社会保障費を少子化世代で担っているというのが現状です。戦後激動の時代を乗り越えて、日本経済の基盤づくりに心血を注いでこられた高齢者の方々の年金や手厚い福祉に支障がないようにすることが私たちの責務です。このまま財源不足を国の借金で賄い続ければ、次世代に過大な負担を強いることとなります。

消費税のパーセント増税は、三兆円近くももたらすそうです。パーセントの増税は、むしろ良策だと私は思うようになりました。消費税の値上げには違和感をもち否定的でしたが、今はとても強く必要性を感じています。目の前の出費だけに不満を表すのではなく、先見性を持ってこそ人に優しい国づくりに繋がるのではないのでしょうか。

また税は、日本国内ばかりではなく、開発途上国の経済支援にも使われています。それらは、乳児死亡率を低下させ、学校を建設して教育を浸透させ、農工業の技術指導も行い自立を促しています。彼らは将来自らの力で貧しさから脱却して、国を繁栄させることでしょう。そして豊かになったその国は、その税の一部を他の開発途上国の援助に回します。このように想像してみると、「税」は地球を一巡する温かいバトンつなぎに思えてきました。

私が母の胎児でいたころから、この先高齢者になってもずっと支えてくれる税を今、身近に感じています。税というすばらしい仕組みに感謝して、夢に向かって進み、仕事を心得て担税力をもった大人になりたいと思います。

## 「縁の下の力持ち」

大館市立下川沿中学校3年 新斗米 光

「秋田県、消滅——。」

ある日、社会科の授業で、秋田県の現状について学ぶ機会がありました。

「秋田県は、過疎化が日本一なんだ。」

先生の言葉を聞いて、私は驚くよりもむしろ納得してしまいました。私が住んでいる大館市では、実際に過疎化が進んでいるからです。毎年、出生率が低下し、小・中・高校生の人口も減少。進学や就職などで市外へ転出する若者が多く、逆に高齢者の割合が増加していて、まさに「少子高齢化」の典型です。

さらに、市の財政も厳しい状況であることも知りました。原因は税収の減少です。人口が減るということは納税者が減り、その分、市の税収が減ることになります。このことは、大館市だけの問題ではなく、秋田県全体の問題でもあります。このまま人口が減少し続けると、将来、大館市をはじめ他の市町村も財政がますます厳しくなり、秋田県全体が破綻し、消滅してしまうのではないかと強い危機感を覚えます。それだけ税金は、大きな影響を与えるものだと感じました。

では、どれだけの人が税金の大切さを認識しているのでしょうか。正直、私自身、普段、税金を意識しながら生活したことはありませんでした。しかし、税金のことを調べれば調べるほど、私達の生活になくてはならないものだというのを改めて知りました。例えば、朝起きて洗面や食事の調理に使う上下水道、学校へ登校する時に安全に通るための道路や信号、学校で使う机や椅子、教科書、教育や部活動で使用する施設、日々の安全、安心を守る警察や消防など、他にも身近な様々なことに税金が使われ、毎日の生活に深く関わっているのです。税金は、市や県、そして日本を動かすための原動力であり、直接目には見えなくても、「縁の下の力持ち」のように思え、私達を支えてくれていることに感謝の気持ちが強くなりました。

しかし支える力が弱くなれば、支えられる側とのバランスが崩れてしまいます。そして、原動力が小さくなれば、私達の暮らしが良くなることも、ましてや維持することも厳しくなります。そうならないために一人一人が現状を知り、税金の大切さについて、自分の身近なこととして意識を高めていくことが大事だと思います。

平昌オリンピックフィギュアスケート女子金メダリストのザギトワ選手に秋田犬が贈られた縁で「秋田犬ブーム」が沸き起こり、ふるさと納税をする人も増えています。全国にふるさと秋田県や大館市を愛し、支えてくれている応援団が大勢いると思うと心強いです。今は支えられている私も、将来大人になったら、支える側として、しっかり税金を納め、よりよい地域、社会になるよう「縁の下の力持ち」になりたいと強く思います。

秋田県が消滅しないよう、そしていつまでも発展し続けていくために。

ある日の食卓に、カニが並んでいた。昆布と湯の入った鍋が置いてあるから、しゃぶしゃぶにするのだろう。わが家でカニが出てくるのは珍しいことだ。「このカニどうしたの。」と母に尋ねると、「ふるさと納税だって。」と言われた。その頃は今ほどふるさと納税サイトのコマーシャルはやっておらず、私にはなじみのない言葉だった。食事の際、父にふるさと納税とは何かと尋ねた。「ふるさと納税は、地域の自治体なんかには納税、つまり税を納める制度だよ。これは、北海道に納税したから返礼品でカニが届いたんだ。」「へえ。」母も興味深そうに聞いていた。「でも、何で北海道にしたの。」再び私が尋ねる。「豪雨被害のために税金を使ってほしかったからだよ。前に見ただろう、被害。」確かに、夏休みに家族で北海道に行ったとき、被害が目に見えている状態だった。重ねて父が言う。「返礼品目当てで納税している人もいるだろうが、本来納税というのは社会のためにすること。現地でボランティア活動ができる人は多くはないかもしれないが、こういうかたちで復興の手伝いはたくさんの人ができる。これからどこか被災したら納税するからな。」直接ではないが、こうやって手助けできるなんて、ふるさと納税はいい仕組みだな、と初めて思った。

それから何回か父は納税を続けていた。地震で被害を受けた九州などだ。

だから、今月の七月、西日本豪雨のニュースを見たときもすぐにピンときたのだ。「ふるさと納税しよう。西日本に。」私から言い出したのは初めてだった。「そうだな。返礼品何がいい。」その時思った。「返礼品って、必ずもらわなきゃダメなの。」連日ニュースで見る西日本の様子は本当にひどかった。返礼品を準備するのも大変なのではないか。「返礼品なくても大丈夫だよ。返礼品なしで納税するか。」「うん。」私は中学生で学校もあるし、西日本とは遠く離れているからボランティアに行くのは難しい。それ以外で力になれることと言ったらふるさと納税しか思い浮かばなかった。そうして、初めて返礼品なしで納税した。自分で言い出したというのもあるし、返礼品なしで初めて納税したということ、私は今までで一番、この納税は役に立ったのではないかと思った。きっと復興には莫大なお金がかかる。その内のほんのわずかでしかないだろう。しかし、何百人、何千人、何万人の人達が納税したならば、ちりもつもって山となり、かなりの額になるのではないだろうか。私は社会のためにふるさと納税をする人が一人でも増えればいい、と思っています。



## 助け合いの輪

横浜市立根岸中学校 3年 道上 有紗

妹が病院の診療時間外に具合が悪くなり、夜間診療をしている病院と一緒に行ったことがあります。バタバタとしている中、母が保険証と医療証を受付に出していました。その時母に医療証って何？と尋ねたら、小学校六年生までは自己負担額を助けてくれる、ありがたいシステムのことだと、教えてました。今まで自分の診察の時は余裕がなく、医療証があることすら気づきませんでした。今回は妹の診察を待っている間に調べてました。

私の住んでいる横浜市では、生まれた時から小学校六年生までは条件を満たしていれば、自己負担額を助成してくれるシステムです。経済的な理由で受診できず思わぬ大きな病気に発展せず子供が成長するために必要な制度だと思いました。現在は少子化が問題になっていますがこの制度が解決への糸口となれば将来の税金を支える担い手が増える方向になる。お世話になった分、将来自分が恩返しする。結果助け合いの輪につながっていると思いました。また、この医療証のシステムは受診する側のマナーも問われると感じられました。無料だから少しの怪我や様子を見れば良くなる病気でも気安く受診するものではなく、病気の重病度に応じ考えてから受診すべきだと感じました。本当に医師の助けが必要な人からの受診がベストだと思います。税金を支払うことが様々な社会保障の役に立ち、結果自分や家族にも形を変えて返ってくる、理解して支払うと感謝の気持ちすら生まれてきます。

実際、私は自分でお金を稼いでいないので、直接納税はしていません。ですが、将来大人になり、自分の給料を得た時は今より支払い義務が増えていることでしょう。だけれども、必要な社会保障がしっかりしていれば、日本の未来も明るく輝くと思います。税金が何にどのような目的で使われ、そして自分達の生活に返ってきているのか。理解を深めることが大切だと思います。内容を知っていれば気分良く支払えますし、自分の納めた税金が、どこかで役立っていると思える人が増えれば税収も自然に上がると思います。

見えないものは尊いものが多いと祖父から聞いたことがあります。目に見える何かも大切ですが、その裏に隠れているものこそ、大きいと今回改めて思いました。一人一人の納めた税金が支える大きなもの＝社会、その尊さを改めて税金を通して学ぶ機会となりました。助け合いや支え合いで生きていくことが自分や家族以外の人々と見えないつながりとなるきっかけが税金なのだと思います。

## 教科書は未来へのバトン

高岡市立高岡西部中学校 1年 北山 陽彩

私は学校が大好きで、保育園から現在まで無欠席だ。

大好きな学校で特に胸がおどるほどワクワクするのが四月の始業式だ。自分の机に高々と積み上げられている、少し印刷の匂いがする真新しい教科書を見ると、「今年も一年頑張ろう。」と気持ちを新たに決意できる。そして、大切な物を手にするようにパラパラとページをめくる。新しい事が学べる嬉しさと、しっかり理解できるだろうかという不安な気持ちが交差して複雑な気分だ。特に苦手な教科の教科書を手にすると、さっきまでのワクワクした気持ちが吹っ飛んでしまう。それでも、私の気持ちを切り替えてくれる魔法の言葉によって、学習できる喜びと感謝の気持ちでいっぱいになりながら、今まで新学期をスタートさせてきた。

私にとっての魔法の言葉、それは教科書の一番後ろのページに書かれている一文だ。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

この一文に気付いたのは小学校高学年の頃。無料でもらえるのは当たり前だと思っていた教科書に税金が使われていると知って衝撃だった。今まで税金は取られるもので、恩恵なんて受けていないと思っていた自分がとてもはずかしくなった。そして、毎日汗を流して働いてくれている大人が税金を納めてくれているから、毎年新しい教科書を手に出来ていたのだと知った時、

「今の私の役目である学生を全力で頑張り、将来の夢に向かって努力する。社会に出たら今まで受けた恩恵を次の世代の子供たちに返していける大人になりたい。」と思い、大人になった自分を少しだけ想像できた。

日本はいま、急激な少子高齢化が進み厚生労働省「人口動態統計」によると日本の総人口は、二〇一〇年の一億二八〇六万人から長期の人口減少過程に入り、二〇三〇年には一億一〇〇〇万人を切ると予測されている。さらに労働人口は現在の六五〇〇万人超から五四〇〇万人近くまで減少するそう。つまり、このままでは日本経済が崩壊してしまうかもしれない。そうなれば、未来の子供達は私が受けたような恩恵を受けることは難しくなるだろう。

まさしく日本を支えていく未来は私達の世代に託されているのだ。手にした教科書が現代から未来の現役世代へとつなぐバトンのように感じ、私も必ず次の世代へつなげられるよう将来の夢に向かって頑張ろうと決意した。

必要としている人のために

土岐市立土岐津中学校 2年 岩本 実花

私の祖父は、一昨年脳出血で倒れ、後遺症が残りました。後遺症はとても重く、自力で立つことさえ困難で、右半身が麻痺し利き手だった右手も、全く動かなくなってしまいました。そんな祖父を家で介護していくのは、体力的にも金銭的にも困難でした。しかも、主に介護するのは七十歳を超えた祖母なためになおさらでした。

そのときに嬉しかったのは、要介護者のための制度でした。例として、介護サービスや介護用品の料金の自己負担が少なくなる、というものなどがあります。そのおかげで、祖父を家で介護していくことができました。もとの生活と近い生活が送れているおかげか、祖父もだいぶ回復し、会話が全く成り立たなかったのが、少しずつ短い簡単な会話なら成り立つようになってきました。

先ほど挙げたような支援に使われているお金は、多くは税金から出ています。私は今まで「税金なんか無くても良い。」と思っていました。ですが、祖父が倒れた時「それは違って税金は大切なものなんだ。」と思うことができました。

ですが、その税金は必要としている人全員に届いているのでしょうか。その答えは、私はいいえだと思っています。そう思う理由は、ニュースなどでよく「社会保障が足りない」というのを見るからです。今、待機児童が増えていたり、近くに病院がなかったり、支援が充分なのか不安で子供を産むことをためらったりする人までいます。これらの問題は、税金が必要な人に行き渡っていないために起きる問題だと思っています。

それでは、税金を必要とする人全員に行き渡らせるにはどうしたら良いのか。私は、一部の税だけでも目的税にするべきだと考えます。何にでも使える普通税だと、どこにでも使えるお金がたくさんあるので、必要ではないところに使ってしまうということが起こると思います。他にも財政が不透明ではなくなり、税に対して国民の理解を得やすくなるという良いところもあると思います。

今、少子高齢化が進んでいるため社会保障が必要な人に行き届かなくなっています。その問題をいかに次の世代まで問題を引きずらないよう、税の使い方を工夫していくか。それが、私たちがこれからしていかなければならないことだと思います。

そのためにも、まずは私たちが税についてもっとよく知るべきです。国の財政について気軽に学び、議論できる場を子供のうちから作り、みんなで税について前向きにとらえられる社会にするべきだと、私は信じています。

## 『喜び』から『意義』へ

枚方市立枚方中学校 3年 藤山 玲依

「いらっしやいませ！」「ありがとうございました！」

今から四年前の小学五年生の夏休み、私は同級生の友達と五人で小さなチュロス店を経営していた。と言っても、実際に営業したのは地元の夏祭りの日、たった一日だけだが。

これは、『ジュニエコ』という公的な教育プログラムで、小学五、六年生五人一チームで株式会社の経営を体験するというもので、二か月に及ぶ体験の中で、私達は株式会社を設立し、計画・仕入れ・調理・販売・決算、そして納税までを実体験を通して学んだ。

私たちのチュロス屋は大繁盛で、出店チーム十七店舗中、一位の売り上げを記録した。

そして後日、その体験の締めくくりとして実際に市役所納税課に法人税を納めにいった。

もちろんその額はわずかなもので五千円程度だった。それでも私はあの納税の瞬間、とても誇らしく喜びに近いものを感じたことを今でも鮮明に覚えている。

「納税に喜びを感じる？」大人からしたら不思議に思うかもしれない。しかし、確かにそう感じたのである。なぜか。それは、自分達が社会の一員として経済活動をした結果、税金を社会に納めることが出来た。そしてそれがたとえわずかだとしても社会に役立つと感じていたからだろう。

今、私は中学三年生になり、今回『税』についての作文を書くにあたり、あの税金は実際にはどのように社会に還元されていたのかについて、より詳しく調べてみたいと考えた。その結果、私が普段意識していなかっただけで、いかに税金が私達にとって身近なものであったのかという事が良く分かった。

そもそも、税金とは何か。私達国民が健康で文化的な生活を送るために政府は個人では出来ない公共のサービスや施設を提供している。その費用を国民である私達が負担している。それが税金である。つまり、私達が互いに協力し、より豊かで良い社会を生きていくための『会費』のようなものなのである。

例えば、病院での自己負担額が安いのも、救急車や警察が無償なもの、街中がごみであふれていないのも税金のお陰であるし、又、日頃当たり前のように歩いている道でさえ税金で整備されているのである。更には、深刻化する少子化や超高齢化問題への予算や、頻発する自然災害対策へも多額の税金が充てられていることは言うまでもない。

調べれば調べるほど、私達の社会が隅々まで税金で成り立っており、その恩恵を常に受けていることが良くわかる。このように税金は必要不可欠なものであるからこそ、私達はより深くそれについて学び、その用途に関心を持つことが大切である。そうすることにより、私達は『喜び』とまではいかなくとも、より『意義』を感じながら納税することが出来るのではないだろうか。そう。あの無邪気だった小学五年生の頃の私達のように…。

ある日、家族と話していたら、私たち姉弟の小さい時の話になりました。

「陽菜の小さい頃は本当大変だったなあ。あんなちっちゃく生まれて、みんな右往左往だったんよ。」と母が言ったので、「そんなに大変だったんじゃ。やっぱりお金とか？」と聞いたら、「いやいや。お金は国が出してくれたんよ。」と、母が言った言葉を聞いて、「どうゆうことなんだろう。」と思いました。

私の母は三十週で私を生みました。私が生まれた時、看護師と医師の人の顔色が変わったことを母は今でもおぼえているそうです。

千三百五十二グラム。極低出生体重児で生まれた私は、すぐにNICUに入院し、保育器の生活がスタートしました。それと同時に最先端の機器を使った検査などで、たくさんのお金が必要になりました。

父と母は、「陽菜を生きさせたい。」「初めての命をなんとしてでも助けたい。」そう思ったそうです。可愛い我が子のためには、あらゆる手を使って助けたいと思っていましたが、現実はそう甘くありません。少なくとも数十万から数百万の治療費がかかるのです。私の親は、半分諦めかけていました。

私への罪悪感の気持ちでいっぱいの中、母と父は医師から、「未熟児養育医療制度」と「乳幼児等医療費助成制度」というものを申請するよう勧めて下さったそうです。

私は今、障害もなく、勉強や運動も周りの子たちと同じように生活することができています。普通の子供は、あたり前のことができることは何も気にしないことでしょう。ですが私には今、友達や家族と笑いあえていることが、奇跡だと思っています。私がこうして毎日を過ごせているのは、あの制度があったから、税金があったからです。私は国民によって、市民によって、友達、家族によって生かされているのです。けっして一人で生きているのではなく、税金によって人はつながっていることを身をもって痛感しました。

多くの人が税金は必要なのか、損しているようだと思うかもしれません。しかし私自身のような私の家族のような、税金の存在が神のようであると思う人間もいることを知ってほしいです。大げさだと思うでしょう。でも少しでも税に対しての見方が変わって税金を納めてくれたら、それは私にとって願ったり叶ったりなことです。

今の私、これからの私に出来ることは何でしょう。義務教育をうけている、まだ子供の私だからこそ出来ることがあるのではないかと思います。いや、きっとあります。将来大人になった時も、未来の幸せを創れるような税金を納めていきたいです。

## 税金のすばらしさ

那賀町立鷲敷中学校 2年 西川 壮紀

僕は税といっても、税のしくみや使われ方など全くというほど知りませんでした。ニュースや新聞で税金について報道されていても僕には無関係だと感じていたのです。しかし僕の生活は税金によって助けられていることばかりで、僕は税金と深く関わっていました。

それを教えてくれたのは、今年の租税教室です。租税教室では、肉屋を営んでいる方のお話を聞いたり、税に関するDVDを見たりしました。中でも僕が一番驚いたのは、一人あたりの教育費の高さです。僕は今、当たり前のように学校へ行き、教科書を使って授業を受けています。しかしこれは当たり前のことではありませんでした。小中学校の九年間の一人あたりの教育費は一千万円を超え、とても自分で払えるような額ではありません。しかし税金のおかげで、その教育費も支払われているのです。とてもありがたいことです。教科書は大切に使わねばと改めて思いました。

そして税金は教育費の他にも、医療費や年金、生活保護や子育て支援にも使われていることも知りました。去年の冬、野球の部活中にバットが僕の胸に当たるといふ出来事がありました。僕はそのとき息ができないくらい苦しかったです。そして救急車がすぐに来てくれ、僕は病院に運ばれました。救急車の中ではとても不安でしたが、消防署の方が優しく声をかけて安心させてくださいました。寒さと痛みで震える僕にかけてくださった毛布の暖かさも忘れられません。病院ではレントゲンを撮り、車いすまで用意していただきました。幸い骨に異常はなく、その日に帰宅できました。救急車が、税金で賄われているとこの租税教室で知り、税金に感謝する思いが、いっそう強まりました。

僕の町は数年前に台風による水害で甚大な被害を受けています。そこで今、堤防を造るために大規模な工事が行われています。莫大な費用がかかると思いますが、これも税金で実現しています。二度と過去のような災害で人々がつらい思いをすることのないようにというみんなの願いが、税金という形で実現しているのです。

僕は税金とは、町や人の心を豊かにするものだと実感しました。人々に安心や暮らしやすさを与えてくれるすばらしいものが税金です。豊かさへの架け橋になるものともいえるでしょう。

この夏僕たちは、町が親善交流を行っている北海道音別町の中学生を迎えました。遠い北国の友達と一緒に阿波踊りを踊り、海水浴をして、交流を深めました。もう二十年以上続いている町の行事であるこの交流は、この夏の楽しい思い出です。新しい友ができるという心の豊かさへの架け橋は、やはり貴重な税金のおかげだと知りました。僕はこれからも税金に感謝して、税への知識を深め、きちんと税金を納めていける人になります。

「支えてくれてありがとう」のその先へ

長崎県立諫早高等学校附属中学校 3年 波戸 菜保子

私は被爆三世だ。七十三年前の八月九日、私の祖母は長崎の市街地で被爆した。祖母は無事だったが、祖母の知人や親戚、兄弟が、キノコ雲の下で命を落とした。また、命は取り留めたものの、放射能を浴びたことによる後遺症に苦しめられた人もいた。

祖母の兄がその一人だった。彼は被爆して数十年が経ったのちに、放射能の影響とみられる多発性骨髄腫を発症し、闘病生活をおくることになった。治療にはもちろん高額のコストがかかる。しかし、ここで彼は税金の存在に大きく助けられたというのだ。

国から被爆者だと認められ、被爆者手帳を給付された人は、一般疾病に対する医療の給付の制度によって、医療費を負担することなく治療を受けることができる。そしてこの医療費は、私たちが納めている税金によって賄われているのだ。祖母の兄はこの制度を利用し、医療費を国に負担してもらいながら、数年間にわたって病魔と戦った。結果、病が寛解することはなく、彼は私が小学生のときに亡くなってしまった。しかしこの制度がなければ、彼は治療費を払わなくてはならないという負担を背負い、不自由な思いを抱えたまま一生を終えたかもしれない。そう考えると、この制度があって本当によかったと思った。

私はこのことをきっかけに税金について考えるようになった。私はまだ中学生なので、自分の手で税金を納める機会は少ない。しかし、私が通う学校の授業料は、県のお金や国からの補助金によって賄われている。教科書の裏表紙を見れば、「税金によって無償で支給されています。」の文字が目に入る。私が安心して通学できるのも、税金によって道路や交通機関が整備されているおかげだ。このように私の毎日は税金に支えられている。

また、長崎に住んでいる私には、被爆三世や被爆四世の友人も多くいる。私が楽しい生活をおくれるのは彼らの存在があるからだ。しかし、ここで忘れてはならないのが、彼らにも被爆者の親戚がいるという事実だ。その中には、私の祖母の兄のように原爆の後遺症に苦しみ、治療を受けた人もいるだろう。その人がいなければ私の友人も生まれなかったかもしれないわけだから、私はこんなところでも税金に支えられていたことがわかる。

しかし、先ほども述べたように、私には税金を納めた経験がほとんどない。今まで数えられないほど税金に支えられてきたのに、それでいいのだろうか。もちろんこのままではいけない。私たちは、自分を支えてきてくれた税金に、恩返しをしなくてはならない。

将来、私も社会に出て働く日が来るだろう。そうしたら私には所得税が課せられる。そのときに国のために、そして巡り巡って自分や大切な人たちのためにきちんと税金を納めることが、私にできる一番の恩返しだと思う。納税を嫌だと思わずに、皆の役に立てて嬉しいと考えられるような人になりたい。

## 「ある日常の会話から」

白杵市立野津中学校 3年 後藤 和叶

私が税について思い浮かべるのは、過疎化が進む私の地域での店舗の取り壊しや、まだ建てかえられて数年しかたっていない私が通う新しい校舎の建設費に使われている事くらいでした。そんな税について全く無知な私が改めて税の事を考えようと思ったのは、ある日常会話がきっかけでした。

休日に父と母と私でテレビを見ていた時でした。テレビでは高齢者の年金についての特集をしていてとても考えさせられる内容のものでした。高齢者が多くなり、社会保障の費用が増えていく反面、その費用を負担する働き手が減っているという問題の現状を伝える内容でした。高齢者と働き手の比率が1対1になろうとしていて、働き手が納めないといけぬ税金は増え、高齢者の年金はどんどん減っていくというものでした。取材を受けていた高齢者は年金だけでは生活ができないので七十代になってもバイトをして暮らしていました。私は老後も仕事づくめなんて、これまで懸命に働いてこられ、社会に貢献された方々に申し訳なく本当に大変だろうなあと思いました。

テレビが終わった後、父と母が、「私達の老後どうなるんやろうなあ、年金も減って働かんといけぬのかなあ。」と言っていました。

両親との話で私もまだまだずっと先のことなのに不安になりました。私たちが社会人になった時に納めないといけぬ税金は今の両親以上に増えてしまうのではないかと。

父や母は、生活保護受給者の受給額を減らして次の世代を担う子どもたちの手当などを増やしてほしいと言っていました。私は両親の意見に賛成でもあり反対でもあったので何も言えませんでした。私は五人兄弟の一番上でまだ二歳、三歳の弟もいるので、両親がそういう意見なのも納得できまし、今の子どもたちには次世代を担う役割があるので、教育や生活などの手当がもっと必要だと思います。ですが、生活保護受給者の人に手当が必要ないわけがありません。何らかの理由で働けない、生活が苦しい人がいるからです。そしてその人たちを助けなければならないからです。

私には、とても難しくて答えのない問題のように思います。国のリーダーはそんな問題に立ち向かっているのも、とてもすごいしありがたいと思います。今、来年の十月に消費税が8%から10%に増税されようとしています。賛成、反対いろいろな意見があるのは知っています。まだ中学三年生の私ですがこの社会に生きる皆が公平で平等に暮らせる世の中を作るためにも、税が大きな意味を持つ事に気づきました。

税について私たちができる事は数少ないですが、関心を持ち、考えていく事は続けたいです。今は支えるより支えられる私ですが、将来は社会のために役立つ人、支える人、になりたいと思います。



私に今できること

宮古島市立砂川中学校 3年 松川 穂羽

税金について考える年頃になりました。私は今まで「税」について、自分の意見を持つことはあまりありませんでした。だけど、私は先日行われた「こども議会」というもので、「税」について考えるようになりました。こども議会とは、宮古島をよりよくするために、宮古島の中学生代表の数名が議員となり、市長や教育長というえらい人に直接、中学生の意見を言えるという議会でした。私はその議員の一人として参加しました。その議会の中で私がとても心に残った話題がありました。それは、「各教室へのクーラー設置」というものでした。私達中学生は、「暑くて授業に集中できないから、教室にクーラーをつけてほしい」という意見を議会で言いました。すると、教育委員会から返ってきた答えは、「これから二年間かけて全各教室にクーラー設置をします。」ということでした。学生にとってはとても嬉しいことです。だけど、私はひっかかることがありました。それは、クーラー設置にかかる費用でした。全各教室にクーラーを設置するには、約5億円ほどのお金がかかり、設置して終わってから、年間に4000万円ほどかかると言っていました。けれど、教育委員会は私達学生の学力向上に期待して、クーラー設置をしてくれと言ってくれました。私達学生のために莫大な費用を使ってくれる大人達にとっても感謝して頑張っていきたいと思いました。そしてもう一つ「高等教育機関の誘致」についての話題もできました。今、宮古島では、看護・観光・リハビリテーション・語学の4つの分野の高等教育機関の誘致を進めているそうです。私はもうすぐ高校生になりますが、教育機関を増やすのはもちろん嬉しいことです。けれど、それにも大きなお金がかかります。それと前に出てきた「クーラー設置」も一緒になると、莫大な費用を使うことになります。だから、私はたくさんのお金を使うことが心配になりました。これからの宮古島は私達若い人が支えていくことになります。色々な事に関して皆からの「もっと便利にしたい」「もっと良い島にしたい」などの声に対して、教育委員会はたくさんのもを提供してくれると思います。とても嬉しい事ですが、将来的な事を考えて、私も「～が欲しい」といったお金を使ってしまう意見を減らしていきたいです。これから、どのようなものにお金を使うのか、ぜひ今の大人達に考えてもらいたいです。そして、これからの宮古島をお金をあまりかけずにより良くできるように、ボランティアで清掃したり、観光客が多く訪れるようなきれいな島づくりを心がけていきたいです。私が今できることを積極的に行動したいと思います。

「危ないから逃げて！」濁流が町に押し寄せる映像とともにそう叫ぶ声がテレビから聞こえてきました。これは今年の七月に起きた、いわゆる「西日本豪雨」のニュースでした。私は声も出さず、ただテレビを見ていただけでしたが、町全体が濁流にのまれ、何もかもが茶色の水に浸っていた様子は、あの東日本大震災の津波をも思い起こさせる程、悲惨でした。

この西日本豪雨による被災地での死者数は二百人以上になりました。また何千人もの人が避難所生活を余儀なくされました。そこで、総務省は被災地に対し普通交付税から約三百四十六億円を前倒しで配分すると発表しました。普通交付税は、地方税などの収入でまかなうことのできない財源の不足分を補填するための税であり、政府は、災害対応や復旧工事に支障が生じないように、前倒しで配分したのです。この「災害対応」の中には、避難所での炊き出しや給水車のための費用なども含まれていでしょう。これらは避難所で生活する人達の心の支えに、少しでもなったに違いありません。ニュースで見た、炊き出しを見て自然とこぼれたあの被災者達のつかの間の笑顔は、私の心に強く残っています。

このことは、私達に全く関係のないことではありません。災害はいつ、どこで起こるかわかりません。よって、私達はいつ避難所生活を送ることになってもおかしくないのです。もしも避難所生活になった場合、税は私達の生活の助けになるのです。

例として、東日本大震災での税金の使われ方をみると、仮設住宅の設置やがれきの撤去をはじめ、学校や市役所などの建て直し、失業者や高齢者への生活保護費の支援や福祉サービスなどにも税金が利用されていることがわかります。日本は自然災害が多い国ですが、その壁を何度も乗り越え、ここまで発展し続けることができた理由の一つに、税があるのではないのでしょうか。税は、私達の生活だけでなく、日本の社会全体も支えているのです。

「税金など払いたくない。」とか「なぜ税金を払わなくてはいけないのだ。」など税金に対して否定的な考えを持つ人もいるでしょう。しかし、私達が払う税金で、私達は今様々なサービスを受けることができます。このような事実を、国民一人一人が再認識するべきです。「税」と「サービス」この双方向の関わりで現在の社会が成り立っていることを心に置き、税を身近に感じ、税を肯定的に考えることが大切だと思います。このような考えを一人一人が持つことで、日本の社会はより一層充実していくのではないのでしょうか。

七年前、僕の目の前に広がった異様な光景。崩れ落ちた建物、ねじ曲がった道路、品物がないコンビニエンスストア……。当時七歳だった僕の脳裏に焼きついた衝撃は、今も鮮明によみがえる。しかし、今の僕の周りにはつい七年前に未曾有の被害を受けたとは想像できない、平和で美しい世界が広がっている。ともすると、七年前のあの光景を忘れてしまいそうになるほどだ。僕が住む福島県がここまで復興することができたのは、たくさんの義援金、延べ二十万人ものボランティアの方々のおかげである。

東日本大震災は「激甚災害」に指定された。「激甚災害」に指定されると、災害復旧事業の補助率が何割か上がるそうだ。この仕組みを行うにあたって使われている財源はどこにあるのかと考えてみると、税金であることに辿り着く。例えば、僕自身がコンビニエンスストアで飲み物やお菓子を買うなどするだけで、「消費税」という税金を払うことになる。その税金が被災地の補助に使われ、復興を早めることにつながっていたのかもしれない。そう考えると、自分も災害復旧に一躍買っていたのだと、なんだか少し嬉しく感じた。またそれは、同じような仕組みで、日本国中の人々が税の力で僕達を助けてくれていたのだということでもあり、そう思うと、ありがたさとともに、自分一人だけで困難に立ち向かわなくてよいのだという心強さも感じられた。

そもそも、税の歴史を辿ってみると、人が集団で共同体となって生活するようになった古墳時代からあったようだ。それは、大昔の人々も、自分一人の力で生きていくよりも互いに助け合った方が生きやすいと感じたからだろう。現代では、「なぜこんなに税金を払わなければならないのか。」と不満を漏らす人もいるが、これは自分が税金を取られるという一面だけを見ているのであって、他の人が払っている税金に助けられて自分もよりよい生活ができているという事実、つまり、税のそもそもの成り立ちを考えれば、自分の負担に対する見方も少し変わるのではないか。

実際のところ、日本の税の負担率は、世界の諸外国と比べて低い。しかし、負担率の高い国は、その分、社会福祉が充実している。「助け合い」の実現と自己の負担過重を考えると、どちらがよいとは一概にはいえない。大切なのは、「自分の払った税が誰かの役に立ち、誰かの払った税が自分のためになっている」ことを共通理解することと、「より効果があり、かつ無駄のない税金の使い道」をみんなで真剣に考えていくことだと僕は思う。

僕もまもなく大人の仲間入りをする。大人になって収入を得るようになれば、今以上に税との関わりが深くなる。その時には、ただ義務として税を納めるのではなく、税を通して他者や社会とつながっているという思いを持ち、自分事として真剣に税の使い方を考えながら、社会の一員として生活していきたい。

## 素敵な納税

霞ヶ浦高等学校附属中学校3年 山岡 真緒

一步踏み込めば、そこは活字の楽園。静寂を破らぬよう、ローファーの足をゆっくりと下ろす。数えきれない程の本を湛えたこの空間で、一冊一冊が息をしている。集中して勉強したい時、知りたいことがある時、日曜の午後、私はよく図書館へ行く。

利用するのに、お金は不要である。税金が使われているから…だと思う。この作文を書くまで、私は利用者でありながらしっかり理解していなかったのだ。考えてみれば、あれだけの本に机と椅子、働いている司書さん達のお給料等、沢山お金がかかる。

調べてみると、やはり税金との繋がりがあった。市民税、地方税、国や県からの補助金などがあるようだ。これらは、多くの人々が負担してくれたお金である。気軽に利用している場所。私が想像できないくらいの協力があって成り立っているのだ。そして、それは図書館だけではない。消防署に警察署、道路や浄水場や公園、公共のサービス。私自身も支えられて生きてきた。皆が豊かな暮らしをするのに欠かせないものなのだ。税金が回っていなければ、病気も治せないし、災害に遭ってもどうすることもできない。私の好きな遺跡などの美しい景観だって、維持されなくなってしまう。税の種類は約五十種類ほどあり、どれも大事なものだ。普通の日常は、税金があるから存在している。お互いが気持ちの良い生活をする為に、税金というツールを使って協力し合っているように思えた。

そこで疑問が生まれた。私は中学生だ。消費税の他には税を納めていない。では、このツールを使いこなすことは出来ないのだろうか。買い物以外の協力は出来ないのだろうか。

今だったら分かる。私には、「理解する」という協力が出るのだ。図書館というきっかけから調べていったから、税金についての意識が変わった。どんな税金が、何に使われているのかを少しだけでも理解する。この作文を書き始める前は堅苦しいものだと思っていたけれど、調べて、自分なりに考えてみて、豊かな生活の為に温かい連携だと気付くことが出来た。社会人になった時、税金に関しての理解があれば、「協力し合っている」という認識で、素敵な納税が出来るのではないだろうか。

## 税への恩返し

山梨市立山梨北中学校3年 櫻井 唯

昨今の酷暑は著しい。猛暑日、熱帯夜が毎日のように続き、「最高気温の記録更新」というような話題も尽きない。そのため、起きているだけでもげんなりしてしまうどころか、眠りにつくことさえも容易ではない。しかし私は、学校に行くことでその暑さから解放されることができる。

数年前、私達の市では小中学校のエアコン設置率が百パーセントになった。それまでの私は、何秒かに一度回ってくる天井の扇風機にばかり気を取られながら授業を受けていた。だが、エアコンの設置によって私達の授業中の快適さは格段に上がったのだった。

先日、学校で租税教室が行われた。そこでは、私達の生活と税の関わりについて学んだが、私が最も驚いたのは国や県の支出入の内訳だ。借金が明らかに多い。借金をしているということは以前から知っていたが、これほどまでの額とは知らなかった。これは、一つの家庭に例えると破産レベルだそうだ。それを聞いて私はとても恐ろしくなった。

しかし、日本はなぜ財政破綻しないのだろうか。なぜお金を貸し続けてもらえるのだろうか。様々な理由があるが、日本にはとても高い技術があり、世界から信頼されているということもそのうちの一つだというらしい。私は、その高い技術力をこれからもさらに発展させていくためには教育が必要だと思う。

実際に、今日私達の学びのためにとても多くの税金が使われている。教科書に机や椅子、実験器具など、これらは全て税金でまかなわれているものだ。教室のエアコンだって同じだ。夏の炎天下の中、冬の凍える寒さの中、屋外で働いている人もたくさんいるのに、私は快適な温度の中で勉強することができるのだ。中学生一人当たりの、税金でまかなわれている教育費は年間で百万円以上にもなるという。私にとってこの金額は想像もつかないほど大きいものである。

私は今まで、勉強するのもしないのも自分の勝手だと思っていた。しかしそれは違う。私達の学びのために、顔も見ただけでもないような人達が一生懸命働いて得たお金が使われている。たくさんの人達の大きな期待が込められているのだ。だから私は今、自分が学べる幸せに心から感謝する。そして、日本の未来のために精一杯勉強に励もうと思う。

成人年齢が十八歳以上に引き下げられ、税金を払い始める年齢も低くなる。このことを知った当初は、自分のお金がなくなってしまうと思い、不満を感じていた。しかし、税があるおかげで私達の生活は、互いに助け合い、豊かに生きていけるようになっていくことが分かり、税金を払うことに対する気持ちが明るくなった。私はこの気持ちを忘れずに、たくさんの人達からの税への恩返しができるように、一生懸命生きていく。

## より良い社会のための税

能美市立根上中学校3年 中西 野々香

税金はなくてはならないものです。学校で使う教科書も税金から出ているし、能美市では高校生以下の医療費も税金で支払われています。大災害の復興支援金も税金があるからできることです。

しかし、税金は「納める」よりも「取られる」というマイナスイメージをもつ人が多いのも事実です。「税」を国語辞典で調べると、「昔、統治者が人民から取り立てた穀物・布・金銭。年貢。今は、国家や地方公共団体が国民から強制的に徴収する金銭。」と、ありました。「年貢」や「強制的」という言葉からは良い印象を受けません。

では、現代の“税”と江戸時代の“年貢”は同じと考えていいのでしょうか。年貢は農民が領主に米を納め、それを藩が商人に売ってお金に換え、藩の財政に使うものです。これは、武士のために使われるお金であって、納める農民に直接利益はありません。それに対して税は、最初に書いたように、私たちが生活する上でとても役立っています。それなのに、税に対するマイナスイメージが強いのです。

一方北欧では、税率が20%以上と、とても高いのに、国民は充実した生活を送り、不満をあまり感じていないように思われます。それは、学校や病院が無料であるなど、福祉が充実していて、それを支えているのが税だということを国民が理解しているからだと思います。日本で税に対するイメージが悪いのは、自分たちに利益が還ってきている実感がないからではないでしょうか。税がどのように使われているかわからないので、一方的に取られているような感覚になっているのだと思います。

なので政府は、もっと税金がどんなふうに使われているか、国民に発信する必要があると思います。国民も、自分たちが納めた税金がどのように使われているのかを、チェックするべきです。自分が働いて得た大切なお金から払うものなので、当然適正に使われるべきだし、また、使われ方に納得していないと、いつまでも不満が残って、豊かな心で生活できないからです。

しかし、充実しているように見える北欧にも問題があります。高い税金に耐えかねて、国外に出てしまう若者もいて、さらに高齢化が進む一因となっているそうです。また、失業保険などの保証が充実しているので、仕事に就かなくても生活できてしまい、働かない人が増えています。そうになると、税収も減るし、高い税金を納めている人との不公平感も大きくなります。高すぎる税率も、行きすぎた社会保障も、どちらも問題なのです。私達も、税と福祉のちょうどいいバランスを考えていかなければなりません。

これから私達は、税を納める立場になります。今後も、税について関心を持ち続け、より良い社会の実現に向けて努力したいです。

## 「学べる」こと

河津町立河津中学校3年 中村 子宵

私の家は食堂です。両親は自営業で食堂を経営しています。だから私は大人の仕事がどれだけ大変か見てきました。特に休みの日の昼食の時間は忙しいです。お客さんのご飯を作るために自分たちの昼食を食べるのが三時、四時になることもあります。また、お客さんが残した物を見て悲しい気持ちになったり、忙しさのあまりミスをしてしまうこともあります。他にも大変な事が多くあります。私はそんな親の姿を見て、お金をかせぐというのはとても大変な事なんだと感じました。もちろん大変な事ばかりではなく、嬉しい事もたくさんあります。でもそれを含めてお金をかせぐのは大変な事だと思います。

日本には勤労の義務というものがあります。これは義務と同時に権利でもあると教科書に書いてありました。働いている人の多くは仕事が楽しいと感じることもあれば大変だ、つらいと感じることもあると思います。中には簡単にお金をかせげる人もいるかもしれませんが。でもほとんどの人が苦労してやっとお金がかせげるのだと思います。

そうやってかせいだお金の一部が税金になります。私が一番身近に感じている消費税も親からもらったおこづかいで払っているのです。結局は大人がかせいだお金です。

私たちに一番近い税の使い道は何だろうと考えた時、それは学校で使う教科書だと思います。私の社会の教科書の裏には「この教科書は、これからの日本を担うみなさんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と書いてありました。義務教育の九年間、私たちはどんな家庭の事情を抱えていても、お金がなくても「学ぶ」ことが出来ます。それは私たちにとって最高の税の使い道、プレゼントだと思います。

世界には学びたくても学べない、生活するのも生きるのもやっとな人々、子供がいます。私たちは本当に恵まれています。それは私たちの周りにあふれる税によって支えられているのかも知れませんが。私は学校で学ぶことによって夢ができました。それもまた税金によって支えられているのです。

大人の方が苦労してかせいだお金の一部、税金。私の一番身近な消費税。私たちに「学ぶ」権利をくれる税金。子供たちの夢を生み、育ててくれる税金。私は税金に感謝して、まずは教科書を大切に使おうと思います。そしてこの「学ぶ」チャンスを活かし、夢をかなえ、いつかは大人になった立場から税金を納めて子供に「学ぶ」チャンスをプレゼントしたいです。

## 「未来を応援するぜい（税）」

姫路市立豊富中学校3年 提坂 瑚々

私は昨年夏、姫路市の親善大使に応募した。姫路市には海外に6つの姉妹都市と1つの姉妹城がある。毎年、夏休みの期間を利用して市内の中高生が親善大使として派遣され、各姉妹都市の一般家庭でホームステイをしながら、現地の人々と異文化交流体験できる。私は夏休みの派遣に向けて4月に説明会と選考面接試験を受け、晴れて9人のメンバーと一緒に韓国・昌原市の派遣生に選ばれた。

5月からは派遣生としての心構えや韓国語、異文化等について事前研修を受講したり、派遣先で披露するプレゼンテーションやパフォーマンスの練習に取り組んだ。姫路市の文化国際交流財団の職員の方々がこれらの研修や練習を指導して下さった。職員の方は本番の派遣にも同行して下さったので私は安心して親善大使の活動に臨むことが出来た。

一週間のホームステイでは刺激を受け、とても有意義な時間を過ごせた。秋にはどんな体験をし、何を学んできたのかを報告する会も催された。参加者、一人一人のプレゼンの為に職員の方が何度も練習に付き合ってくれたので成功の為に奔走して下さった。

姫路市の未来を担う中高生の為に市は1980年にアメリカ、フェニックス市に10名の高校生を派遣して以来、この交流活動を続けている。私は学校で応募用紙をもらうまで、市がこのような事業を行っている事を全く知らなかった。毎年、30名以上の中高生を派遣する為に財団が骨を折って下さる。姉妹都市との連絡、調整、手配など全て職員の皆さんがお膳立てして下さるので生徒や保護者は心配なく申し込める。費用の助成もある。つまり、税金が私たち若者の未来を応援する活動に使われている。姫路から世界へ、羽ばたくきっかけを後押ししている事を、私は親善大使の活動を通して知ることができた。

他にも税金を使った事業として、例えば、ごみ処理場、浄化水場など暮らしを快適にする設備の整備や生活や安全を守る社会保障、災害救助などがある。更に、図書館や美術館などの文化施設、小中高等学校などの教育事業に税金は使われている。大切な税金の使い道は色々あり、財源も限られている。その制限の中で、市は私たち若者の未来へ税金を投資してくれている。

私は姉妹都市交流に参加し、異文化を自分の五感で感じた。日本と韓国の違いも実感した。世界には自分の知らない事がたくさんある。自分の常識が通用しない事もある。自分と他者、自国と世界の違いを認識し、世界で生きる国際人になりたい。私にそう考えるきっかけを与えてくれた姫路市の派遣交流プログラムに感謝している。私たちの未来を応援する為に税金を充ててくれていることに感謝。姫路市の海外派遣活動が今後、益々、充実した内容になることを心から祈っている。



私は、今年起きた「平成三十年七月豪雨」の事を調べていた時、東日本大震災の復興にも多くの税金が使われている事を知った。税金は、壊れた道路やがれきの撤去、他にもさまざまな復興事業に使われている。そこで私は、どんな事に税金が使われているのか、もっと詳しく知りたくなった。

夏休み中のある日、私はコンビニエンスストアにアイスを買に行った。すると、消費税でお金が少し足りなかった。だからその日は、アイスを買うのをあきらめた。私は、消費税がなかったらなと思った。何のために、誰のために納めているのかも分からない税金に、私はあまり興味がなかったし、納める意味さえ考えたこともなかった。

しかし、何となく知らない間に納めてきていた税金が、東日本大震災や今回の豪雨の復興に使われていると知った。税金の使われ方には様々な方法があるが、その中でも私は、学校と仮設住宅の建築に使われている事にとっても興味を持った。

私が、災害を受けた学校の建築や修繕に関心を持った理由は、震災直後ニュースで学校に行けない私と同じような年代の児童、生徒がいると知ったからだ。勉強したくても場所がない、学校で友達と話したり、遊んだりしたくても出来ない。私は、小学生の時も今も、学校のことばかり考えているし、長い休みがあると早く会いたいと思う。それが、私たち世代にとっての日常だが、被災地ではその日常すら我慢しなければならない。その日常を取り戻す手助けが、税金というシステムでされていると思うと、税金に対してのイメージを変えた。誰も家は、大切な場所だと思うだろう。生活をする中ではもちろん、気持ちの面で大きな支えになると思う。帰れる家があるというのは、とっっても安心感がある。私は、その安心感から心の余裕が生まれ、夢が生まれるのではないかと思う。そして、その夢について語れるのも、夢に向かって努力するのも、やはり家だろう。

税金は、その国が団結したり、その国の人を助けるための大きな手段だと私は思う。ボランティアという、直接的な人助けもあると思う。だが、高齢化が進む日本では実際にボランティアをする人より、ボランティアを必要とする人の方が多いと考えられる。税金は、間接的なボランティアとも考える事ができるのではないだろうか。

もちろん税金は、納めることが法律で義務づけられている。義務というと重荷に感じるが、一人一人が税金が使われている場所や目的をよく理解することで、重荷に感じないのではないかと思うようになった。

私が大人になり、社会をになう一員として税金を納める立場になった時のため、これからも税に対する正しい知識をより多く得て、他の人を助けられる税金を納めていく。

## 国と地域を救う私たちの税

小豆島町立小豆島中学校3年 藪脇 昂生

「あの時は本当に死ぬかと思った。」自分は父から何十回もこの話を聞きました。今から四十四年前の一九七四年七月六日とその二年後の一九七六年九月十二日に、自分の住んでいる小豆島が記録的な大雨に見舞れ、複数の河川が氾濫したり、土砂災害が発生し、甚大な被害を受けました。父がもともと住んでいた家も床上浸水し、当時小学校三年生だった父のへそのあたりまで水が来たそうです。そして一夜明けて山を見てみると、あたかも爪でひっかいたかのように土砂崩れの跡が残っていたそうです。

その後、小豆島には土砂崩れや洪水の被害を最小限に食い止めるための砂防ダムが建てられたり、多目的ダムが建築、改修されたりしました。さらに、それまでは小豆島は毎年必ず水不足に悩まされてきましたが、この多目的ダムが建てられたことにより、洪水を防ぐ治水だけでなく、川の水を上手く利用する利水もできるようになり、水不足も解消されました。これらは全て自然災害が起きた時に適用される激甚災害特別措置法に基き、国費から出されたお金によって建てられました。国費は税金によって形成されているので、つまり税金によって島民の安心安全は守られたと言っても過言ではありません。税金がなかったら、恐らく復興が遅れ、自分たちはこの小豆島で今のような生活を送ることができなかったかもしれません。そう思うと、とても怖くなってしまいます。

自分は最近のニュースでよく「復興特別税」という言葉を耳にします。これは東日本大震災の復興に必要な財源の確保をするためにあるみんなの思いやりがあふれる税です。これらは全て自衛隊の派遣や職を失って生活が苦しくなった人に払われる生活保護費の支援、福祉・医療サービス、道路や公共施設の修復など様々な場面において被災地のために使われました。

自分は税金というものは自分たちがよりよい生活をしていくために必要不可欠なものだと思いました。小豆島の豪雨災害も、東日本大震災もみんなが協力して納めてくれた税金があったからこそ復興が進んできたのだと思います。自分に今できることは、消費税を払うくらいだけど、成人したら、特別復興税も含めた全ての税金をきちんと納めて、これからの日本に少しでも貢献していきたいと思います。そして、このことを子や孫の世代にも伝えていきたいと思います。

## 「命を救う私たちの税金」

福岡市立和白丘中学校3年 北島 藍

もしも、税金がなかったら……。私はそう考えるだけで、怖くなります。  
それは、今年の三月。春休み中のことです。

「今から帰るね。」

そう父から母に電話があつて十分も経たないうちに、もう一度父の携帯から電話がかかってきました。その時作業をしていたため、少しイライラしたような感じで電話に出た母の声は、急に一変しました。

「——分かりました。」

電話を静かに切った母は、私と弟に向かつて

「お父さんが事故にあつた。救急車で病院に運ばれた。」

と言いました。私たちが慌てて病院へ向かうと、父は救急救命センターの処置室にいて、すぐに顔を見ることはできませんでした。その後、緊急手術をすることになり、手術室へ運ばれていく父の姿は忘れられません。

手術が始まったのは夜中の十二時を回った頃でした。しばらくの間、私も弟も睡魔と戦いながら、待合室で待っていました。二時を回った頃、父の会社の人が事故の連絡を受け、私たちを迎えにきてくれて、私と弟は先に家に帰ることになりました。

帰りの車の中で、その人は私に、

「お父さんは大丈夫だよ。警察の人から聞いたんだけど、お父さんが事故にあつたとき、近くにいた人がすぐに救急車を呼んでくれたんだって。」

と言ってくれました。その時はあまり気にしていませんでしたが、父の容体がおちついた後、私は気になって救急車について調べてみました。すると、救急車は私たちが納めている税金で走っていることが分かりました。また、医療費の一部も、税金によって負担されることも分かりました。父の事故は相手がいって、父の過失割合は高くはないけれど、0ではありませんでした。いくら相手の方が負担が重いと言っても、こちらの負担も軽いとは言えません。そんな中、税金による一部の負担は、母にとって本当にありがたいものだったと思います。

私の父は税金によって、命やその後の生活を助けられました。税金は他にも、私たちの教育費やより良いまちづくりのために使用されています。私たちが生活しやすい世の中を作っているのは、税金なのです。

私たちの中には、税金を納めることをマイナスにとらえている人もいるかもしれません。私自身も、消費税が上がるという話を聞いて正直、嫌だなと思っていました。しかし、税金は私たちが生きていくうえで、必要不可欠なものです。税金は時には誰かの命を救います。もしかすると、自分の命を救ってくれる可能性だってあります。

税金の使い道は、あまり知られていません。だから私は、税金が何に使われているのかを多くの人に知ってもらい、税金を納めることの大切さを理解してもらいたいです。

一人一人が生きていくために

天草市立本渡中学校3年 小森 香代子

「税金を納めなければ私たち一人一人は、生きていけない。」

租税教室が終わったときに私が一番感じたことです。それまでの私は、税について考えたことが一度もなく、ただただ毎日の生活を送っていました。当たりまえに学校へ行き授業が受けられる。地域のごみは集めてくれる。川には橋が架かっており道路は整備され、住みやすい環境にかこまれている。これが、当たりまえの生活だと思っていました。しかし、これら全てに税金が使用されていることを知り、税金を納めてくださっている方々に感謝の意を持ちました。

私が一番身近で、税金を納めているなど実感するのは、買い物をした時に納める消費税です。現代の日本社会の消費税率は八パーセントです。これらを納めることは、国民一人一人に義務づけられています。これまでの私は、何も考えることなく消費税を払っていましたが、租税教室で生活に役立てられているということを知ったときは、少しわくわく感がありました。なぜなら、私が納めた消費税は今ごろどこかで誰かの役に立っているのかなという気持ちがわき、自分自身が誰かの支えになっているんだと実感できたからです。

しかし、私は税金で、誰かを支えているだけではありません。私も、多くの人の納める税によって支えられているんだなと思いました。もし税金を誰一人として納めなくなったならば、身近な当たりまえのことも、幸せに暮らせている安心感なども全てが失われてしまいます。私が生きていられること、家族や友達の子らのみんなが元気で笑っていられること、教育が受けられることなどの全てが誰かが納めた税金で支えられていることに私は、感動したし、ありがたく思いました。

命って何ですかと聞かれると多くの方が、大切なもの。生きていられること。と答えるだろうと思います。その通りだなと思います。命と税金は深く関わりがあると私は考えます。

「税金は一人一人の命」

私はこの言葉を頭におき、これからも税金を自分のために、誰かのために納めていこうと思います。

これまでの私の、身近で感じられる全てのことが当たりまえの思考から一転、租税教室で多くのことを学んだ私は、自分が生きられている感謝の思いや命を支えているうれしさの思いが強くなりました。税を身近に感じる。これが地域社会、日本社会を変える第一歩になると信じています。これからは、さらに税を大切に生活していこうと思います。

## 支える税

宜野湾市立嘉数中学校3年 鎌田 結乃

「やったー！留学に行ける！」

英語が大好きな私は、短期留学への参加が決まった時、本当に嬉しくてたまりませんでした。そして今夏、約一か月間のアメリカでの生活を経験し、語学はもちろんのこと、日本とは異なる文化や考え方に触れ、大きく成長することができました。また、在米日本国大使館や国務省、ホワイトハウス等を訪問し、政治に関わる方々と面会したことで、視野も広がり、とても貴重な経験になりました。

私が参加したこの留学プログラムは、私の住む宜野湾市が主催している、宜野湾市中学校短期海外留学派遣事業というものです。毎年、市内の中学生がアメリカへ派遣されていますが、昨年度まで、費用は約半額の自己負担がありました。しかし今年度からは、市が全額を負担し、無料で留学できるようになりました。その財源となったのが、ふるさと納税です。これは、インターネットでのガバメントクラウドファンディングを利用し、全国の方からこの事業への寄付金を募ったものです。インターネット上のサイトから、事業に賛同する人が寄付をすると、その額に応じて税金が控除されたり、お礼品が贈られるという仕組みになっています。

また、そのサイトでは、事業への応援メッセージを紹介するページがあります。そこには、「世界に通用する日本人として成長してほしい」「皆さんの未来を応援します」「大きく羽ばたいて下さい」など、期待のつまったメッセージが数多く寄せられていました。私は、これらを読んだ時、ひとつひとつの言葉に心を打たれました。そして、全国のたくさんの方々が、顔も名前も知らない私たちのことをこんなにも応援して下さっているのだという事を知り、胸が熱くなりました。私は、ふるさと納税で寄付をして下さった方々のおかげで、ずっと憧れていた留学という夢が叶い、貴重な経験の中でたくさんのものでることができました。

私はこれまで、「税とはとられるもの」と、税に対してあまり良いイメージを持っていませんでした。しかし、このプログラムを通して、「税は誰かを支えて、誰かに支えられて、たくさんの人と繋がることのできる、なくてはならないもの」だと思えるようになりました。これは、ふるさと納税だけでなく、すべての税に言えることだと思います。全員がきちんと税を納めることで、医療費の助成や教育費道路の整備など様々な事に税金が使われ、安心安全で快適な社会が実現されているのです。

私はまだ、多くの税金を納めることはできません。ですが、たくさんの人に支えられているという事を忘れず、税の仕組みについてより深く学んでいく事は、今の私でもできる事だと思います。そしていずれは、きちんと税を納められる大人になりたいです。

税金で誰かを支えるために……。

やせ細った腕と足には転落防止用のベルトがまかれ、微動だにしない。わずかに揺れ動く胸の動きのみが懸命に生きようとする意志を私たちに伝えている。私のひいおばあちゃんは認知症をわずらい、二年ほど前から二十四時間体制の医療施設で治療を受けている。毎日のようにお見舞いをする私の母や家族が、言葉には出さなくてもつらい思いをしていることが伝わってくる。呼びかけても反応しないひいおばあちゃんを眺めながら、そしてそれでも諦めずに声をかけ続ける家族をみて、本当の幸せって何だろうという疑問が心の底から湧いてきた。

興味があったのでインターネットで調べてみると、国連が行った幸福度に関する調査結果があることを知った。二〇一八年の調査結果によると日本の幸福度ランキングは五十四位で先進国の中ではかなり低いことが分かった。一方で、北欧の国々が上位を占めていることも初めて知った。こうした幸福度の違いはどこからくるのかをさらに調べてみると、高齢者の幸福感が一因であることが分かった。具体的には、日本では高齢になるほど幸福度が下がっていくのに対して、ほかの先進国、特に北欧では幸福度が年齢とともに増加する傾向がある。このような高齢者の幸福度の違いは、北欧と日本の税制度の違いからきているのかもしれない。例えばデンマークでは所得税が五十五%で消費税が二十五%となっており税率がとても高い。しかし代わりに、医療費・教育費・介護費などが無料になっている。これに対して日本では消費税は八%で低い代わりに、医療費・介護費などは負担する必要がある。また、北欧は日本に比べて高い納税率を達成している点にも違いがあることを知った。税金にもとづいた社会福祉サービスが手厚いかどうかは、高齢者や周りにいる家族の幸福感に大きく影響するのではないだろうか。私のひいおばあちゃんの場合でも、家族が長く続く入院費用をどう負担するかについての不安を抱えていることを漏らしていた。

日本では少子高齢化が進み、高齢者の介護や入院がより多くなることが予想される。このような状況では、充実した社会保障を作り上げるために税金を増やすことはとても重要になると思われる。税金は、税率を決める仕組みそのものと税を納める私たちに支えられている。したがって北欧のような手厚い福祉サービスを行うための税制度や高い納税率の達成方法は参考になるのではないだろうか。

日本に住む人たちが幸せに過ごすことができるためにも、税のあり方を学ぶことは大切だと感じた。これからは社会をより良くするための税の仕組みやほかの国々の取り組みについて、私も積極的に学んでいきたい。また、大切な人たちのために責任をもって納税していきたいと思う。

## 税の『活かし方』

喜多方市立塩川中学校 3年 関本 悠太郎

「欲しい物があるんだけど…」

と要求する僕に対し、母は、

「税金を納めなければならぬから無理。」

と、お決まりのこの台詞でばっさりと切り捨てる。僕の要求は、毎度ながら税金の支払いによって儂く消えてしまうのだ。そして、ふてくされた僕の態度に見兼ねた母は、

「もう中学生なんだから、文句を言う前に税金についてしっかり学習しなさい！」

と、言い放った。腑に落ちない気持ちを抑え、渋々調べてみることにした。

僕達が健康で豊かな生活を送るために、国や地方公共団体は、様々な公共施設や公的サービスを提供している。そのためには多くの費用が必要であり、その費用をみんなで出し合って負担しているのが税金である。学校、病院、公園、図書館、道路など、僕達は普段から様々な公共施設を利用し、また公的サービスに支えられながら生活しているのだ。税金がこんなにも暮らしに密接に係わり合っていたと知り、僕は驚嘆した。同時に、もしも税金がなかったら、公共サービスを受けるのに全ての費用を個人で負担しなければならず、生活を脅かす程の危機的な状況に陥ってしまうだろうと不安を感じた。そう考えると、税金こそが、この国の平和の礎を築いているのかもしれないと思えた。平和とは正に、国民一人一人が築き上げる尊いものだと感じた。

しかし一方では、故意に税金を滞納したり、納税額を偽ったりする人なども存在するのだ。また、国や地方公共団体に対し「税金泥棒！」や「税金の無駄遣いだ！」などと批判する人達も多く、税金の在り方が承知されていない事実に対し、残念に思う。

僕は以前、こども議会に参加した時のことを思い出した。住民の要求に対し、様々な議論が繰り返され、直面する問題に真剣に向き合っている誠意が伝わってきた。僕は、その時の神聖な議場での光景を思い出し、「住民のより良い暮らしのために、税金の使われ方も真剣に議論されているのだろう。」と思った。だから、住民の一人である僕達は、批判的な意見に簡単に同調してしまうのではなく、税金の使われ方をしっかりと認識し、自分の意見を確立させなければならないのだ。

国民の義務である納税。そして、その税金によって支えられている国家。安定した国家が成立してこそ、豊かな未来が訪れるのだ。今後日本は、超高齢化社会を迎えると予想され、社会保障制度にも大きな影響を与えるだろう。同時に少子化も進み、労働力人口の減少も懸念される。さらには、近年相次ぐ自然災害も深刻な問題となっている。日本を取り巻く環境に不安が募る今だからこそ、税の役割をしっかりと理解し、税の「活かし方」を真剣に考えなければならない。遠い昔から受け継がれてきた相互扶助の精神を大切に守り、国家と国民とが互いに最良の関係を保ちながら明るい未来を切り開いていきたいと思う。

## 幸せの種

那須塩原市立三島中学校 3年 山先 心春

みなさんは「税」をどのようなものとして捉えていますか。私は、正直税について良いイメージを持ったことはありません。ですが税についていろいろ調べていくうちに「税の大切さ」について知りました。税は私たち国民一人一人に渡された幸せの種だったのです。

私が「税の大切さ」について知ったのは、ある国を知ってからでした。ある国とは、幸福度が世界で一番のデンマークです。幸福度が一番の理由とは何か。その理由の一つに、「税金が高い」というものがありました。「え？」私は思いました。「税金は、税率が高いほど辛いもの」「税が高いと生活は苦しいのではないか」。でも、それは違いました。消費税 25 パーセントのデンマークの税金を納めることに、デンマーク人は納得しているというのです。その理由は、その税金の使い道にありました。自分が払ってきた税金が将来的には還元されるシステムになっているのです。具体的にどのようなシステムかというところと教育費は大学まで無料。医療費も無料、そして、出産費も無料。さらに、介護も行政が行うというものでした。要するに死ぬまで「無料」なのです。私はこのことを知ったとき、「税金をなるべく払いたくない。」という考えから「税金を払いたい。」という考えに変わりました。

しかし、今の日本に「税金を払いたい」と心から思っている人はどれくらいいるのでしょうか。ときどきテレビで特集されている滞納者たちや増税に関する批判的な声を聞くと多くはないことが分かります。このような考え方や意見が出てきてしまうのは、以前の私のように、税に対してよく理解していないからだと思います。今の日本の消費税は八パーセントで、世界の国々と比べれば、ほんのわずかな税です。ですが、そんなわずかな税のおかげで私たちの「幸せ」は成り立っています。義務教育が無料で九年間受けられることや、きれいな道を歩けることなど意外と身近なところに「幸せ」は転がっています。

私は、身近な「幸せ」を生み出しているのは税金だということに気がつきました。私たち国民は日々、八パーセントの税金を払っています。つまり、私たちは自分たちの将来に向けて、「税金」という「幸せの種」を植えているのです。税金を払うたびに「いつか幸せが返ってくる。」そう思うと自然と税金のありがたみができるような気がします。「税金を払いたくない」「税率を下げしてほしい」そう思っている人たちにこの経験を話して理解してもらいたいです。私は、自分や家族、他の人のために、これからも心地良く税金を払います。そして、大切に大切に、自分のうめた「幸せの種」を育てていきたいです。日常に転がっている数の多くの「幸せ」に日々感謝をして、これからの人生を歩んでいきたいと思います。国民が持っている「幸せの種」を一人一人が大切にしていきたいことを願います。



## 日本と外国をつなぐ税金

東京都立白鷗高等学校附属中学校 3年 山田 佳怜

税金の使い道に何があるか、と聞かれて真っ先に浮かぶもの。教育や道路整備など身近な公共サービスが頭をよぎる人は多いのではないだろうか。

二〇一八年度の国の一般会計歳出総額の予算で、社会保障費、国債費、地方交付税交付金等続く「その他」九兆三八七九億円の中身にはどんなものがあるか、調べてみた。そのうちの五五三八億円は発展途上国向けの経済援助費であった。日本政府が外国に対して行う政府開発援助（ODA）の報道は耳にする。「政府」が行う以上、当然ながら私たちが納めている税金が財源となっているのである。外務省によると、二〇一六年度の経済援助費の計上額は主要国の中でアメリカ、イギリス、ドイツに次いで四位であった。過去にはアメリカを抜いて一位に輝いた年もある。（一九八九年度）。我々は、ともすると税金は私たちの普段の生活に関連する分野に使われているとの先入観を抱きがちであるが、その使い方には想像を超える広がりがある。

現在は専ら援助を施す側に回っている日本でも、海外からの支援を得て戦後復興や大規模なインフラ投資を進めてきた時代があった。東海道新幹線や東名高速道路の建設などもそうである。海外からの援助を受けて戦後復興し、経済発展を果たした日本は、一九五四年から援助を出す側にも登場する。

しかし、少子高齢化が急速に進む中、現在の日本の財政事情はかつてなく悪化しており、少しでも節約したい状況にあることも事実である。近々、自ら窮する中で他人を助ける余裕はなくなるかもしれない…そんな考えも頭をよぎる。

思い起こせば東日本大震災の直後、世界各国から多くの支援が届けられた。その中には自国の経済発展を支えてくれた日本に対する恩返しをこめて、アジアの発展途上国から届けられたものもたくさんあった。ODAには第二次世界大戦中に日本がもたらした戦禍を補償する意味合いもあるようであるが、世界の国々が必要に応じてお互い助け合う、そんな本来の援助の姿を、そこに垣間見た気がする。

資源や食料など多くを海外からの輸入に依存する日本にとって、援助は重要な経済外交の手段でもある。先進国も発展途上国も分け隔てなく、困ったときに助け合う。それが持続的な国際経済の発展、世界の共存・繁栄へとつながっていくのである。税金は身近な公共サービスを賄うものという受益者としての納税意識も大切ではあるが、日本と世界の架け橋への長い時間軸でみた投資という役割も担っているのである。自国第一主義的なスローガンがもてはやされる風潮にあるが、経済のグローバル化を支えるために税金を払うのだ、という感覚は、私は好きである。

## 支え合う税金

横浜市立栗田谷中学校 3年 植松 千賀

近頃、「増税」という言葉を頻繁に耳にするようになりました。そして、いよいよ来年の十月には、消費税が十パーセントに引き上げられます。しかしそれに対し、多くの人々が不満や不安を募らせ、社会問題となっています。

増税には様々な目的がありますが、年金や日本の社会問題の解決などが大きいと思います。しかし、私達がこうして何気なく過ごしている間にも、日本の借金が何十億、何百億円と増え続けていて、私達にとっても大きな問題となっています。日本人にとって日本の借金が減ることはいいことであるはずですが。それなのに、なぜ増税に反対する人が多いのでしょうか。

私は、まず母に増税について聞いてみました。母は、「日々の負担が増えるから嫌だと思ってしまう。」と言いました。確かに日本の借金は大きな問題であるけれど、母のように家庭を持っている人は、自分達の生活を第一に考える為に、どうしても反対意見が多くなるのだと思います。次に、大学で税金について勉強している姉にも意見を聞いてみました。その時に印象に残った言葉があります。それは、「私達の為の税金を、私達は大切に出来ていないんだよ。一方通行では成立しないんだ。」です。税金は、私達の生活を支え、日本をも支えています。そして、その税金はこの日本に住む私達の生活の中から生まれています。それは一方通行ではなく、お互いに循環して成り立っているものです。それを現代の私達は、一方通行に考えてしまっているのではないのでしょうか。私達は知らない内に、税金に支えられているのです。

そのことを特に実感した出来事があります。姉が急病の為、救急車で運ばれた時のことです。その時は夜中でしたが、救急車を要請してから到着までのスピードには驚かされました。そして、勉強をする中で、救急車も税金によって支えられていることを知りました。あの時の出来事も、税金によって成り立っていたことを知った時、少し感動しました。日本に住む皆で出し合った税金で、あの時姉は助かりました。今も私達の税金によって、誰かの命が助かっていると思うと、心がじわりと温かくなりました。私達は誰かに支えてもらいながら、同時に誰かを支えているのです。

税金に関する問題で解決すべきことは、確かに多くあります。家庭の負担が増えることも事実です。しかし、救急車などの今の日本のサービスの多くが、税金によって成り立っていることを私達は改めて知るべきだと思います。安心して暮らせる社会は当たり前ではありません。誰か一人の力によって成り立つ安心ではなく、国民が少しずつ支え合うことで成り立つ安心です。私はこの作文を通して、税金と「支え合う」という言葉の繋がり深さを知ることが出来ました。私も税金を通して、誰かを支えられる人になりたいです。

## 生活を支える税金

坂井市立三国中学校 3年 岸名 優佳

私が小学生のとき、消費税率が五パーセントから八パーセントに引き上げられた。「いつも買っている文房具やおやつが高くなる。」と、子供ながらに困惑したことを今でも覚えている。「税金」と言われても、子供の私にはさっぱり分からず、損をしているようで、良いイメージを持っていなかった。しかし中学生になった今、税の大切さを身をもって感じている。

私は祖父母と同居している。ある日、いつものように祖母の通院について行ったときのことだ。治療後会計で、

「今日のお支払いはありません。」

と言われ、私はとても驚いた。母に話を聞くと、高額医療費は税金で補助されているそうだ。そのとき祖母は、

「ありがたいね。」

と感謝していた。私は病気の人にも優しい社会なのだな、とうれしく思った。

また私は今年の三月に、市の国際交流事業の英国派遣団として、イギリスで研修を受けた。ホームステイや現地校との交流、文化施設の視察など、英国での経験は、私にとってかけがえのないものとなった。私たちの派遣の費用には自己負担金だけでなく、市の税金も使われているのだと気がついたとき、市の代表として精一杯学んでこようという、責任感が芽生えた。顔も名前も知らないたくさんの人々が納めた税金が私たちのために使われているのだと思うと、感謝の気もちでいっぱいになった。

さらに、今年二月には福井県内を豪雪が襲った。除雪機は連日フル稼働で、福井県内の除排雪費は百億円に上ったそうだ。国道が通行止めになったり、車が雪に埋まってしまったりと、被害はとても大きいものだった。私自身、雪の重みで曲がってしまったガードレールや折れてしまった道路標識などをいくつも見た。街の復旧には、莫大な税金が使われている。

このように、あまり身近に感じていなかった「税金」に、私たちはいつも支えられているのだ。もしも「税金」がなかったら、と考える。私たちが毎日通っている学校も、交差点の信号機もない。私たちは安心して暮らすことができないはずだ。みんなが納める税によって、みんなに優しい社会が創られている。

今、日本では少子高齢化が進んでいる。今後ますます、福祉に関わる費用は増えていくだろう。また最近では、豪雪だけでなく、地震や豪雨などの自然災害が多発している。それらを乗り越えるために私たちにできることは、税金をしっかりと納めること。一人ひとりの大切な税金で、社会を支えていかなければならない。私ももう少しで、税を納める立場になる。税の有効活用を求めると共に、嫌な顔をせずしっかりと、税を納めていきたい。

## 税金のおかげ

袋井市立浅羽中学校 3年 藤田 航大

僕の誕生日は、平成一五年八月十八日です。この日に僕は、産まれました。他の人達とは異なり、予定日より二ヶ月も早い、八ヶ月で極小未熟児として産まれました。体重は、とても小さい「一三〇〇グラム」でした。予定よりも二ヶ月も早く産まれました。肺機能も十分に発達しておらず、自分で十分な呼吸をする事も出来ませんでした。生きていく上での機能がしっかりと働いていなかったため、僕は、保育器に入り、点滴などの治療をしながら少しずつ体を大きくしていきました。毎日の治療費、点滴費用、検査費用などで、高額な治療費を負担しなければなりません。高額な治療費を我が家だけで負担することは、とても難しい事でした。そこで、僕のような二〇〇〇グラム以下の赤ちゃんの治療を補助するために、「未熟児養育制度」というものがありました。各家庭への負担を、少なくしてもらえるとというもので、申請を行ない、認められれば、どの家庭でも費用を軽減できるという制度です。実際に僕の家庭も、この制度を利用し、治療を受け続けてもらいました。

僕の兄も小さく産まれて、同じ制度を利用しました。兄の出産の時には、母親も「高額医療制度」を利用して治療を受けたそうです。その時も、高額な費用を制度を利用することで、軽減されました。

もし、このような制度がなかったらどうでしょうか。高額な費用を自分達で負担しなければならなかったり、せつかくこの世に産まれても、十分な治療を行うことが出来ないまま、なくなってしまうたり、助かる命も助けられる事ができなくなってしまうたり、こんな事はとても残念だと思います。「未熟児養育医療制度」「高額医療制度」これらは、国民一人一人が納めている税金から成り立っている制度です。

学生の自分達で関係している税金といえば「消費税」があります。これは、買い物をすれば直接八パーセントの税金が、加算され、支払いをしています。社会人になると、たくさんの税金を支払わなければなりません。税金には、国に納める国税二五種類と、都道府県や市町村の地方自治体に納める地方税二十六種類に分類されるそうです。たくさんの税金を支払わなければならない、そう思うと何だか損をしてしまうと思いがちです。僕は、産まれたとき税金のおかげで助けられました。だから、同じように苦労している人々のためにも、僕は一生税金を払い続け、恩返しをしたいと思います。

## 税金が助けてくれること

鳥取大学附属中学校 2年 後藤 真実

昨年十月のことでした。祖父が危ないと電話があり、父が慌てて鳥取から長崎の実家に帰ることになりました。祖父は、心筋梗塞を起こして救急車で病院に搬送され九死に一生を得たこともありました。やせこけた祖父は、父を見てとても喜び、医療スタッフの懸命な治療のおかげで敗血症を克服しました。しかし体力の低下は激しく、今までどおり独りで生活していくことは困難となりました。助かってよかったと喜んでばかりもいられなくなりました。祖父と祖母は、訳があって別居しています。祖母は、退院後の祖父の生活をどうするかという問題に苦悩することになりました。

八十歳を超えた祖母が、祖父を預かってくれる施設を探すのは困難を極めました。ある施設では、空きがありません。ある施設では入れますが、月に三十万かかります。お風呂に一回はいる毎に二千円加算されます。祖母は、途方にくれて父に電話をかけてきました。父も必死にインターネットで施設を探しました。見つからずに、時間だけが過ぎていきました。祖母は、自分が倒れそうだとすごく弱気になっていきました。祖父が助かったことを、喜ぶ気持ちに暗い影が落ちていきました。

そんな時に、病院から長崎市のケアマネージャーさんへ連絡を入れてくれました。その方が、親身になって施設を探してくれたおかげで、祖父が住んでいた家から歩いて十五分の場所に施設が見つかりました。祖父は、その施設のご飯が美味しいと前向きに暮らしています。親身になってくれた長崎市のケアマネージャーさんの給料は税金です。涙がでるほど感謝しています。きっと、たくさんの方がそういう経験をしていると思います。

話は変わります。平成三十年七月豪雨によって多くの尊い命が失われました。警察や消防の方など救助する方は、自分の命を懸けて多くの命を助けてくれました。お金のためだけに命を捧げる人はいないと思います。人を助けたい、人への愛をもって仕事をしているからこそできた、命がけの仕事であったと思います。税金は、そういう方々のとても尊い大切な仕事を支えています。

祖父が心筋梗塞の時に、搬送して下さった救急隊の方々、施設を必死で探して下さったケアマネージャーの方。本当に後藤家は人と人の優しさに感謝して生きています。

税金は、大切でありがたいと父はよく言っています。税金があるからできる仕事があり、その仕事のおかげで本当に涙が出るほど感謝した経験があるからだと思います。お金は大切だけど、人の優しさや愛には勝てないと思います。ニュースでは今も被災地でボランティアの方々が汗を流して働いています。人を助けたい気持ちがあふれている日本という国をととても誇りに思っています。

## 災害と納税の関わり

大洲市立肱川中学校 2年 和氣 帆乃加

七月七日の西日本豪雨によって、私の住んでいる肱川町は大きな被害を受けました。中学校、公民館、道路や橋など、見慣れた景色が、一瞬にして大きく変わり果ててしまいました。

被害があった次の週から学校が臨時休業になり、私は学校や地域の片付けの手伝いに行きました。子どもだけれど、少しでも力になりたいと思って頑張りました。鹿野川の町は自宅の二階まで浸水した家が多く、元の場所にはとても住めない状況でした。私の家の近くに避難所が設置されており、「住む場所がない。これからどうしよう……。」と、大人が集まって話しているのを、よく耳にしました。毎日、不安な顔をされていて、それを見る度に心が痛みました。私が通っている中学校もグラウンドや特別校舎がめっちゃくちゃになり、「いつになったら元のように勉強や部活動ができるのだろう。」と、とても不安でした。

災害が起こってから一か月半が経ち、町のごみが少しずつ片付けられていき、道路も復旧していきました。自衛隊やボランティアの方々の協力や、義援金をたくさんいただき、本当にありがたい気持ちでいっぱいでした。

しかし、町の復旧には税金も大きく関わっていることを知りました。税金は、救急車や消防車の出動のために使われることは知っていましたが、今回のような自然災害のときにもみんなを救うために使われるということを初めて知りました。税金が、このような形で自分の町を救ってくれるとは、夢にも思っていませんでしたので以前に比べ、税金のありがたさをより身近に感じるようになりました。

八月下旬には、私の家の近くに、仮設住宅が建ちました。家を失った私の同級生にも、そこに住む生徒がいます。暑い避難所生活や、親戚の家での生活を終え、仮設住宅に入居できる人が増えて、本当によかったと思います。被害を受けた人々にとって、このような税金の使われ方は心強いだらうと感じました。

町や学校が元の姿に戻るのには、まだかなりの時間がかかると思います。仮設住宅の数は限られている上、まだ十分な生活を送ることはできていません。私の中学校のグラウンドも夏休み中に復旧することは難しく、体育大会は九月末に行われます。いつも乗っていたスクールバスも浸水し、現在は修理に出されています。しかし、税金などのたくさんの援助を得て、体育大会や元の学生生活ができるようになることに感謝して頑張りたいと思います。

私が今納めている税金で思い浮かぶのは消費税ですが、大人になるといろいろな税金を納めるようになります。税率も上がり、納めるのが大変に思うかもしれません。しかし、そのときは今回、助けてもらった感謝の気持ちを持って納めたいです。また、「私が納めたこの税金がもしかしたら他の誰かを救うかもしれない。」という気持ちで税金と関わっていきたいと思います。

税金ありがとう！！

五島市立福江中学校 3年 保家 廉太郎

税を考えてみた時に、生まれた時の話を思い出し、いつだったか母がくれた病院の領収証のコピーをごっそり机の引き出しをかき混ぜて捜してみた。

二百七十万三百二十六円、これは平成十五年八月二十四日から九月二十六日までの僕の手術代と入院費の請求額である。でもその請求に対して両親が支払ったのは二万六千五百十六円だった。差額の二百六十七万三千八百十円は国が支払ってくれた。つまりこのお金は税金で支払われている。「オギャア」と生まれてすぐに税金のお世話になってしまったわけです。このほかにも僕は救急車に三回も乗せられ、自衛隊のヘリコプターで大村の国立病院まで運ばれました。これらも全て税金を使っています。もしもこのような制度がなければ、僕の両親はいきなり大金を支払うことになり、とても困ったと思います。困ったを助けてくれたのが税金ということになります。

それから僕は入退院を繰り返し、僕一人で税金をいったいいくら使ったのかわかりません。この制度があつてよかった、日本に生まれてよかったと心から思います。

ふと、父にいくらぐらい税金を納めているのか聞いてみました。父は給料明細を見せてくれました。一人の大人がこんなに税を払って、僕を支えてくれているのだと感じ、単純に「大人ってすごいな」と思いました。父に言わせると「勝手に引かるっつたい」なのですが、大人は社会と家族の両方を当たり前のように支えている。大人の定義はこれかもしれないと思いました。僕もそんな大人になれるのでしょうか、いや、これまで使った分を僕は返さなくてはなりません。僕と同じように病気を持ってきた子供や、学校や、社会の為に税金はととてもとても大切です。僕は中学生なので、まだ税金は消費税くらいしか払う事はないのですが、こんなに税金で高くなるのか！と驚くこともありますが、税を納める意味を解ったからには、そういうものだと納得できる大人になりたいです。

税金の作文といわれても、ピンと来ませんでした。少し考えると、当たり前前に思えることが税金の力で叶っている事が解ってきました。このことを皆はもっとしるべきだと思います。当たり前だと思っていたことが、実は周りの多くの大人に支えられていること。この作文を書く前と後では見え方が変わりました。僕がこれからどれだけ働いて恩を返せるかわかりませんが、できるだけたくさん返せるよう頑張ってみるつもりです。これからも僕の暮らしていく日本が豊かであるために税金は絶対不可欠なものです。日本を支える柱の一つになれるよう、自分と家族と社会を支えられるような人になってみせます。

## 税制改革の原点

さつま町立山崎中学校 3年 中山 知昭

今年の鹿児島は、明治維新百五十周年で盛り上がっている。我が家でも毎週欠かせず、大河ドラマ『西郷どん』を観ている。新聞でも、明治百五十年をテーマにした特集記事が多くなっている。八月中旬頃の新聞には、「地租改正」の見出しで、明治政府が樹立した当初の税制改革の特集があった。

記事によれば、明治政府樹立後、厳しい財政事情に頭を悩ましていたのは大河ドラマにも登場する大久保利通である。そして、実務を任されたのが、同じ薩摩出身の松方正義であった。記事には、税を米納から金納に変えて土地の所有を認める地租改正を断行したと書かれている。明治初期、郷土の先人の尽力によって今につながる税制改革がなされ、税収が安定化し、新体制を支える財源が確保されたのだった。

税制改革にあたり、大久保利通がもっとも重視したのは「公平性」で、地租改正については「公平画一」を原則としたとある。

しかし、公平性を重視したとは言っても、理想と現実の差による悲劇もあった。税制改革の移行期、地租改正によって減税になると期待していたのに、実際には増税になった地域も多く、農民たちが怒りをあらわに、役所や銀行など納税の窓口だった場所を襲うという事態も、全国各地で発生したという。

暴動こそないが、今の時代でも増税に対しては反発の声が強い。別の日の新聞の読者欄には、来年十月の消費税増税に関連して、「高負担低福祉」、「逆進性の矛盾」、「ガソリンの二重税」、「自動車重量税の重課」などを厳しく指摘する意見が掲載されていた。

税により、必要不可欠な公共サービスがなされ、国民の生活基盤が支えられている事実はだれも否定のしようがない。増税が必要な現状から目を背けるわけにもいかない。新聞に投稿した方も、何が何でも増税反対ということではなく、今の日本の、税を取り巻く不公平感に憤っているようであった。

明治政府の税制改革にあたり、大久保利通が公平性を重視したことは、納税する立場の人の心がわかっていただけではないか。そうではないとしても、税制改革の原点が公平性であったことは間違いのないと思う。

受益の公平性や情報共有の公平性なども重要だが、第一の公平性は、やはり、納めるべき税をだれもが確実に納めるといふ、納税負担の公平性であろう。先日、新聞で見たことある税務署関係の方の「善良な納税者には丁寧に、悪質な納税者には厳正に対応する」との言葉は、この公平性を支える重要な一つだと思う。

今後の『西郷どん』で、明治政府樹立後に税制改革が断行される場面が出てくるかはわからないが、できることなら、断固として公平性を主張する大久保利通の姿を観てみたい。



ある SF 小説を読んでいると、こんな描写があった。高度な AI を搭載したアンドロイドが人間と同じように暮らし、会社に勤め、罪を犯せば逮捕され、そして市民として税を納めているのだ。もちろん現代にはまだそのような高度な技術は存在していないが、これからの世界を想像してみるとこういった未来もあながち夢物語ではないのかもしれない。

近年のテクノロジーの発展はめざましく、数十年後には人工知能が人間の能力をあらゆる面で凌駕してしまう時代が来るという予測もある。最近ではソフトバンク社の「ペッパー」をはじめとする人型ロボットを置く店を見かけることも多く、AI 技術を業務に取り入れる企業も増えてきている。そうした中で、これらの技術に取って代わられることで人々の雇用機会が減ることを危惧する声も上がっている。人々の雇用が減れば、必然的に政府の税収も減少してしまうことになる。

また、現在日本が抱えている大きな問題の一つとして、「少子高齢化」が挙げられる。国民の平均寿命が年々上昇していく中、高齢者人口に対する労働人口が割合が小さくなることで、高齢者向けの年金や医療保険などをはじめとする社会制度の基盤が弱まることが予想される。そのため、財政面や生活面での働き盛り世代の負担が大きくなることが問題視されている。

少子高齢化、高度情報化によって大きく変化していくであろう日本社会に合わせた税金の新しいカタチとして、件の SF 小説の世界で描かれたような「ロボット税」の導入に一考の価値があるのではないだろうか。人間における「所得税」にあたるものを社会の中で働くコンピュータシステムやロボットたちに対して課す。即ち、ロボットの働きがもたらした利益に応じた金額を企業が行政に納めるというものだ。一見すると突拍子もないアイデアのようだが、前述した高齢化や機械化によって減少した税収をそのまま補えるという大きなメリットがある。とはいえ、現実的には多くの問題が存在していることも確かだ。第一に、どのような機械を「ロボット」とみなして課税対象に含めるか、という線引きが困難であることが挙げられる。また、普通の労働者と違ってロボットの生産性が給与額として明確に弾き出されることはないため、どのように課税額を定めるかという点で工夫が求められるだろう。

「ロボット税」は現状だと採用は難しいものだが、これはあくまでひとつの例にすぎず、今の時代ならではの財源の確保の仕方は他にも色々考えられると思う。次々と変化していく現代社会に対応するために、行政にはこのような先進的な試みが求められていくのではないだろうか。これからの日本のために、新しい税のカタチが模索されていくことを期待したい。